

(4) 古墳時代中・後期の遺構・遺物

古墳時代中・後期に比定される遺構は、次のとおりである (Fig.38)。

SH 1～24 5世紀後半から6世紀初頭にかけての住居跡 (住居跡等の遺構配置図は、Fig.39参照)

SB 1 6世紀初頭前後の掘立柱建物

SK 1・2 5世紀末前後の土坑

SR 1 古墳時代中期から後期の流路

SD13～21 SR 1に付属する溝。このうちSD11が古墳時代中期に比定されるほかは、すべて古墳時代後期の所産である。

SL 2 古墳時代の包含層

以下、遺構・出土遺物の詳細を紹介する。

住居跡 植田市遺跡で検出された住居跡は、A区(88年度調査区)で2基、L区(91年度調査区)で22基、M区(同)で1基の総数25基である。住居跡が集中する部位は91年度調査区のL区南側周辺で、当該地点は沖積低地の微高地上に相当する。住居跡は出土遺物より5世紀後半代(SH13・SH21・SH22)と5世紀末前後(SH1～12・SH14～20・SH23)の2時期に大別できるが、後者は切り合いが多く、さらに細分される可能性がある。5世紀末前後に比定される住居は陶器編年第I型式4・5段階(TK23・TK47)の須恵器を出土するものが多く、なかには造りつけのカマドを有するものがあり注目される。植田市遺跡におけるカマドを有する住居跡は、現状では大分県下での最古段階のものであり、東九州地域におけるカマドの出現時期を考える上での標式的な資料となる。以下、時代順に各住居跡の詳細を記述する。

SH13 (Fig.40) L区北側に位置する平面方形プランの住居跡である。中世および近世の溝の構築により切られている部分があるが、規模は一辺4.3m、面積18.5㎡、深さ15cmを測る。支柱穴は4本で、住居跡のほぼ中央に地床炉を有する。地床炉部分も近世の溝により切られているが、径1m前後の浅い皿状の掘り込みを持ち、その中に焼土が認められる。出土遺物には土師器の埴・甕等が認められ、5世紀中葉から後半代に比定できるものである。

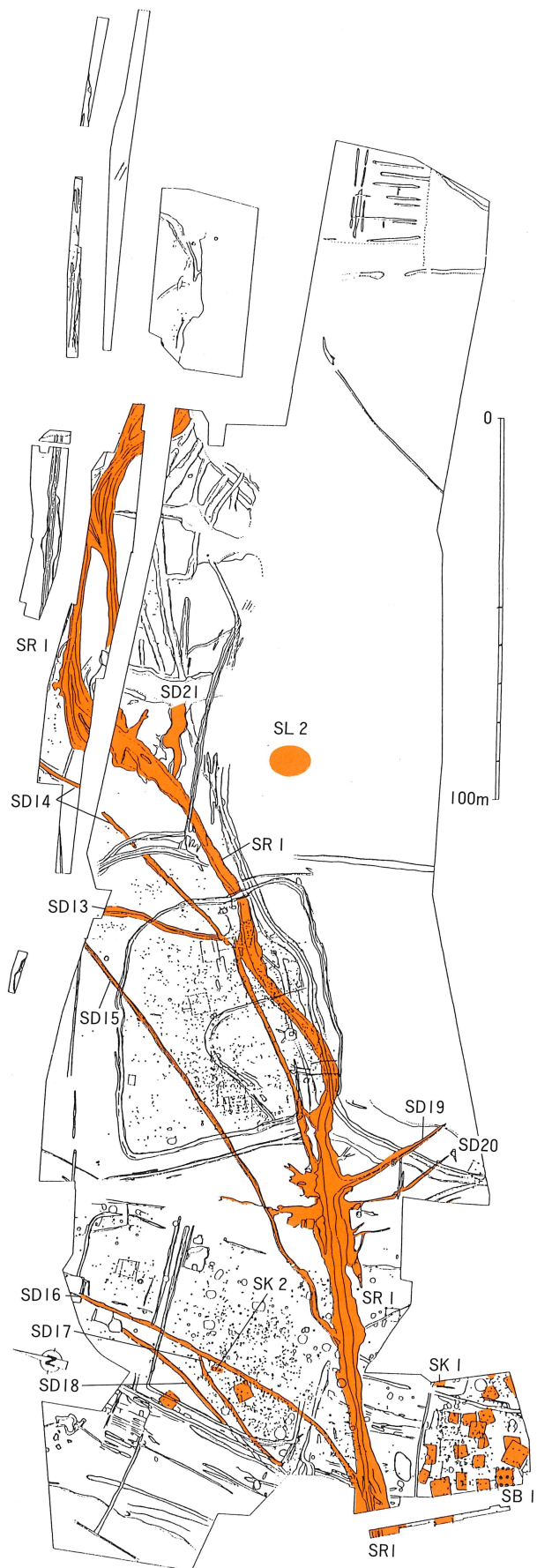


Fig. 38 古墳時代中・後期の遺構



Fig. 39 住居跡等遺構配置図

※数字は住居跡番号

黒は中世以降・青は古墳時代の流路と溝・橙は住居跡と土坑

出土遺物 (Fig.41) 1~4はいずれも土師器である。1は壺の破片で、外面にハケメ、内面にナデを施す。2は器高がやや低い甕で、口縁部は外反しながら直立する。胴部外面にはハケメ調整、内面には削り調整を施し、口縁部内外面付近はナデ仕上げを行なっている。3・4も甕で、丸底の底部を欠損するものである。口縁部はやはり外反気味に直立している。器面調整は同じく胴部外面にハケメ、内面に削り調整を施す。口縁内外面付近はナデ仕上げを行なっている。

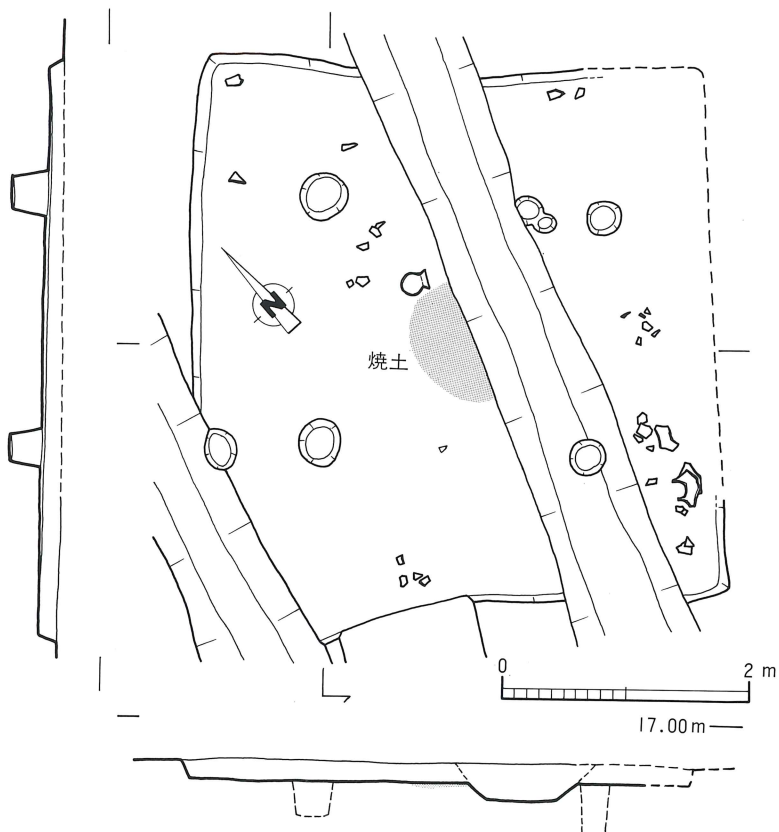


Fig. 40 SH3実測図 (S = 1/60)

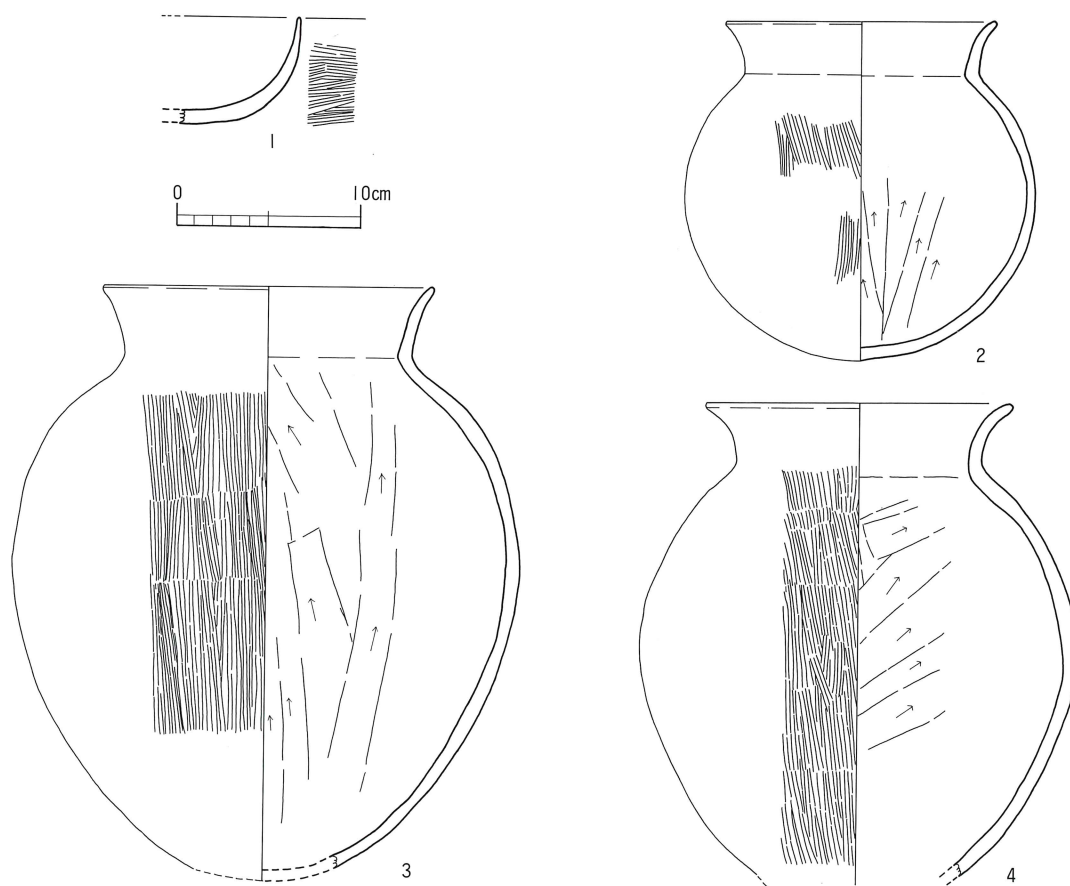


Fig. 41 SH13出土遺物 (S = 1/4)

SH 6 (Fig. 42) L区南側中央に位置する平面略方形プランの住居跡である。西側は中世の土坑SK 6と切り合い関係を持つ。規模は東西3 m、南北3.6 m、面積10.8 m²、深さ50 cmを測る。床面上には径20 cm、深さ15 cm前後を測るピットが数個認められるが、その位置と規模からいずれも支柱穴であるとは思われない。埋土は基本的に単一の様相を呈するが、炭化物を多量に含み、焼土塊も一部に認められた。埋土中には多量の土器を含むが、すべて破片の状態に投げ込まれたような出土状況を呈している。従って、炭化物や焼土塊も住居の焼失に起因するものではなく、住居廃絶後の投棄によるものと思われる。出土遺物には多量の土師器のほか、滑石製小玉、砥石などが認められた。これらは共伴する土師器の年代観から、5世紀中葉から後半に位置づけられるものである。

出土遺物 (Fig. 43・44) 滑石製小玉 (Fig. 43-1~11) は11点を検出しており、直径4~5 mm前後、孔径1.5~2 mm前後、厚みは1~4 mm前後を測る。12は結晶片岩製の砥石で、3面が使用されている。Fig. 44-1は土師器の複合口縁壺である。第一次口縁部と第二次口縁部との境の稜はやや甘く、口縁端部は丸く仕上げる。胴部外面にはハケメ調整、内面には削り調整を施す。口縁部内外面にもハケメ調整を施すが、最後にナデ仕上げを行なうためハケメが消失している部分がある。2は中型の単口縁壺で、口縁端部は丸く仕上げられ、底部は丸底である。胴部外面にはヘラ削り状のナデ、内面には削り調整を施し、口縁外面にはナデ、内面には削り調整が認められる。

底部が赤変しており、胴部外面にススの付着が認められるため、煮沸に使用されたものと思われる。3はやや大型の単口縁壺で、胴部下半部と底部を欠損する。口縁端部がわずかに外反する。胴部内外面にハケメ調整、口縁内外面にナデ調整が認められる。口縁部と頸部の境には接合のための指頭痕、胴部内面上半部には粘土紐積み上げ痕が残る。4~7は土師器甕で、4は球形状の胴部に丸底の器形を呈する。胴部外面にはハケメ調整、内面には削りの後ナデ仕上げを行なう。底部は赤変し、胴部外面にススの付着が認められる。8は小型の鉢で、口縁を平坦にしようとする意図は特に認められず、端部は尖り気味に仕上げられている。内外面にナデを施し、底部付近には指頭痕が認められる。9は小型丸底の鉢で、内外面ともにハケメ調整の後ナデを施す。6の口縁部は外反気味に直立し、胴部以下を欠損する。胴部の欠損部位は、粘土紐の接合部分に対応する可能性がある。11も鉢で、口縁内外面にナデ調整、胴部外面にハケメ調整、内面に削りを施す。胴部内面上半と底部付近には粘土紐積み上げ痕が残る。12~17は高坏で、いずれも口縁、脚部がラツパ状に開く器形を呈する。また12には、脚柱部内面を除く器壁全体に赤色顔料の塗布が認められる。

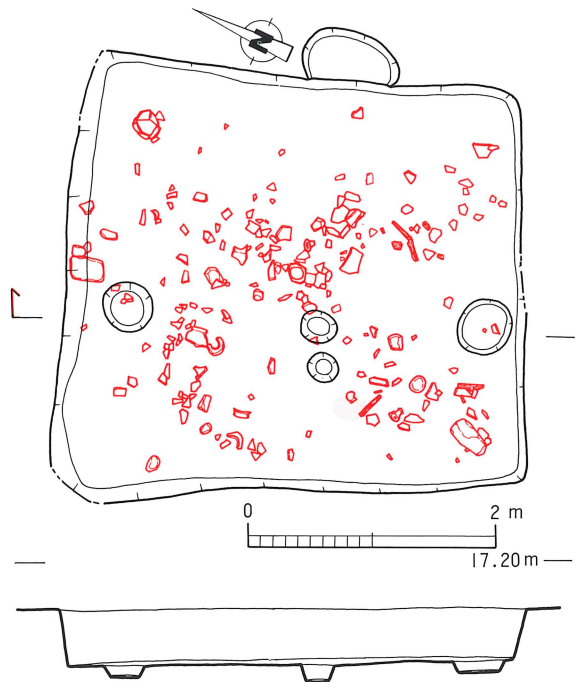


Fig. 42 SH 6 実測図 (S = 1/60)

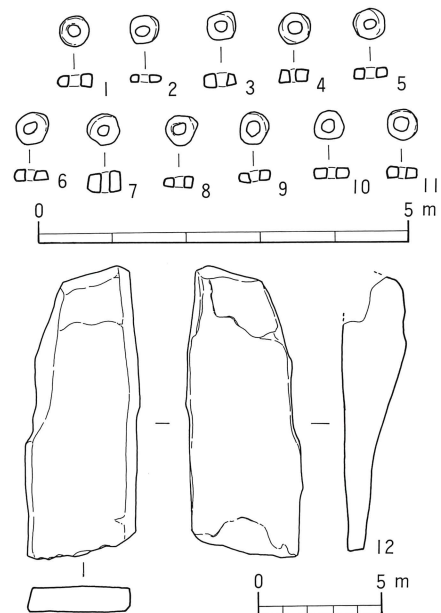


Fig. 43 SH 6 出土遺物①
(1~11は S = 1/1, 12は S = 1/3)

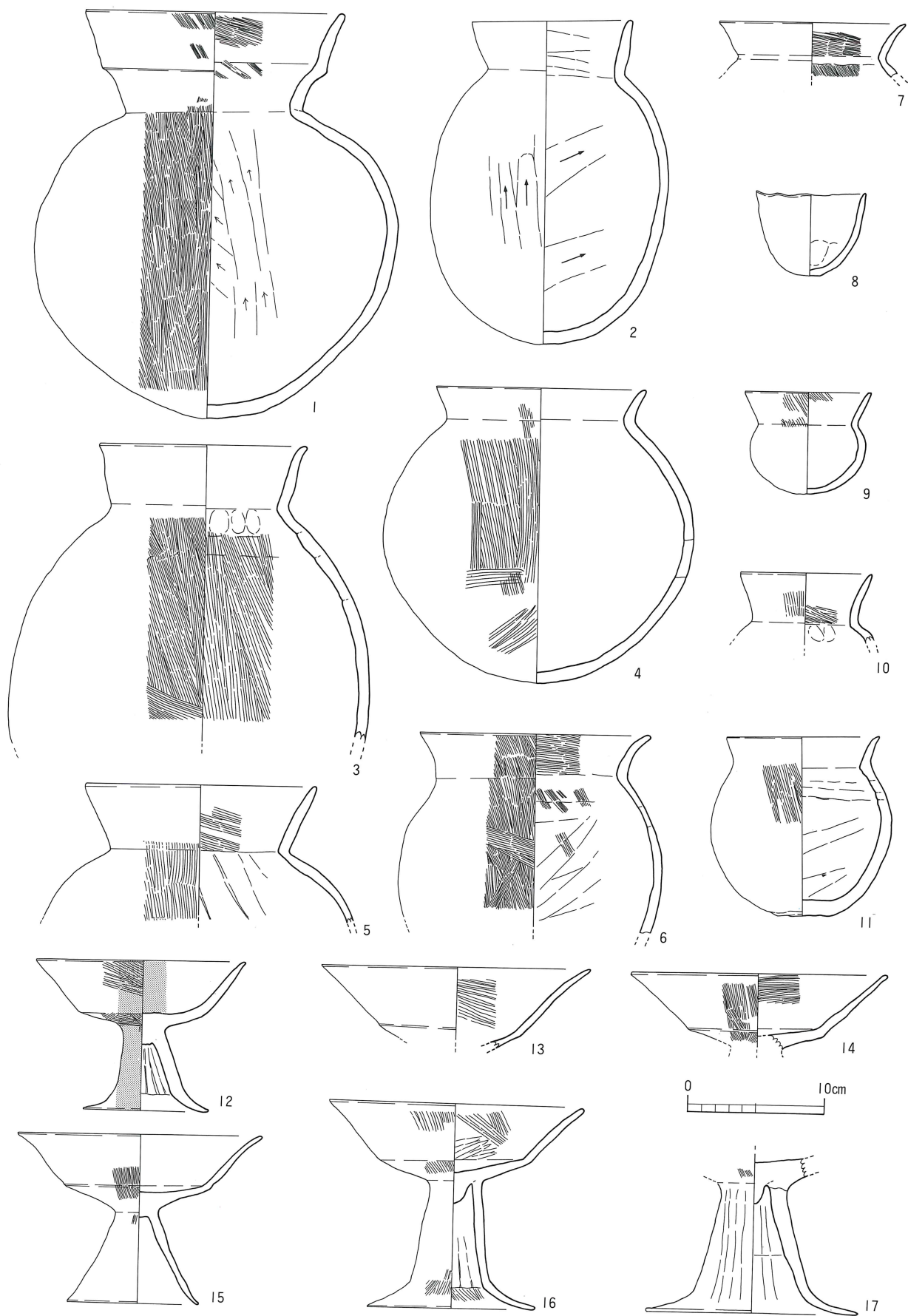


Fig. 44 SH 6 出土遺物② (S = 1/4)

SH22 (Fig. 45) L区で検出された不正方形プランを呈する小型の住居跡である。中世から近世の掘立柱建物SB14と切り合い関係を持つ。規模は東西、南北とも2.5~3m、面積7.6m²、深さ35cmを測る。床面には数個のピットが存在するが、この住居跡に伴うものではない。また南壁付近の床面には焼土の広がりが見られた。5世紀中葉から後半に位置づけられる土師器が出土している。

出土遺物 (Fig. 46) 1~5は土師器高坏で、1・2は坏部、3~5は脚部の破片である。いずれも口縁、脚部がラッパ状に開く器形を呈するものであるが、5は脚柱部が円筒状に直立する形態となる。6は直立気味に立ち上がる複合口縁壺の口縁部で、残存部の器壁内外面にハケメ調整を施す。7・8は甕で、7は胴部外面にハケメ調整、内面にナデ調整、口縁内外面にナデ調整を施す。頸部内面には、口縁部と胴部の接合に伴う指頭痕が認められる。8は口縁外面にナデ、内面にハケメ、胴部外面にハケメ、内面に削りを施す。9は大型の複合口縁壺で、外面にハケメ調整が認められ、内面はナデ仕上げされている。SH22とSH21からの破片が接合しているが、両者が位置的に近接していることやSH21の残存状況が不良であることなどから、SH21からの破片も本来的にはSH22に帰属するものと解釈したい。

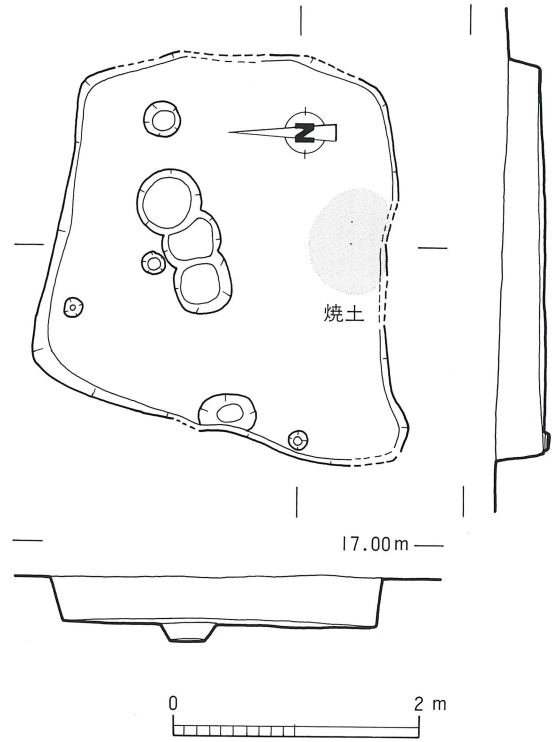


Fig. 45 SH22実測図 (S=1/60)

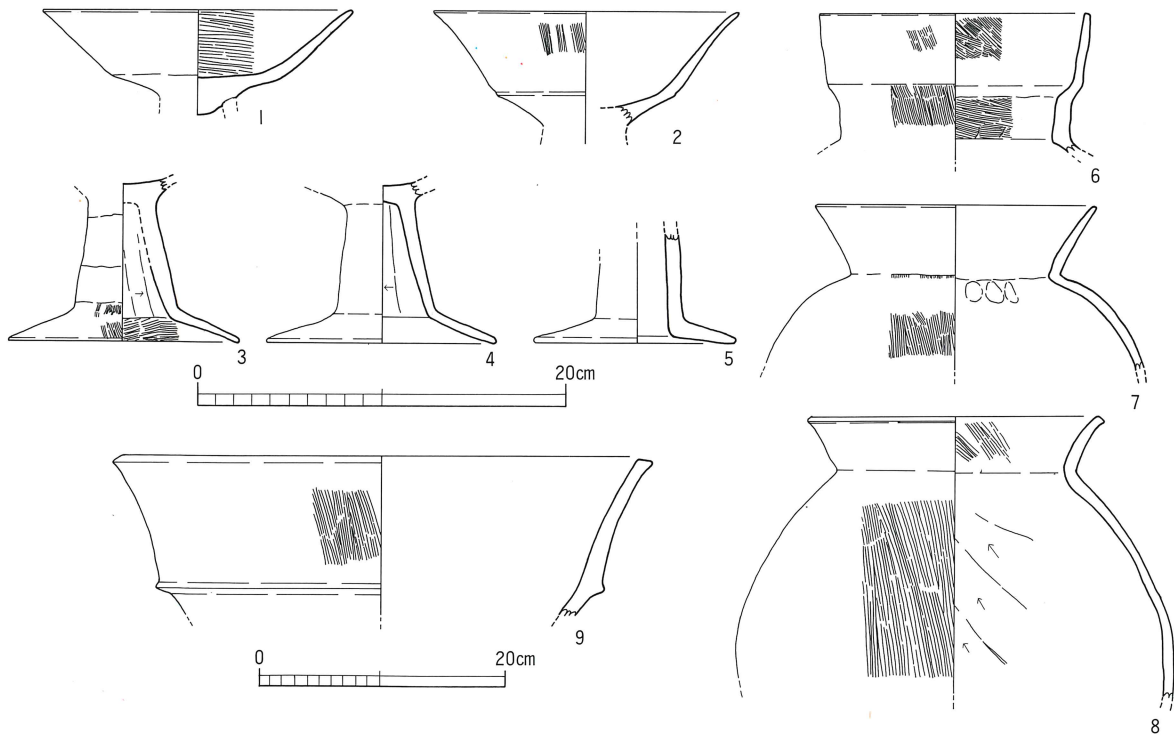


Fig. 46 SH22出土遺物 (1~8はS=1/4、9はS=1/6)

SH1・SH12 (Fig.47) L区南側で検出された切り合い関係にある2棟の住居跡で、構築順序はSH12→SH1である。SH1は東西7m、南北5.7m、面積40㎡、深さ25cmを測るやや大型の住居跡で、支柱穴は4本である。床面に焼土などは認められない。埋土中からは多量の土器が出土している。出土遺物の大部分は5世紀末前後に比定される。SH12は南北4.5m、東西は不明、深さは18cmを測る。残存部の床面には、焼土や柱穴は認められない。出土遺物は埋土中から土器の小片が出土しているのみで、その詳細な時期は決定できない。

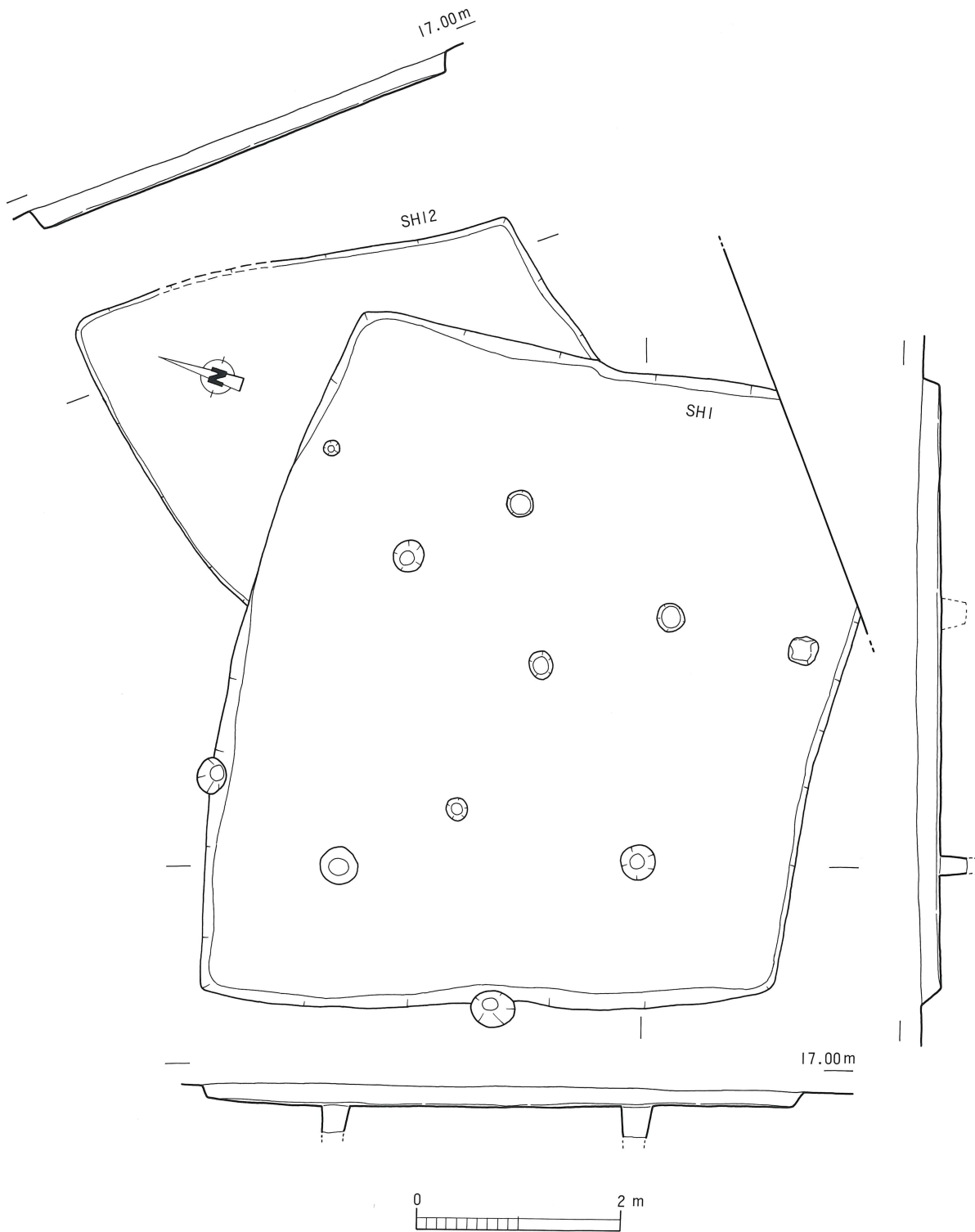


Fig. 47 SH1・SH12実測図 (S = 1/60)

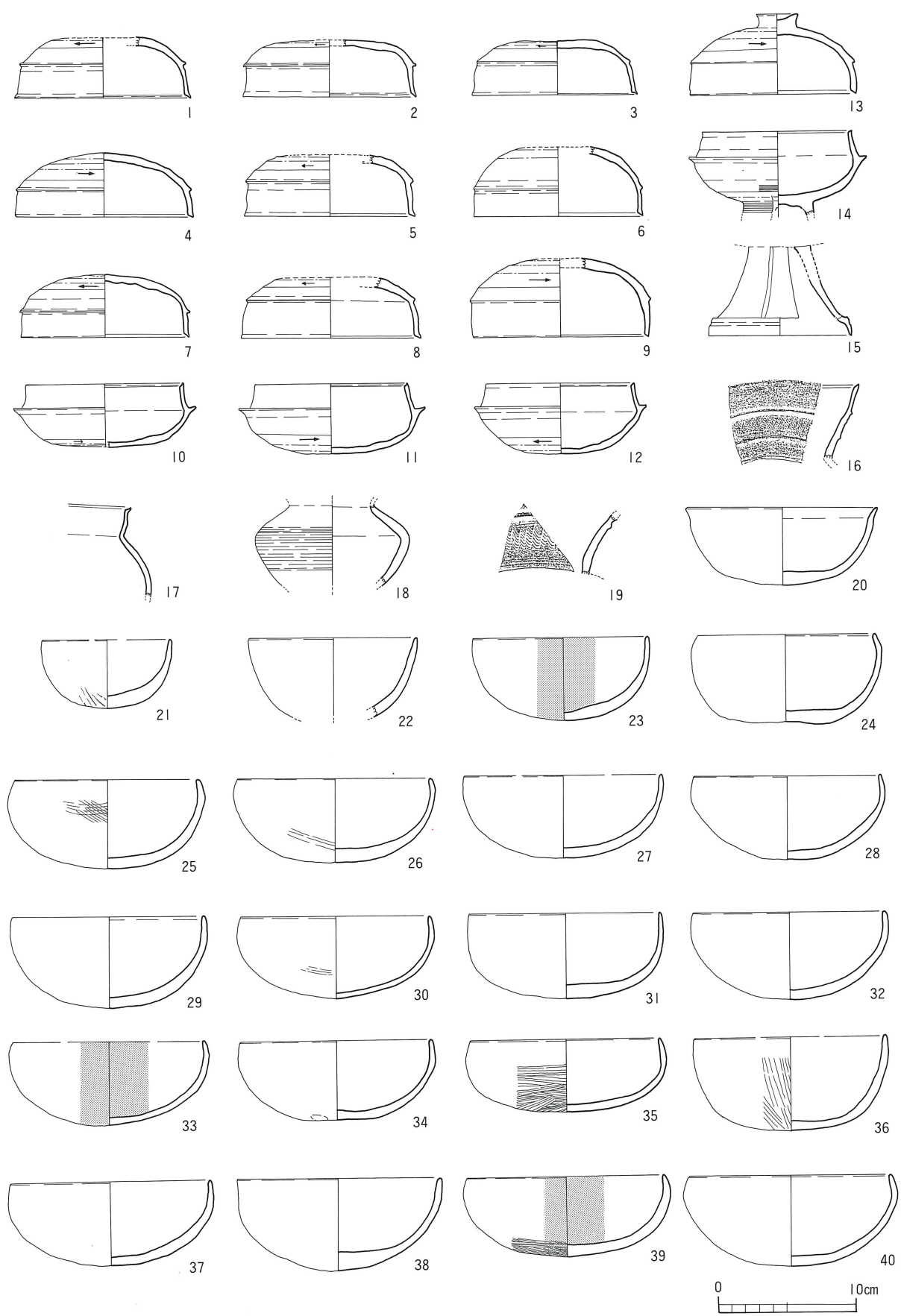


Fig. 48 SH 1 出土遺物① (S = 1/4)

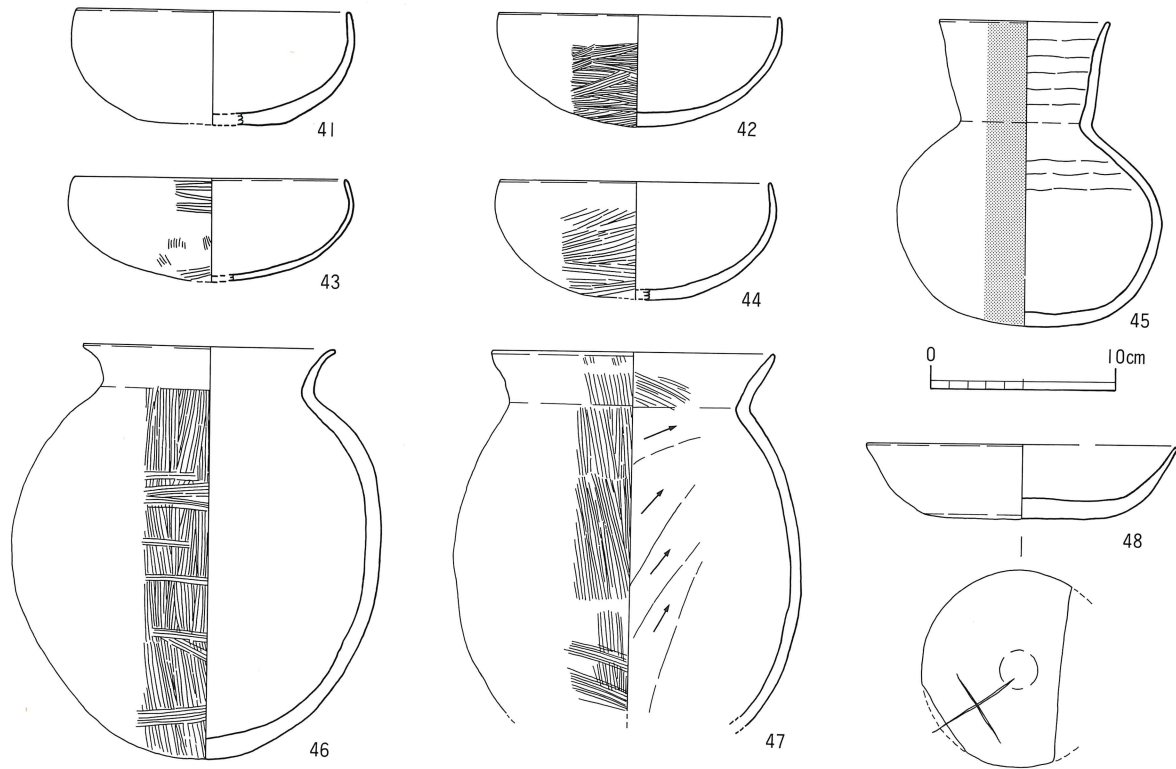


Fig. 49 SH 1 出土遺物② (S = 1/4)

出土遺物 (Fig.48~50) Fig.48—1~9は須恵器坏蓋、10~12は須恵器坏身である。器形には細かく見れば個性的なバリエーションが存在するが、いずれも口縁端部に段を有する。13は須恵器有蓋高坏の蓋で、天井部にツマミ、口縁端部に段を有する。14は短脚一段透かしを有する有蓋高坏の坏部で、体部下半と残存する脚部外面にカキメを施す。15は短脚一段透かし有蓋高坏の脚部である。13~15はいずれも須恵器の有蓋高坏であるが、セットあるいは同一個体となるものではない。16は須恵器長頸壺の口縁部で、外面に2条の突帯と櫛描波状文を有する。17は須恵器短頸壺で、口縁部はやや湾曲しながら直立する。口縁端部には段を有し、器壁内外面に回転ナデが施されている。18は須恵器甕の胴部破片で、外面にカキメが認められる。19は大型甕の口縁部で、外面に1条の突帯と櫛描波状文が認められる。上記の須恵器の中で、特に蓋坏や有蓋高坏は陶邑編年第I型式4・5段階 (TK 23・TK47) の特徴を示すもので、5世紀末前後に比定できる。20は土師器の鉢で、口縁端部にナデを施すことによって、端部を外反させている。21~Fig.49—49は土師器碗で、器壁外面の調整は削り・ナデ・ハケメなどのバリエーションがあるが、内面はナデ調整を主体とする。また、23・33—39の内外面には赤色顔料の塗布が認められる。45は土師器長頸壺で、これも外面に赤色顔料の塗布がみられる。また、胴部内面と口縁部内面に粘土紐積み上げ痕が認められる。46・47は土師器甕で、口縁内外面にナデ調整、胴部外面にハケメ調整、内面は削りの後ナデ調整を行なっている。48は須恵器坏で、底部にヘラ記号が認められる。焼成が不良の上に器面の磨滅が著しく、器面調整の詳細を観察できないが、底部はヘラ切りのみである可能性が高い。当該遺物は比較的大きな破片で出土しているが、器形や調整の特徴から9世紀代の所産である可能性が高く、所属時期が他の大部分の遺物と大きく異なる。従って、混入品であると考えられる。Fig.50—49・50は手捏ね整形によるミニチュア土器である。

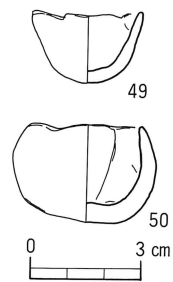


Fig. 50 SH 1 出土遺物 (S = 1/2)

SH 2 (Fig. 51) L区で検出された平面略長方形プランの住居跡である。SH19と切り合い関係を持ち（構築順序はSK19→SH2）、さらに西側を近代以降の攪乱によって大きく破壊されている。規模は東西3.6m、南北3m、面積11㎡、深さ10cmを測る。床面上に数個のピットを検出しているが、確実に住居跡に伴うものかどうかは不明である。住居跡の北壁には造りつけのカマドが構築されていたが、これも攪乱によって大きく破壊を受けており、粘土袖の一部と焼土の広がり、支柱石を確認したに留まる。出土遺物は須恵器や土師器の小片が認められたのみで、図化できる良好なものは存在しない。従って、住居跡の詳細な年代を確定できないが、周辺の状況から他のカマドを有する住居跡と同様の5世紀末前後に、その年代を考えておきたい。

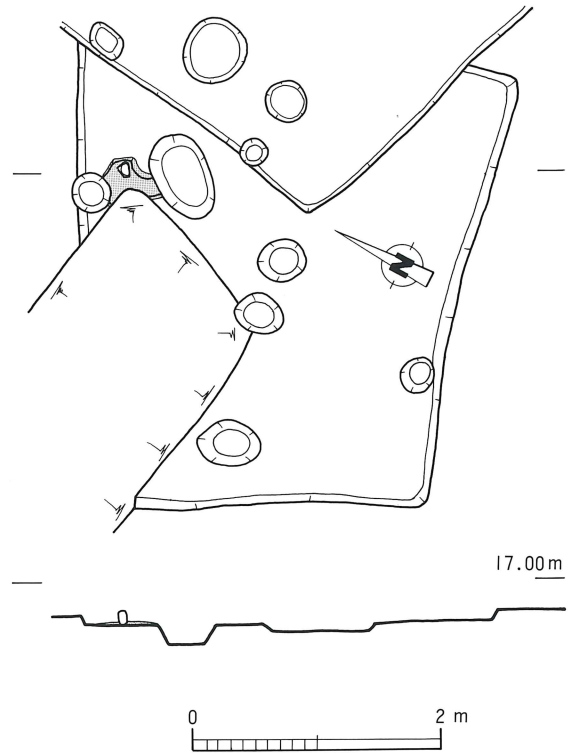


Fig. 51 SH 2 実測図 (S = 1/60)

SH 3 (Fig. 52) L区南側中央に位置する平面略方形プランの住居跡である。規模は一辺3.3m、面積11㎡、深さ15cmを測る。床面には切り合い関係にある中世の柱穴多数が重なり、支柱穴を認定することは困難である。住居西壁中央部よりやや北に偏した位置に、造りつけのカマド (Fig. 53) を有する。カマドの袖部は粘土で構築されており、中央部には円柱状の川原石を使用した支柱石が遺存していた。検出時には土師器甕 (Fig. 54-18) が支柱上に置かれたものが、土圧でつぶれたような状態で出土した。

煙出し部も中世のピットにより大部分が破壊されているが、焼けた壁面がわずかに残存している。出土遺物には須恵器、土師器のほかミニチュア土器等があり、これらは5世紀末前後に比定されるものである。

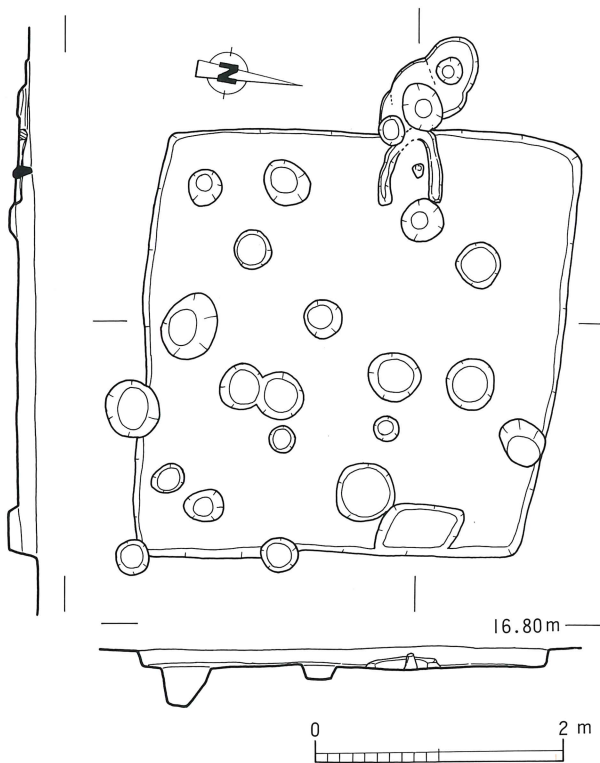


Fig. 52 SH 3 実測図 (S = 1/60)

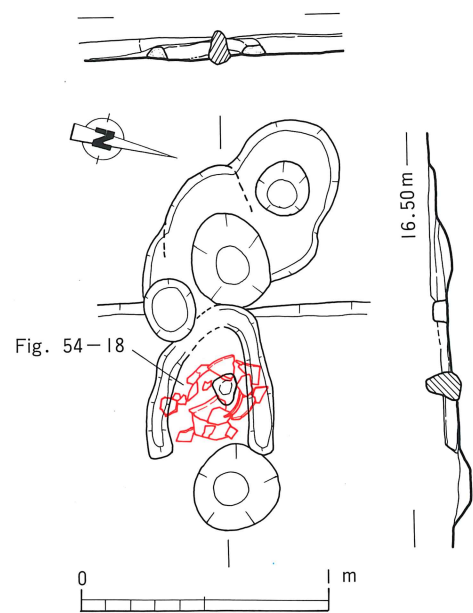


Fig. 53 SH 3 カマド実測図 (S = 1/30)

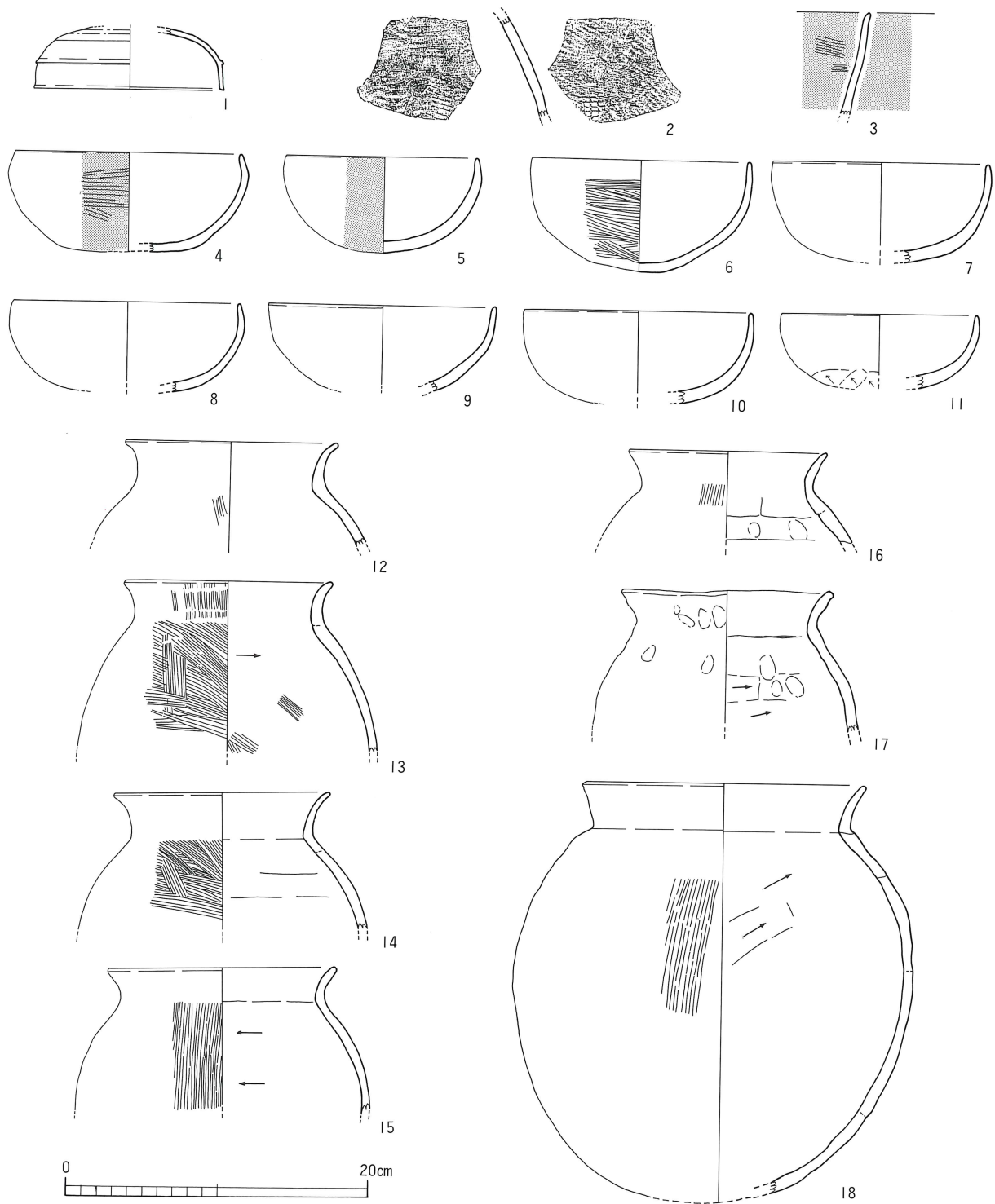


Fig. 54 SH 3 出土遺物① (S = ¼)

出土遺物 (Fig. 54・55) Fig. 54-1 は須恵器坏蓋、2 は須恵器甕の胴部破片である。出土須恵器は陶邑編年第 I 型式 4・5 段階 (TK23・TK47) の特徴を示す。3 は土師器の長頸壺の口縁部で、内外面に赤色顔料の塗布が認められる。4～11 は土師器碗で、4・5 には赤色顔料の塗布がみられる。12～18 は土師器の甕である。Fig. 55-19 は手捏ね整形によるミニチュア土器である。

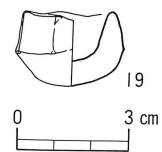


Fig. 55 SH 3 出土遺物② (S = ½)

SH4・5 (Fig.56) L区南西隅付近に位置する切り合い関係にある2棟の住居跡で、構築順序はSH4→SH5である。また、SH4は古墳時代の掘立柱建物SB1に切られている。調査区の制限から、住居跡西壁を検出できていない。SH4は規模不詳、深さ10cm、SH5は一辺3.6m前後、深さ25cmを測る。両者とも支柱穴は4本であると推定される。SH5の床面付近北側には径1.6m前後の焼土の広がりが認められた。また、南壁付近には埋土中に土師器片を包含する浅い土坑を検出したが、住居跡に伴う施設かどうかははっきりしない。いずれ

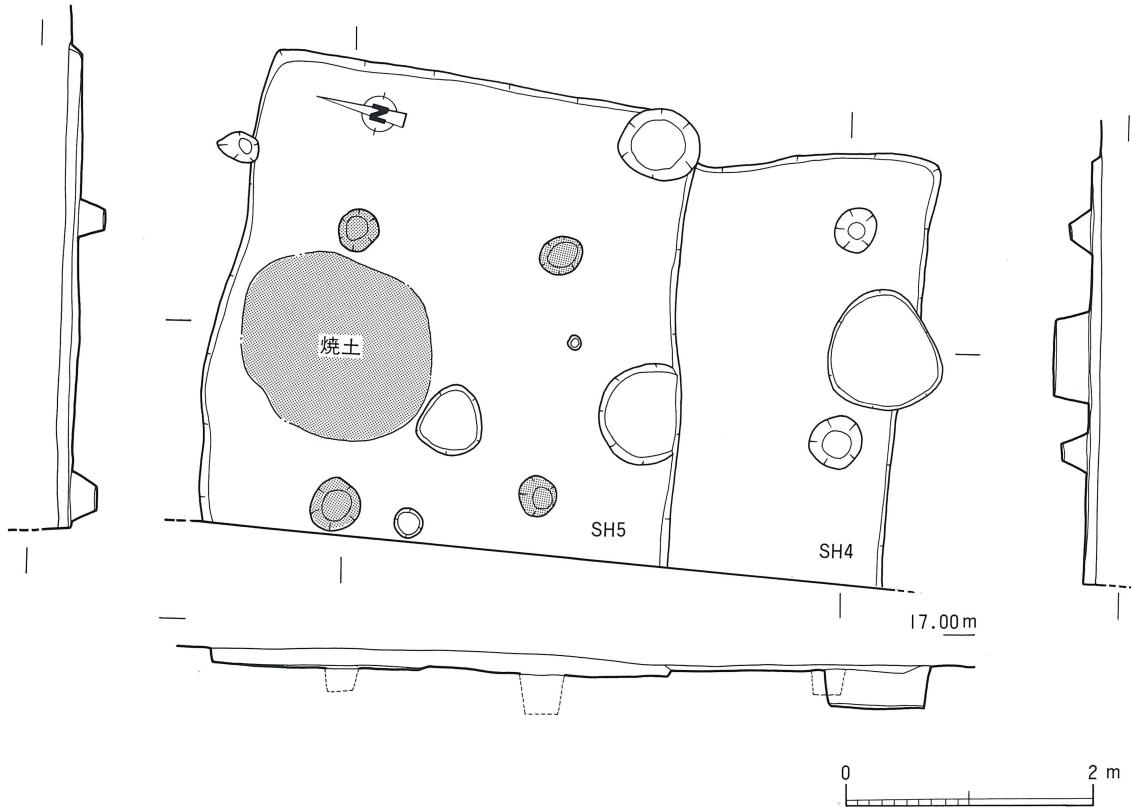


Fig. 56 SH4・5実測図 (S = 1/60)

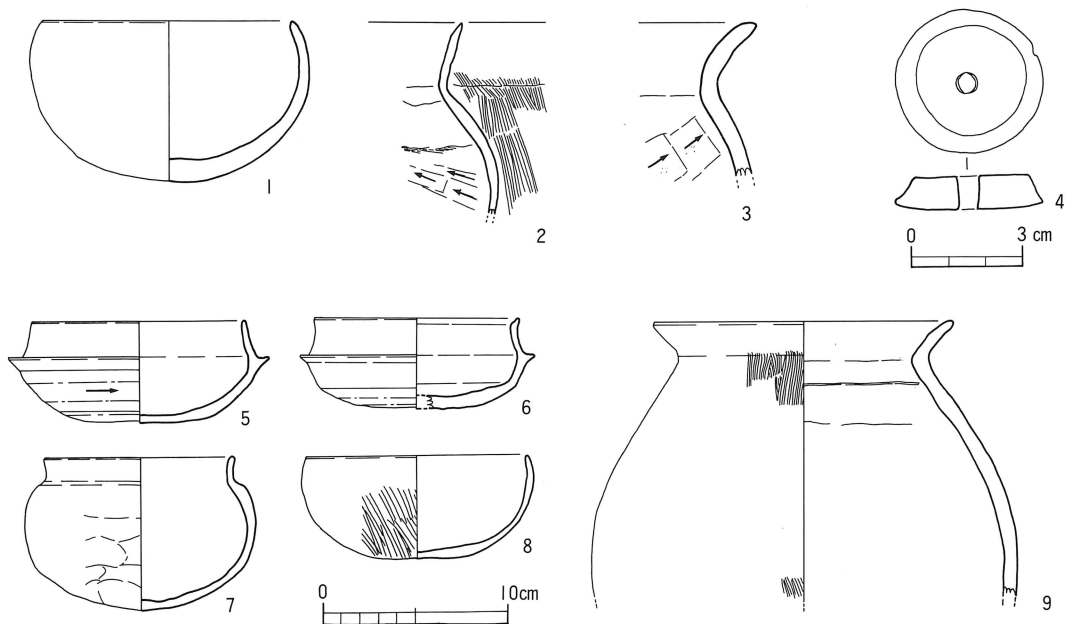


Fig.57 SH4・5出土遺物 1~4 SH4 5~9 SH5
(1~3・5~9はS=1/4、4はS=1/2)

の住居跡からもカマドは検出されなかった。出土遺物は土器類のほか、SH 4 から滑石製紡垂車が出土している。SH 4・SH 5 の構築時期は、いずれも 5 世紀末前後に比定される。

出土遺物 (Fig.57) 1～4 は SH 4 の出土遺物である。1 は土師器碗で、器面調整はナデを主体とする。2・3 は土師器の甕で、口縁部にナデ、胴部内面に削りを施している。4 は滑石製紡垂車で、径 4 cm、厚さ 9 mm を測る。5～9 は SH 5 の出土遺物である。5・6 は須恵器坏身で、口縁端部は前者が断面方形を呈し、段を持たないのに対して、後者は明瞭な段を有する。6 は須恵器鉢で、胴部外面に削り、口縁内外面と胴部内面はナデを施す。以上の須恵器は陶邑編年第 I 型式 4・5 段階 (TK23・TK47) の特徴を示す。8 は土師器碗で、外面にハケメ、内面にナデを施す。9 は土師器の甕で、口縁内外面はナデ、胴部外面はハケメ、内面は削りの後ナデを施し、一部に粘土紐積み上げ痕が認められる。

SH 7 (Fig.58) L 区に位置する平面略方形プランの住居跡である。遺存状態が良好でなく、後世の削平により南壁付近はすでに消失していた。規模は東西 4.9m 前後、南北は不明、深さ 10cm を測る。床面には複数のピットが存在するが、支柱穴の認定はできていない。東壁中央付近には、埋土中に Fig.59-2 で図示した土師器甕を包含する長径 0.9m、短径 0.7m、深さ 40cm の土坑があり、住居跡に付属する施設と考えられる。なお、カマドは付設されていない。出土遺物は比較的少なく、図示できるものは前述の土師器の甕のほか、ミニチュア土器が存在する程度である。住居跡の所属年代は、須恵器が出土していないので詳細な年代を確定できないが、おおむね 5 世紀末から 6 世紀初頭に位置づけられるものであろう。

出土遺物 (Fig.59) 1 は手捏ね整形によるミニチュア土器である。2 は土師器の甕で、口縁外面にナデ、口縁内面と胴部外面にハケメ、胴部外面に削りを施す。

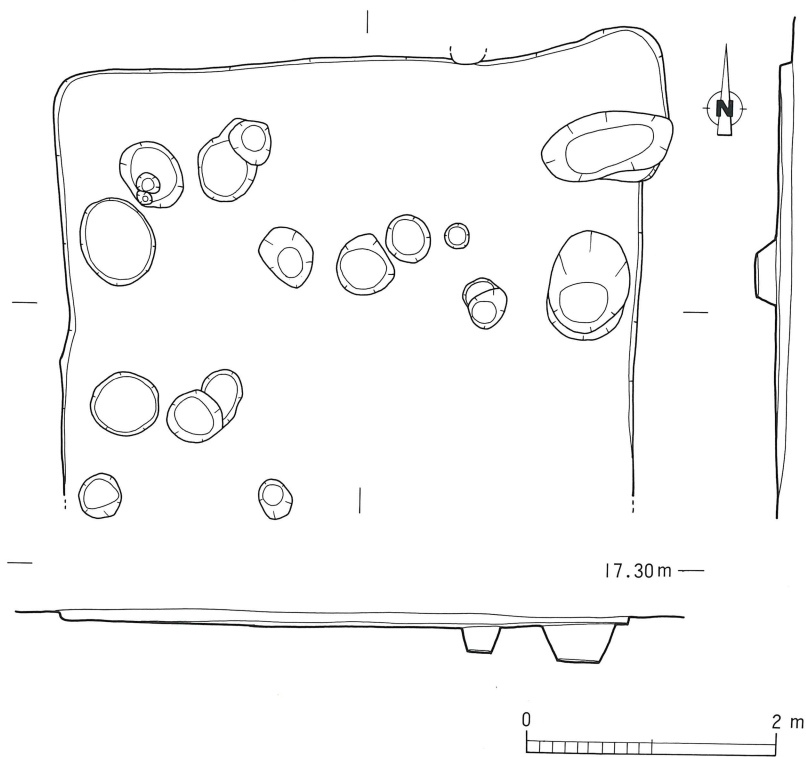


Fig. 58 SH 7 実測図 (S = 1/60)

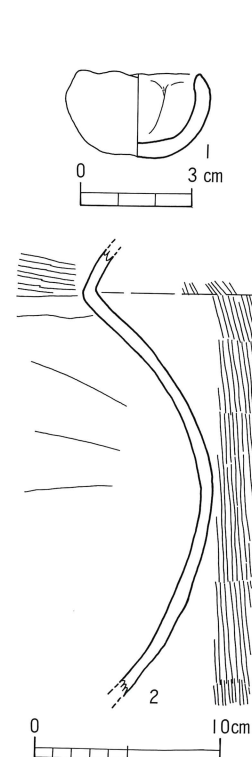


Fig. 59 SH 7 出土遺物
(1 は S = 1/2、2 は S = 1/4)

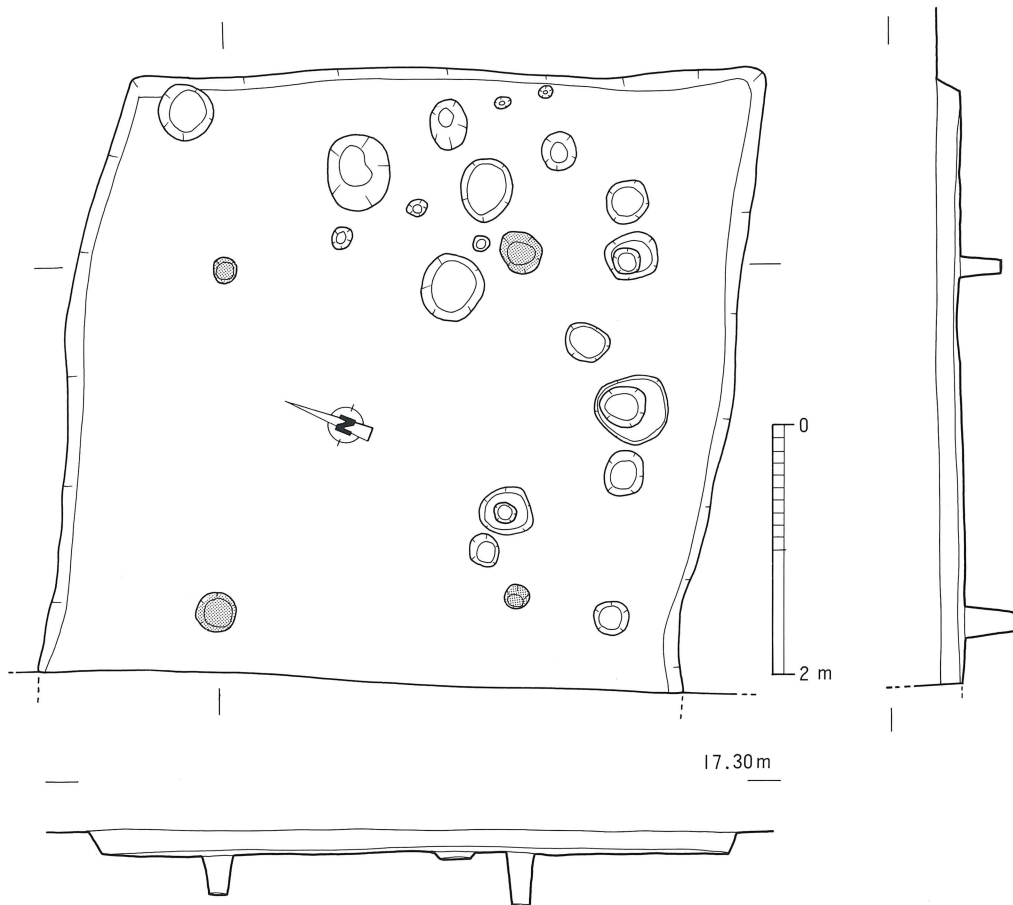


Fig. 60 SH 8 実測図 (S = 1/60)

SH 8 (Fig.60) L区に位置する平面方形プランの住居跡である。調査区の制約から西壁付近を検出できていない。規模は東西は不明、南北5.2m、深さ20cmを測り、支柱穴は4本である。カマドの付設は認められない。出土遺物には土器類のほか、ミニチュア土器、滑石製小玉等が認められる。住居跡の所属時期は、5世紀末前後に比定される。

出土遺物 (Fig.61・62) Fig.61-1~3は滑石製小玉で、1・2は径5mm、厚み1~2mmを測る。3はやや厚みが厚く、径・厚みともに4mmを測る。4~8はミニチュア土器で、4~7は碗形、8は器台形を呈する。Fig.62-1・2は陶邑編年第I型式4・5段階 (TK23・TK47) の特徴を示す須恵器の短脚一段透かし高坏である。1・2は接合しないが、同一個体である可能性が高い。坏部である1は胴部中位に2条の突帯を有し、その下位に櫛描波状文が認められる。3は土師器の鉢で、口縁部にナデ、胴部外面に削り、内面にハケメが施されている。5~11は土師器の碗で、8の内外面には赤色顔料の塗布がみられる。また、11の底部外面にはヘラ記号が認められる。12は土師器の甑で、器面の風化が著しいが、器壁外面はナデ調整、胴部内面下半は削り調整を行なう。底部には円形の孔を形成している。

当該資料がカマドを付設しない住居跡から出土していることにやや奇異の感を覚えるが、間違いなくSH 8の埋土中からの出土品である。当該時期の中型の甑として、良好な資料であると考えられる。

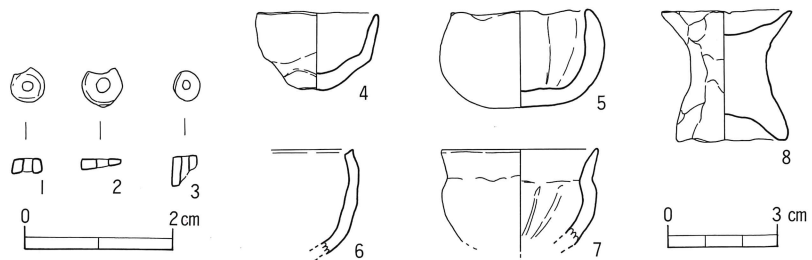


Fig. 61 SH 8 出土遺物① (1~3はS = 1/1、4~8はS = 1/2)

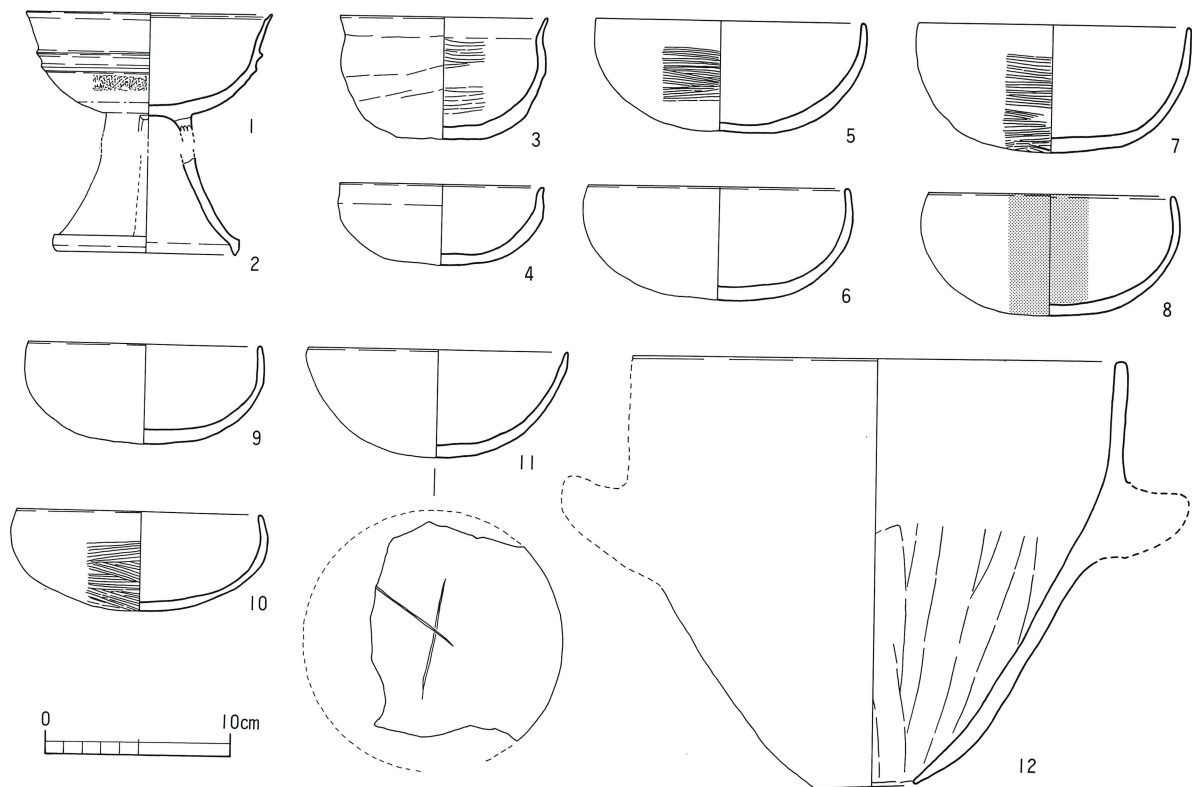


Fig. 62 SH 8 出土遺物② (S = 1/4)

SH 9 (Fig. 63) L区に位置する方形プランの住居跡であるが、北側部分を後世の溝の構築により破壊を受けている。規模は東西3.5m、南北は不明、深さは10cmを測り、支柱穴は4本である。住居の西壁には、一部破壊

を受けてはいるが、造りつけのカマド (Fig. 64) を有する。カマドの袖部は粘土で構築されており、方柱状の川原石を使用した支柱石が遺存していた。カマドの周辺からは、Fig. 65-8で図示した土師器甕が出土している。埋土は単一の状況を示しており、出土遺物には土器類、玉類などが認められる。出土遺物から、住居跡の構築時期は5世紀末から6世紀初頭前後に比定できる。

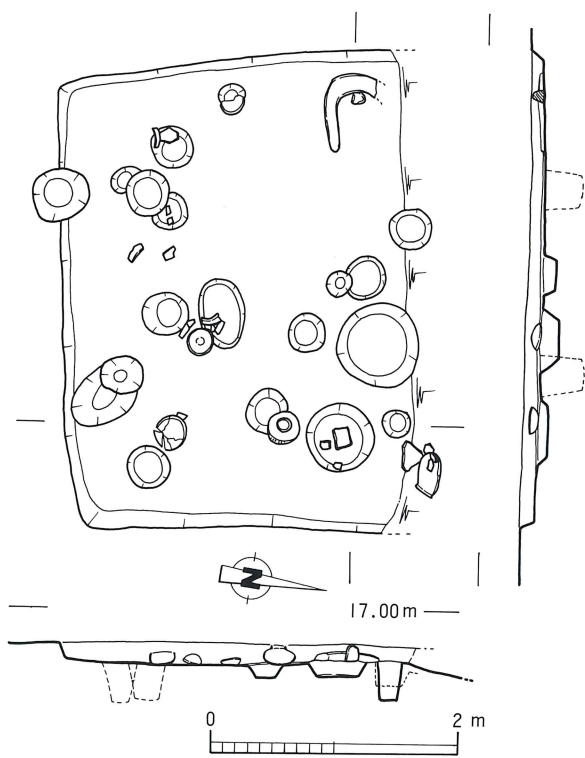


Fig. 63 SH 9 実測図 (S = 1/60)

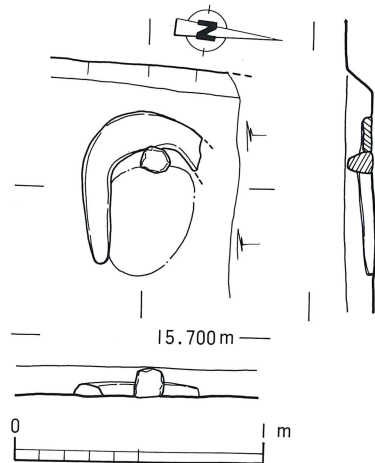


Fig. 64 SH 9 カマド実測図 (S = 1/30)

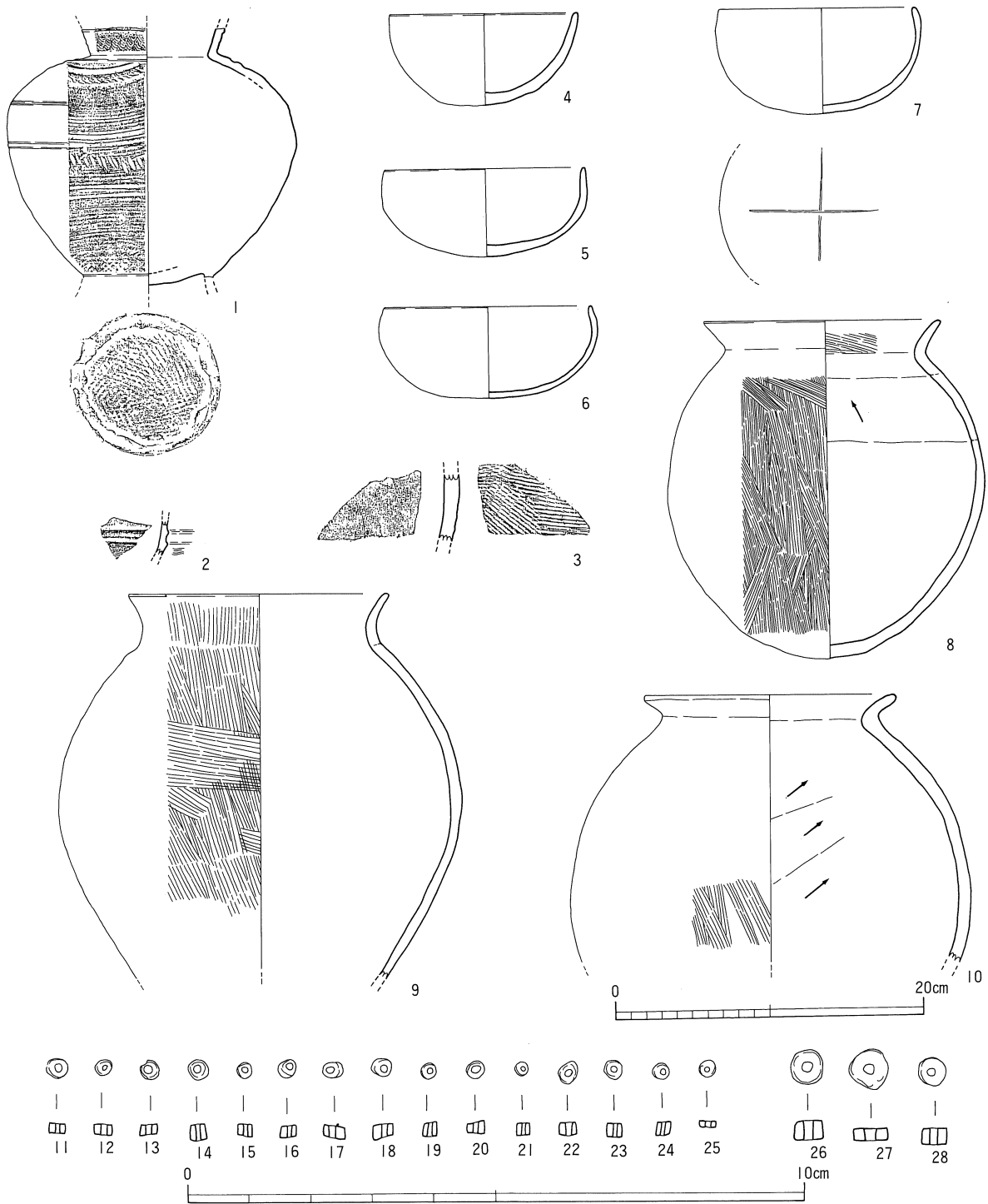


Fig. 65 SH 9 出土遺物 (1~10は S = ¼, 11~28は S = 1/1)

出土遺物 (Fig. 65) 1は須恵器の台付壺である。残存する口縁部の最下段には櫛描波状文、肩部・胴部のほぼ中央には木口端による列線文を有する。胴部外面にはカキメ、底部付近には平行叩きを施す。2は須恵器高坏の破片と思われる、外面には段と櫛描波状文の一部が認められる。3は須恵器の胴部破片で、外面は平行叩き、内面はナデ調整を行なって叩きを磨り消している。1~3の須恵器は陶邑編年第I型式4・5段階 (TK23・TK47) 併行に位置づけられる可能性が高いが、1については類例が少なく、2・3については小破片であるため、5世紀末から6世紀初頭前後までの時期幅を考えておきたい。4~7は土師器の塊で、いずれも器壁の内外面に

ナデ調整を施す。7の底部外面にはヘラ記号が認められる。8～10は土師器の甕である。8はカマドの周辺から破片で出土したものが、接合している。口縁内面にハケメが認められ、最終的に内外面にナデ仕上げを行なっている。胴部外面にはハケメが認められ、内面は削りの後ナデが行なわれている。また、一部に粘土紐積み上げ痕が認められる。9は外面にハケメ、内面にナデを主体にした調整が施されている。10は口縁内外面にナデ調整、胴部外面にハケメ、内面に削りを施している。11～25は赤褐色を呈する石材を素材とした小玉で、径2～3mm前後、孔径1mm前後、厚み1～4mm前後を測る。26～28は滑石製小玉で、径4～6mm前後、孔径2mm前後、厚み2～4mm前後を測る。

SH10 (Fig.66) L区に位置する方形プランの住居跡であるが、北側部分を後世の溝の構築により破壊を受けている。また、西側では中世から近世にかけての井戸SE6および掘立柱建物SB16と切り合い関係を有する。規模は東西5m、南北は不明、深さ15cmを測る。床面上には複数のピットが存在しているが、支柱穴は4本である。また、床面中央付近には長径0.7m、短径0.5mの範囲で焼土の広がり認められ、地床炉と思われる。埋土は単一の様相を呈しており、出土遺物はすべて埋土中からの出土で、床面直上からのものはなく、破片資料を中心として住居跡中央よりやや西に偏した位置に集中する傾向が認められた。遺物には土師器・須恵器のほか、ミニチュア土器、土製模造鏡などがある。住居跡の所属時期は、5世紀末前後に比定できる。

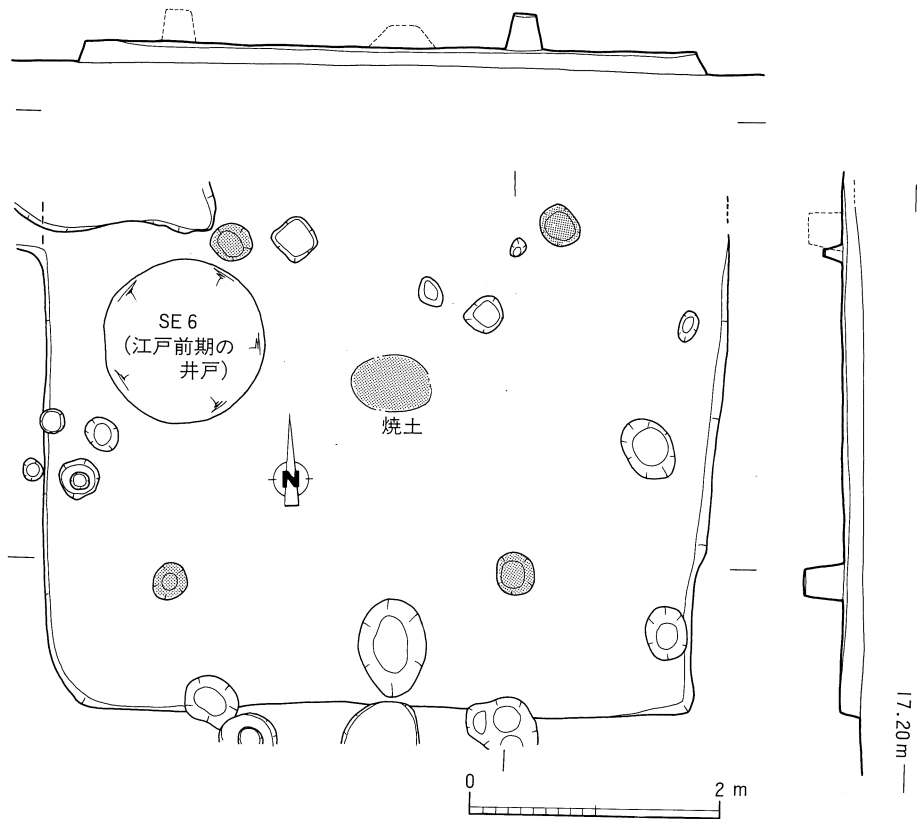


Fig. 66 SH10実測図 (S = 1/60)

出土遺物 (Fig.67・68) Fig.67-1・2は手捏ね整形によるミニチュア土器である。内外面に指頭押圧痕が認められる部分がある。3は土製模造鏡と思われる遺物である。直径4cmを測り、ツマミ部分を剝落する。Fig.68-4～6は須恵器坏蓋である。天井部と口縁部の境は明瞭な稜をなし、口縁端部には段を有する。天井部には回転ヘラ削りが認められる。7は有蓋高坏の蓋で、天井部はツマミが剝落した痕跡が認

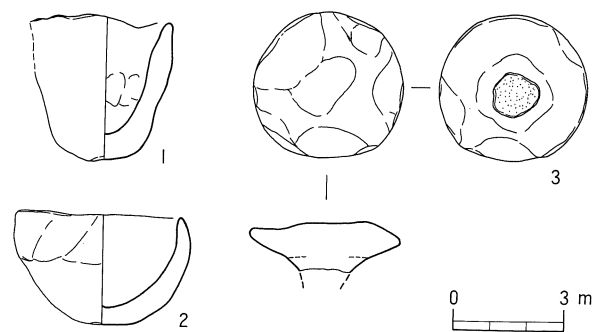


Fig. 67 SH10出土遺物① (S = 1/2)

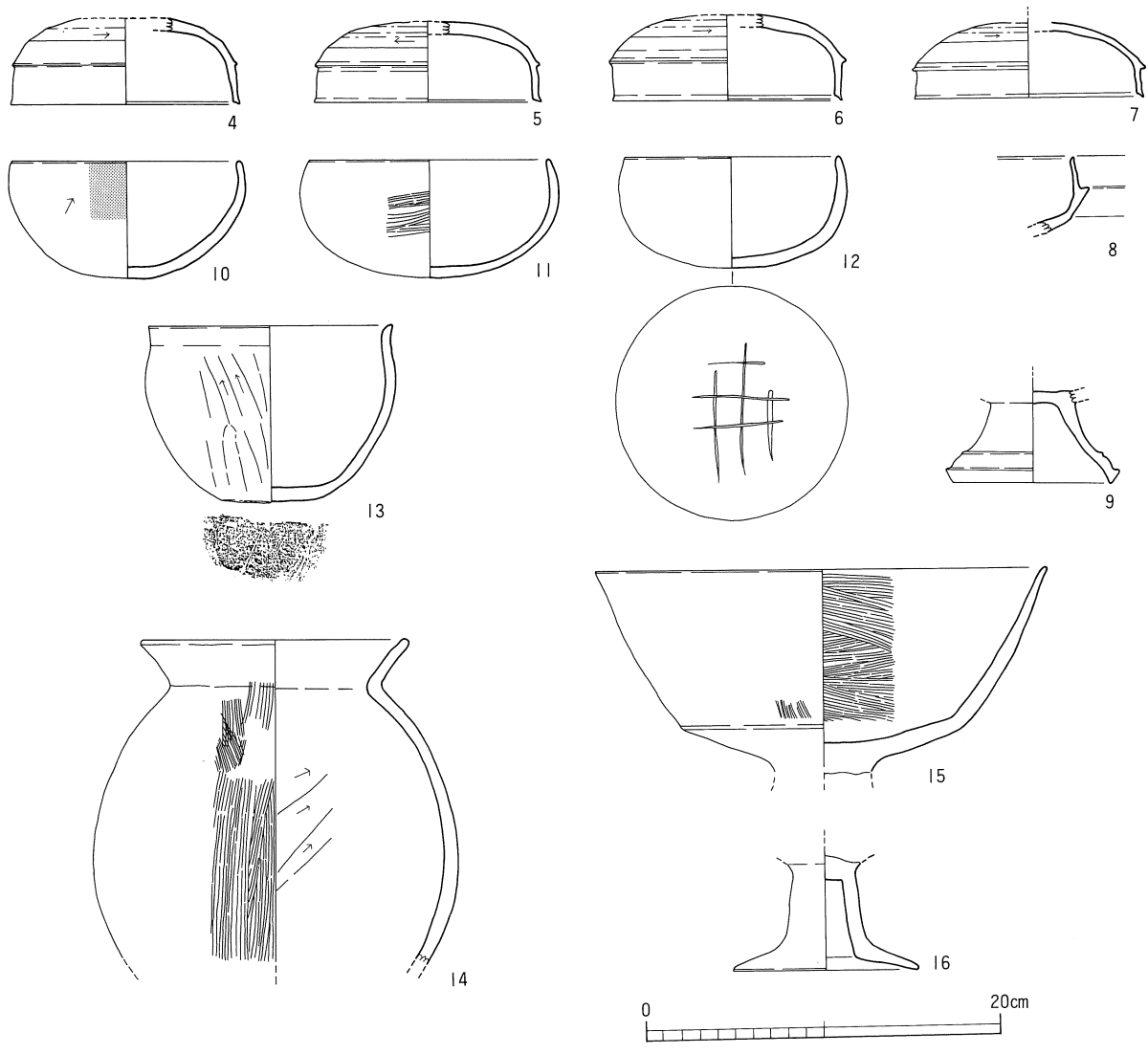


Fig. 68 SH10出土遺物② (S = 1/4)

められる。8は坏身の口縁部付近の破片で、これも口縁端部に段を有する。底部付近には回転ヘラ削りが認められる。9は須恵器高坏の脚部で、脚端部外面付近に1条の突線を有する。以上の須恵器は、陶邑編年第I型式4・5段階(TK23・TK47)に位置づけられる特徴を示す。10~12は土師器碗。10はナデ調整を主体としており、外面に赤色顔料の塗布が認められる。11は外面にハケメ調整、内面にナデ調整を行なう。12は内外面のナデを施し、底部外面にヘラ記号が認められる。13は土師器鉢で、口縁部に強いナデを施し、その部位をやや外反させる形態を呈する。胴部外面にヘラミガキ、内面にナデ調整を施す。残存部分が小さく断定できないが、底部には葉脈状の線分がスタンプされており、木の葉底である可能性がある。14は土師器の甕で、口縁内外面にはナデ調整、胴部外面にはハケメ調整、内面にはヘラ削りを施す。15・16は土師器の高坏で、15は坏部、16は脚部である。15は口縁内外面をハケメ調整した後、外面をナデ仕上する。16は脚端部が屈曲する形態を呈し、外面にナデないしはミガキを施している。

SH11 (Fig.69) L区南東隅付近に位置する方形プランの住居跡である。調査区の制約により、住居跡の一部を完掘したに留まる。詳細な規模は不明で、深さは10cmを測る。支柱穴は4本と推定されるが、1本分を確認したのみである。住居跡の北壁中央付近には、造りつけのカマド (Fig.70) が付設されている。カマドの袖部は粘土で構築されており、中央部には川原石を使用した支柱石が遺存していた。出土遺物には須恵器や土師器等があり、これらは5世紀末から6世紀初頭前後に比定される。

出土遺物 (Fig.71) 1は須恵器蓋坏である。焼成不良で、色調は淡褐色を呈する。天井部と口縁部の稜はやや甘い印象をあたえ、口縁端部には段を有する。1個体だけの資料であるため、陶邑編年第I型式4・5段階 (TK23・TK47) から第II型式1段階 (MT15) 前後とやや幅を持った位置づけをしておきたい。2は土師器の埴で、内外面のナデ調整を施す。3は土師器甑の把手部で、造りつけのカマドと相関する出土遺物である。4は土師器の鉢で、器壁外面にはナデ調整、内面には指頭痕がみられる。また、底部外面にはヘラ記号が認められる。5は土師器の甕で、口縁部と胴部外面はナデ調整を主体とし、胴部内面には削りが行なわれた後ナデが施されている。

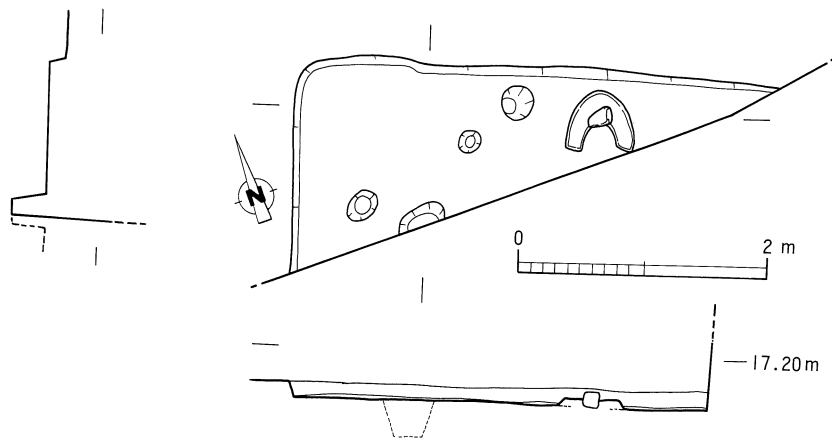


Fig. 69 SH11実測図 (S = 1/60)

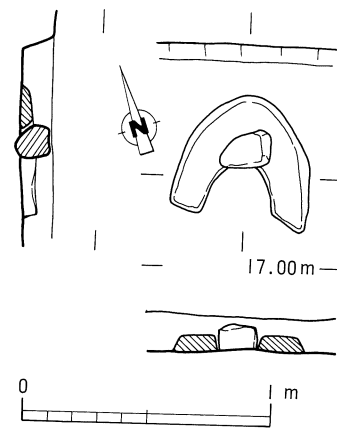


Fig. 70 SH11カマド実測図 (S = 1/30)

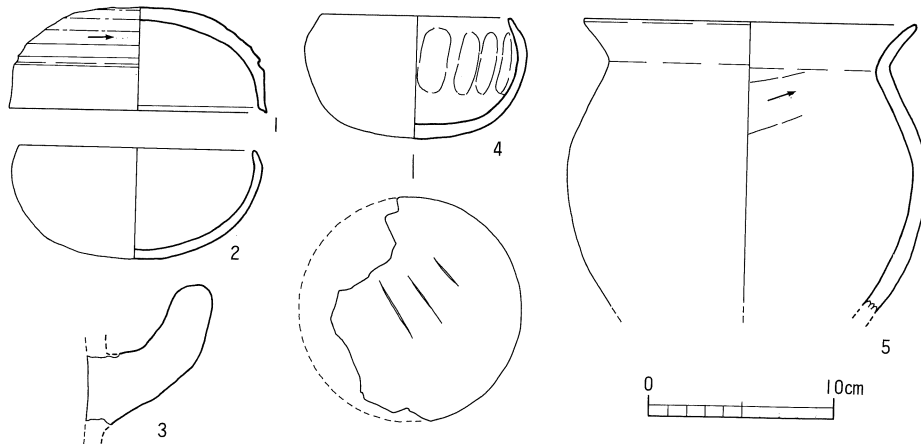


Fig. 71 SH11出土遺物 (S = 1/4)

SH14 (Fig. 72) L区南東隅に位置する方形プランの住居跡である。調査区の制約から住居跡の一部を完掘したに留まる。規模は東西3.8m、南北は不明、深さは15cmを測る。支柱穴は4本と推定されるが、1本分を確認したのみである。検出した範囲では、カマドや焼土は確認されていない。出土遺物は北東隅付近の床面から土師器坏1個体のみが認められる。出土遺物が僅少であるため、住居跡の所属時期を確定できないが、土師器坏から推定される年代幅より、5世紀末から6世紀初頭前後に考えておきたい。

出土遺物 (Fig. 73) 1は土師器の碗である。器面調整は内外面ともナデが主体となり、器壁内外面に赤色顔料の塗布が認められる。

SH15 (Fig. 74) L区南東隅付近に位置する方形プランの住居跡である。調査区の制約から住居跡の北西隅付近を完掘したに留まる。規模は不明、深さは15cmを測る。検出した範囲ではカマドや柱穴は確認されていないが、北西隅付近には0.4×0.6mの範囲で焼土が認められた。出土遺物には土師器碗および須恵器の甕があり、土師器碗は焼土の上部付近、須恵器の甕は東壁の中央北寄りの床面付近から検出された。住居跡の構築時期は、5世紀末前後に比定される。

出土遺物 (Fig. 75) 1は土師器の碗で、器壁内外面に赤色顔料の塗布が認められる。底部付近にはハケメ調整が行なわれている。2は須恵器の甕で、口縁部と頸部が残存している。口縁端部下には1条の突帯を有する。口縁部外面にはカキメ、内面にはナデ、胴部外面には平行叩き、内面には同心円叩きがそれぞれ認められる。陶邑編年第I型式4・5段階 (TK23・TK47) 前後に比定しておきたい。

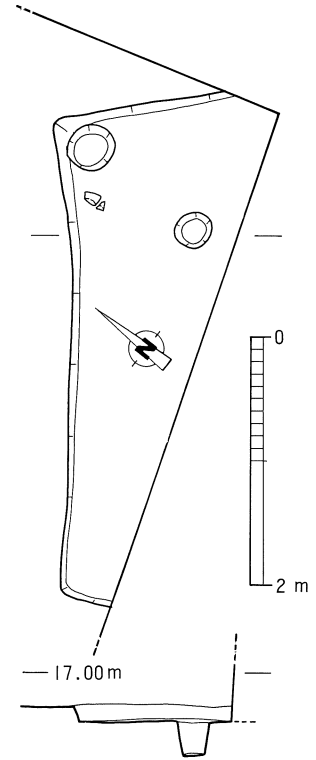


Fig. 72 SH14実測図
(S = 1/60)

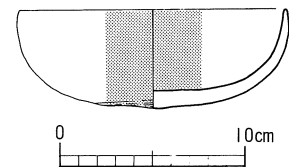


Fig. 73 SH14出土遺物
(S = 1/4)

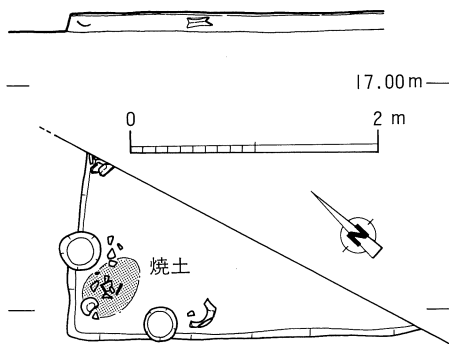


Fig. 74 SH15実測図 (S = 1/60)

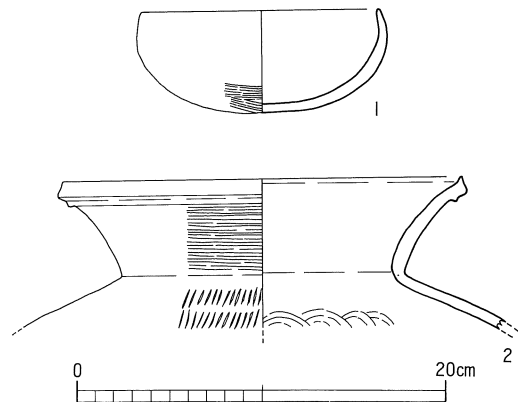


Fig. 75 SH15出土遺物 (S = 1/4)

SH16・17 (Fig. 76) L区に位置する切り合い関係にある2棟の住居跡である(構築順序はSH17→SH16)。平面プランはいずれも略方形である。SH16は北東隅と北西隅を後世の攪乱と溝の構築によって破壊されている。規模は一辺約3.6m、面積24m²、深さ10cmを測る。床面には複数のピットが存在するが、支柱穴4本を認定することができた。なお、造りつけのカマドや床面上の焼土は検出されなかった。出土遺物には須恵器・土師器等の土器類が認められる。SH17は住居跡プランの南東の2辺を検出したに留まる。支柱穴は4本と推定されるが、削平のため2本を検出したに留まる。この住居跡にもカマドや焼土はなく、また出土遺物も認められなかった。住居跡の構築時期は、SH16が出土遺物の年代観から5世紀末前後に比定される。SH17はSH16より先行するものの、出土遺物がないため、詳細な時期が確定できない。

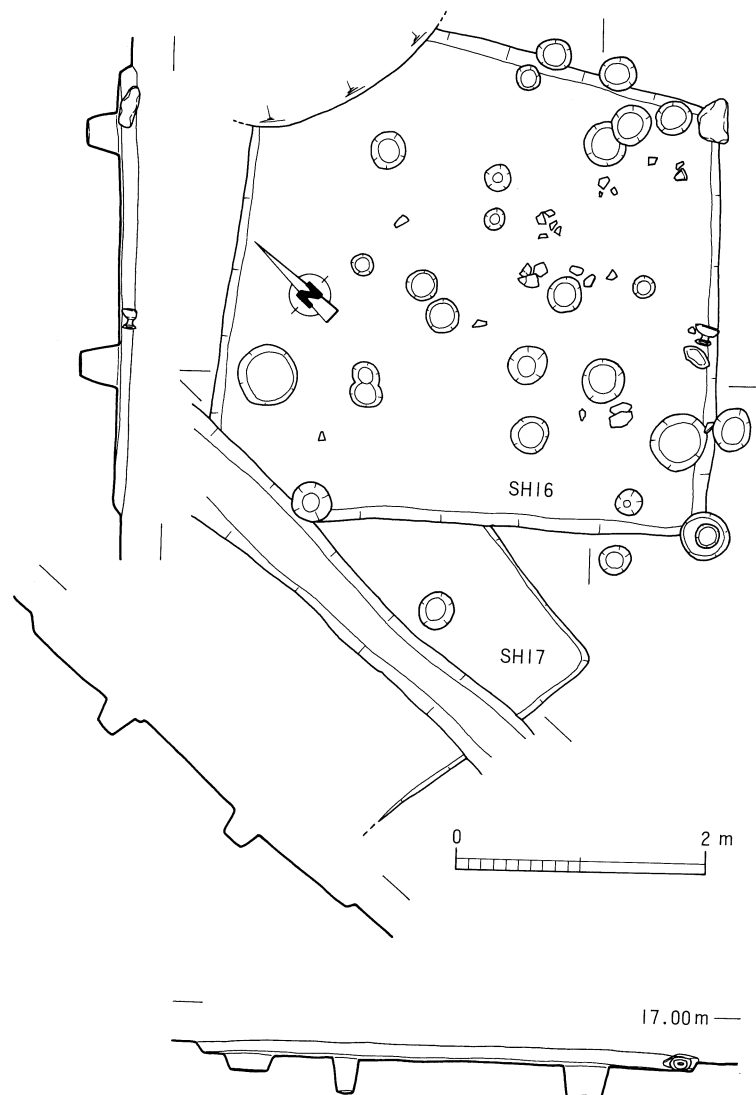


Fig. 76 SH16・17実測図 (S = 1/60)

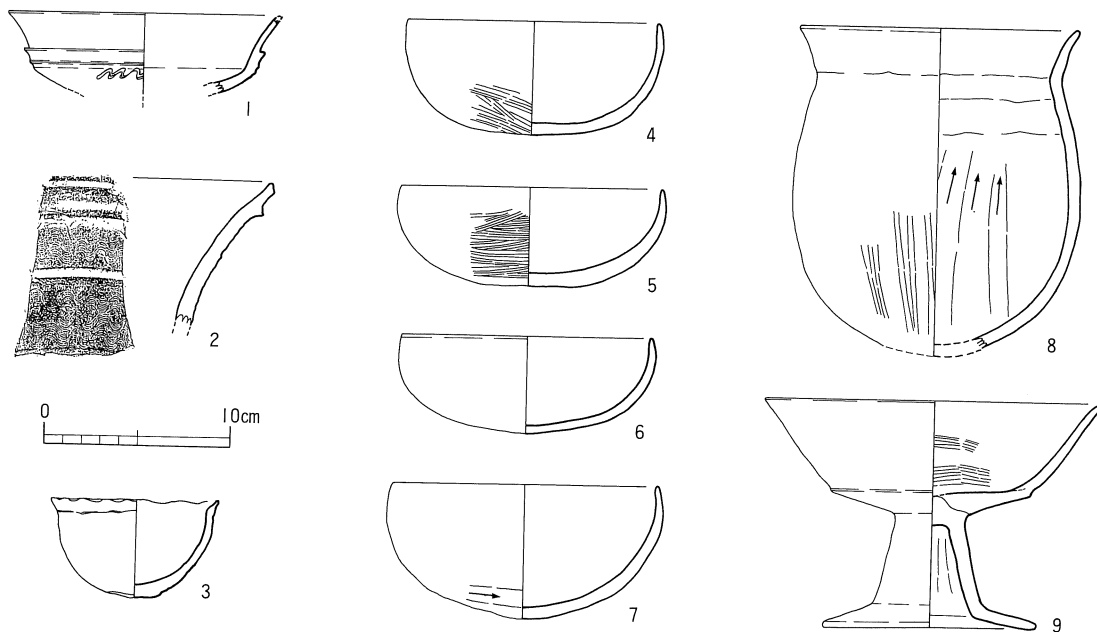


Fig. 77 SH16出土遺物① (S = 1/4)

出土遺物 (Fig. 77・78) SH16の出土遺物を紹介する。Fig. 77-1は須恵器高坏の坏部で、残存部の中位に1条の突線と櫛描波状文を有する。2は須恵器の甕の口縁部で、端部下に1条の突帯、残存部の中位に沈線を有し、外面には櫛描波状文を施す。以上の須恵器は、陶邑編年第I型式4・5段階(TK23・TK47)の特徴を示すものである。3は土師器の小型の鉢で、器面調整はナデを主体とする。4~7は土師器塚で、4・5は底部外面付近にハケメ、内面にナデを施す。6・7は内外面ともナデを主体とする。8は土師器の甕で、口縁内外面にナデ、胴部外面にハケメ、内面に削りを施す。また、口縁外面には一部に指頭痕が認められる。9は土師器の高坏で、口縁部・脚部ともラップ状に開く器形を呈する。口縁内面にはハケメ調整の後にナデを施している。Fig. 78-10・11は手捏ね整形によるミニチュア土器で、10は碗形、11は器台形を呈するものである。

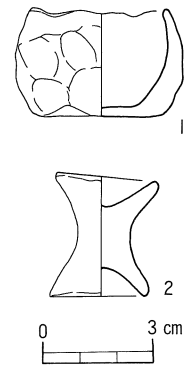


Fig. 78 SH16出土遺物② (S=1/2)

SH18 (Fig. 79) L区に位置する略方形プランの住居跡である。東壁と南壁の一部を近代以降の溝から、北西隅をSH19から切られている。削平部分が多く、詳細な規模は不明だが、東西約4m、南北約3.8m、面積約15m²、深さ7cmを測る。床面上には数個のピットが認められるが、支柱穴と認定できるものは存在しない。また、カマドや焼土等も認められなかった。出土遺物は土器小片が若干認められるのみで、良好なものは存在しない。従って、住居跡の詳細な構築時期は確定できていない。

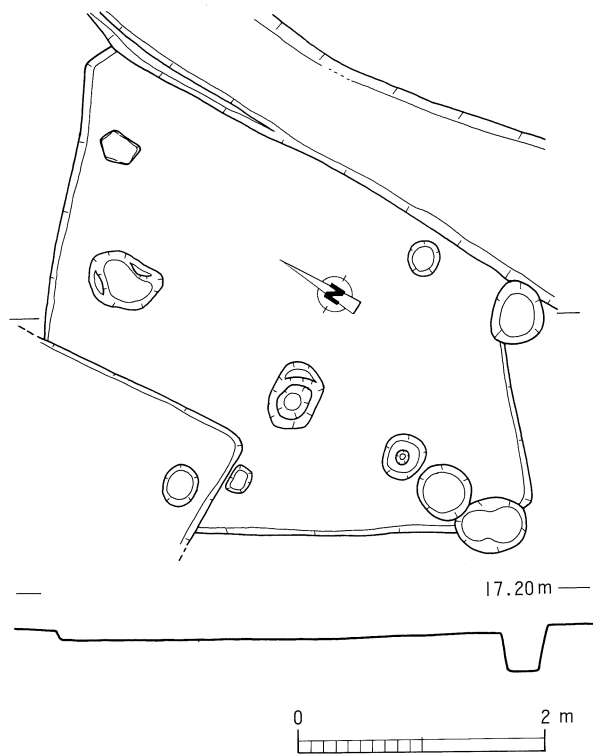


Fig. 79 SH18実測図 (S=1/60)

SH19・SH20 (Fig. 80) L区に位置する略方形プランの住居跡である。この付近の住居跡は切り合いが著しく、他にSH2・SH18・SH20・SH21と切り合い関係を持つ(構築順序はSH2・SH20→SH18・SH21→SH19)。SH19の規模は東西約4.5m、南北4.3m、面積19m²、深さ10cmを測る。床面上には数個のピットが認められるが、支柱穴と認定できるものは存在しない。また、カマドも検出されていない。北東隅付近の床面には焼土の広がりがわずかに認められた。出土遺物には須恵器・土師器等の土器類が存在する。SH19からの出土遺物はその大半が5世紀末前後に比定できるが、やや新しい様相を持つ須恵器が存在することや切り合い関係が最も新しくなることから、住居跡の構築時期は6世紀初頭前後までの時期幅を考えておきたい。SH20は削平が著しく、規模は不明で、検出面からの深さは5cm前後である。支柱穴は不明で、カマドや焼土等は検出されていない。出土遺物は土師器小片がわずかに認められるのみで、図化できる良好なものは存在しない。従って、詳細な構築時期を確定できない。

出土遺物 (Fig. 81) SH19からの出土遺物を紹介する。1・2は須恵器坏蓋で、天井部と口縁部の境に明瞭な稜を形成しており、口縁端部には段を有する。天井部には回転ヘラ削りが認められる。3・4は坏身で、3の口縁端部には段を持つのに対し、4は断面が方形となり、段を持たない。いずれも底部には回転ヘラ削りを施す。

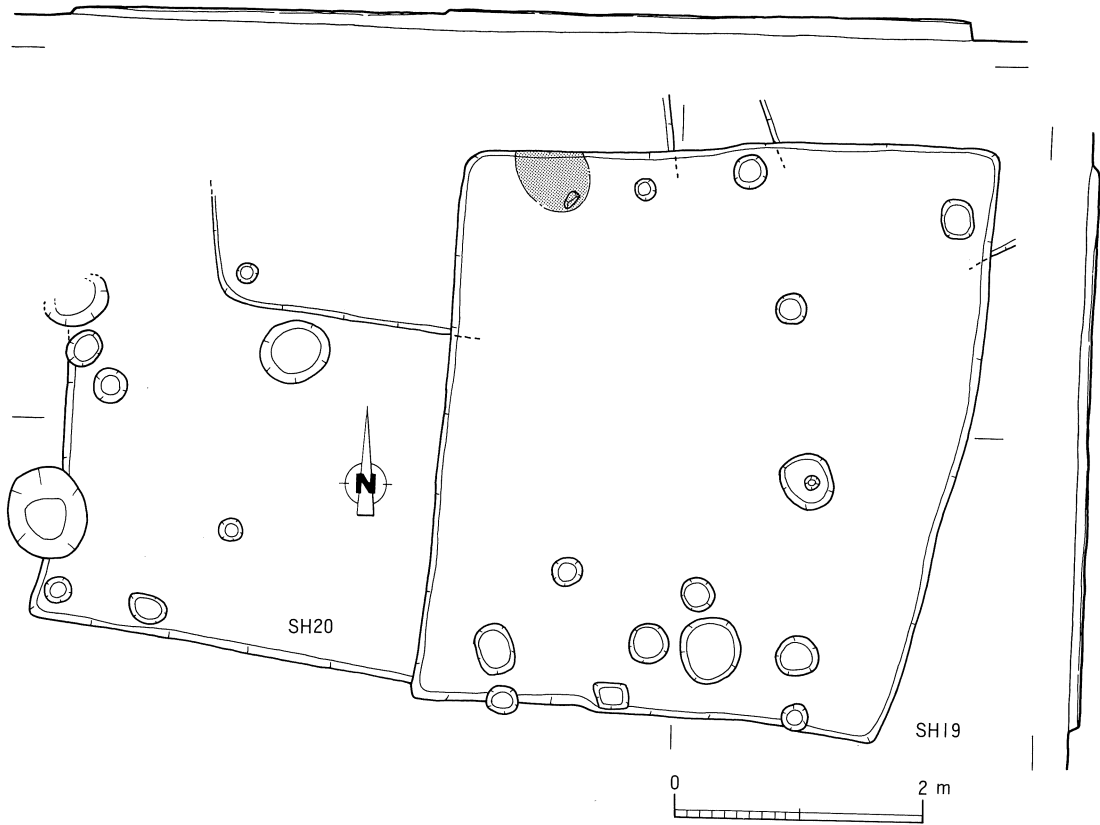


Fig. 80 SH19・SH20実測図 (S = 1/60)

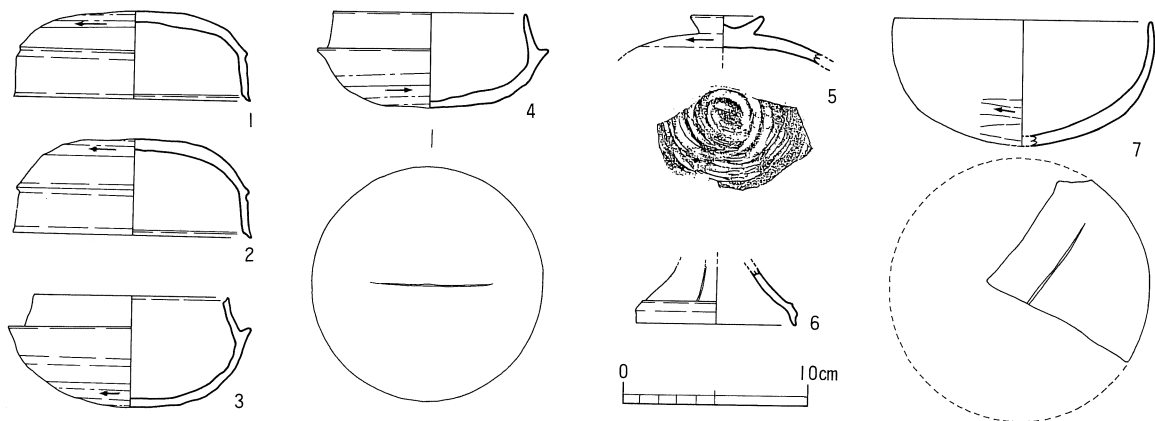


Fig. 81 SH19出土遺物 (S = 1/4)

また、4の底部外面にはヘラ記号が認められる。5は須恵器の蓋と思われ、内面に同心円当具痕が認められる。天井部にはツマミを有する。有蓋高坏の蓋もしくは坏蓋の可能性が高い。6は一段透かしを持つ高坏の脚部である。1～4・6は陶邑編年第I型式4・5段階 (TK23・TK47) に比定できる可能性が高いが、5は第II型式1段階 (MT15) まで幅をみて考えておきたい。7は土師器碗で、外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。また、底部外面にはヘラ記号が認められる。

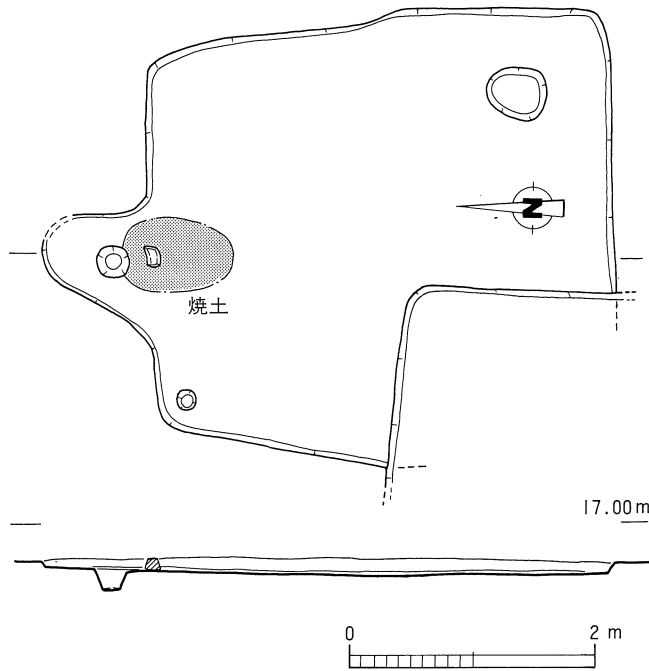


Fig. 82 SH21実測図 (S = 1/60)

SH21 (Fig.82) L区に位置する略方形プランの住居跡である。南西隅をSH19により切られている。規模は規模は東西3.6m、南北3.8m、面積約14㎡、深さ10cmを測る。床面上には数個のピットが存在するが、いずれも当該住居跡に伴うものではない。また、北壁中央には造りつけのカマドが付設されている。カマドの残存状況が不良であり、粘土で構築されたとと思われる袖部をすでに消失していたが、焚口付近の焼土と川原石を使用した支柱石が残存していた。焼土の広がりや支柱石の位置から考えると、本来のカマドの北端部となる煙出し部は住居の北壁ラインより外にとび出すように造られていた可能性が高いと考えられる。出土遺物は床面付近の若干の土器片を認めたほか、カマド付近の焼土からは土師器の甕の破片 (Fig.83-3) が検出された。

出土遺物 (Fig.83) 1は須恵器の坏蓋で、天井部と口縁部の境には明瞭な稜を形成し、口縁端部には段を有する。また、天井部には回転ヘラ削りが施されている。2は須恵器甕の胴部破片で、2条の沈線間に木口端による列線文が認められる。以上の須恵器は陶邑編年第一型式4・5段階 (TK23・TK47) に比定できる。3はカマド付近の焼土上から検出された土師器の甕である。口縁部にナデを施し、胴部外面にハケメ、内面に削りが認められる。

SH23・24 (Fig.85) A区 (88年度調査区) に位置する切り合い関係にある2棟の住居跡である。SH24→SH23の順に構築され、さらにSH24は東南隅を古墳時代後期の溝SD16によって切られている。SH23の規模は東西4.7m、南北4.4m、面積約21㎡、深さ30cmを測る。床面には柱穴3個のほか、造りつけのカマドや貯蔵穴と思われる長軸1.5m、短軸0.8m、深さ30cmの土坑が認められる。また、北西隅には不整形の攪乱がある。カマドは東壁中央よりやや南に偏して設けられており、粘土で袖部を形成するものである。損傷がやや著しく、上部はすでに破壊されており、断ち割りのサブトレン

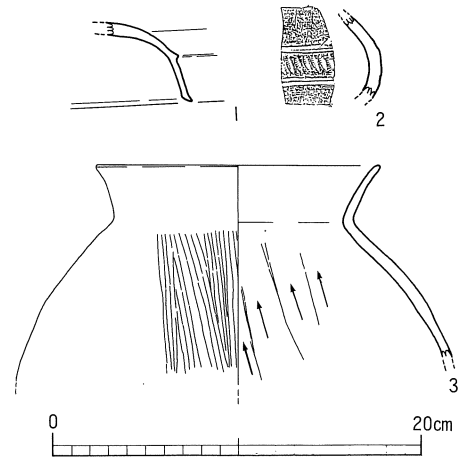
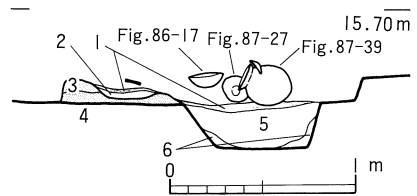
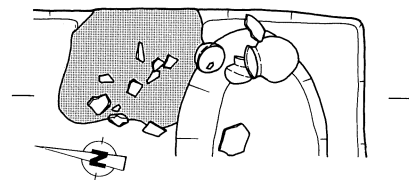


Fig. 83 SH21出土遺物 (S = 1/4)

SH21 (Fig.82) L区に位置する略方形プランの住居跡である。南西隅をSH19により切られている。規模は規模は東西3.6m、南北3.8m、面積約14㎡、深さ10cmを測る。床面上には数個のピットが存在するが、いずれも当該住居



1. 灰層
2. 焼土・灰混じり層
3. 粘土 (3は熱による赤変)
4. 褐色土 (地山)
5. 暗褐色土
6. 地山の二次堆積

Fig. 84 SH23カマド周辺 (S = 1/40)

チによって両袖の壁体や焼土・灰層を検出し、カマドであると確認できた。カマド内には支柱石は遺存していない。また上部から土師器高坏 (Fig.87—30) が出土しているが、これは直接カマドに伴うものではなく、埋土中の土器群に含まれるものであろう。また南東隅の貯蔵穴と思われる土坑の上面にはカマドから流出した灰層が薄くレンズ状に堆積しており、さらにその上部に Fig.86—17・Fig.87—27・39で示した土師器の壺・長頸壺・甕の完形品が3個体集積された状況で出土している (Fig.84)。土坑内の埋土からは土器片が出土しており、これらは図示できない破片であるとはいえ、住居跡の床面・埋土中から出土した土器類と大きく時期が異なる特徴は認められない。以上の所見より、当該土坑は通常は土をかぶせて埋積された状況にあったことが推定される。埋土中から出土した土器類のほとんどは5世紀末前後に比定されることから、SH23の構築時期もこのあたりに考えておきたい。SH24の規模は東西は不明、南北4.7mで、深さは25cmを測る。検出部分には柱穴やカマド、焼土等は認められなかった。床面近くから土師器が出土しているが、図化不能の破片である。従って、詳細な構築時期は不明である。

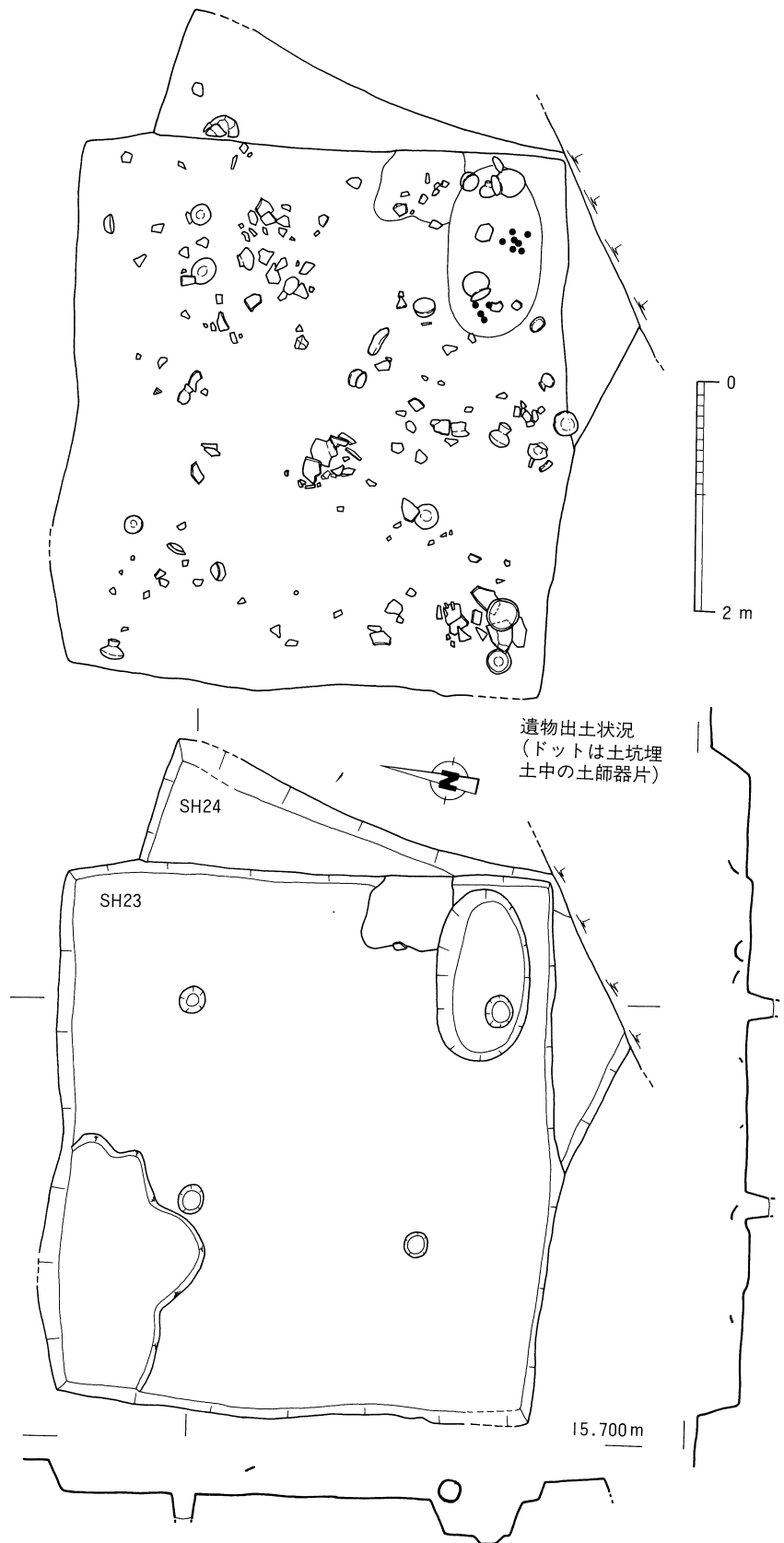


Fig. 85 SH23・SH24実測図 (S = 1/60)

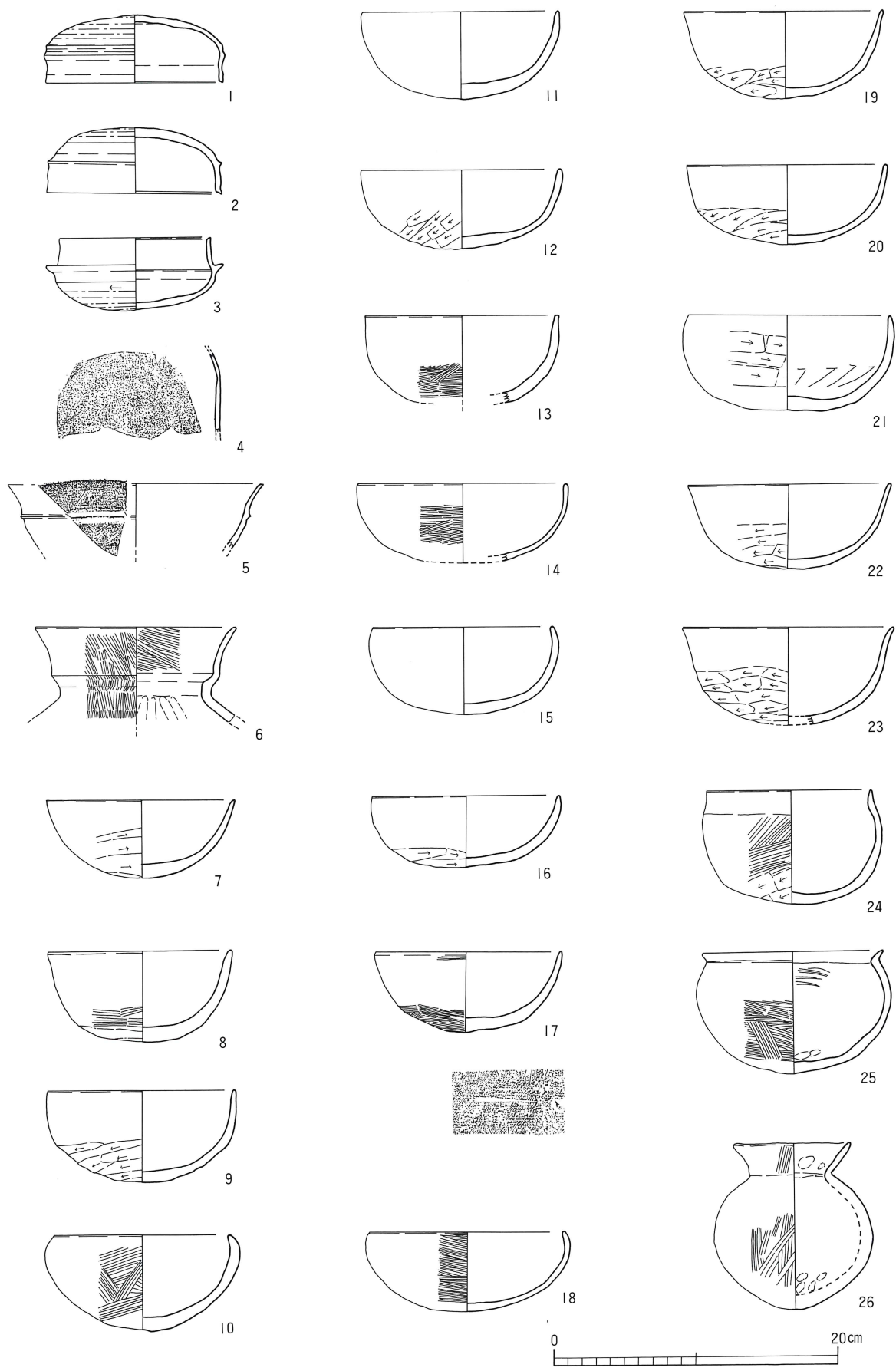


Fig. 86 SH23出土遺物① (S = ¼)

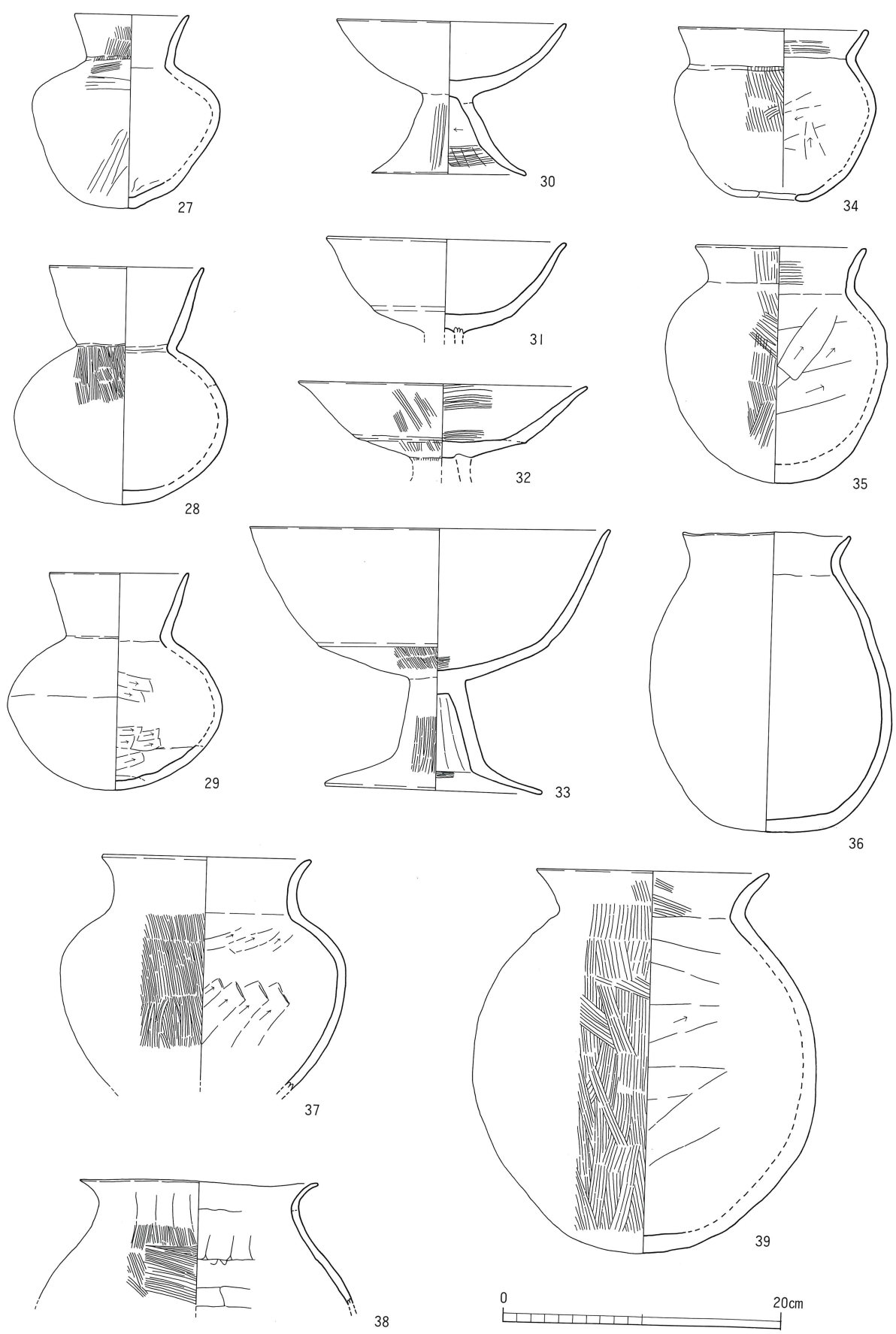


Fig. 87 SH23出土遺物② (S = 1/4)

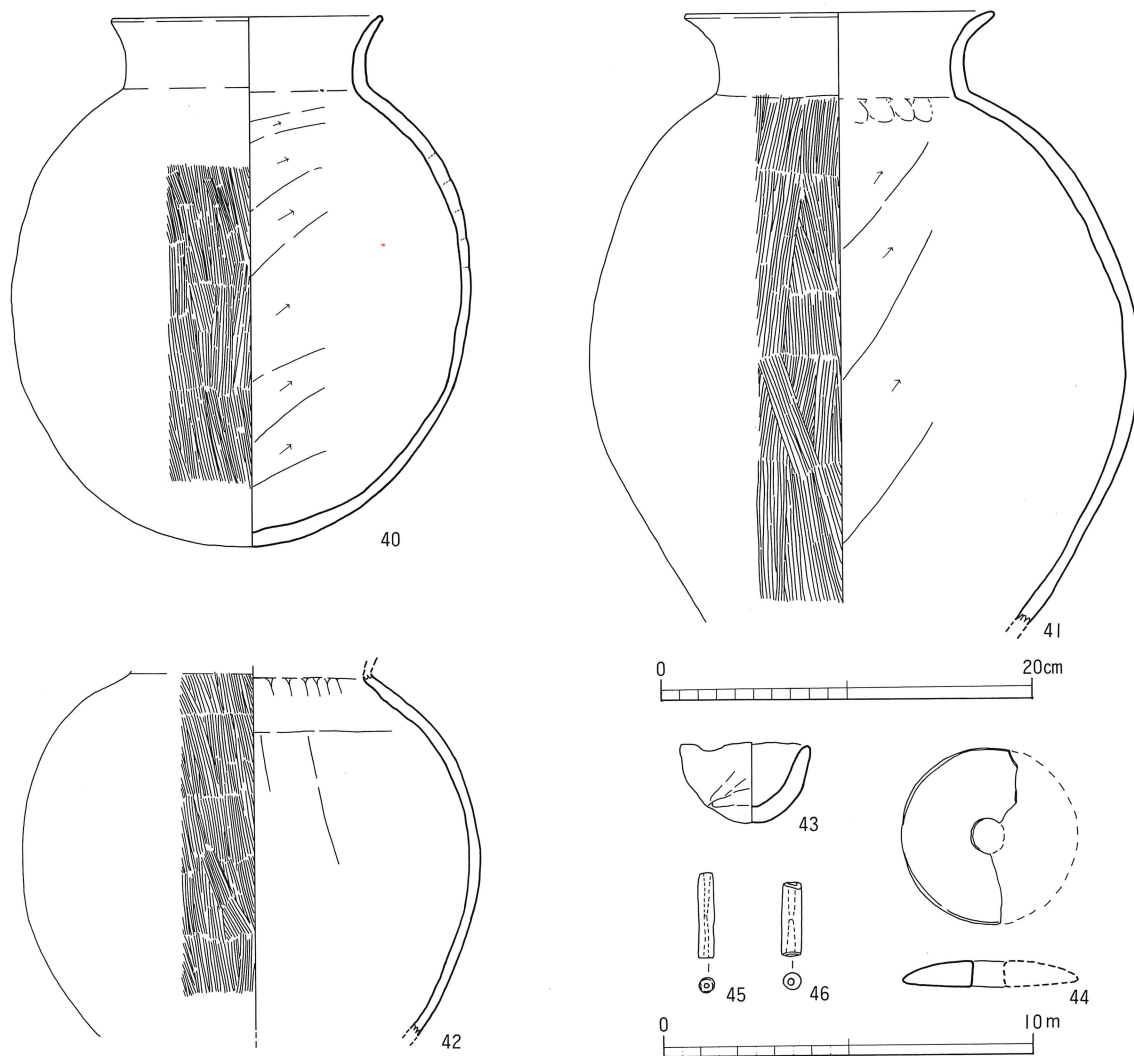


Fig. 88 SH23出土遺物③ (S = ¼)

出土遺物 (Fig.86~88) SH23の出土遺物を紹介する。Fig.86-1・2は須恵器坏蓋である。1の天井部と口縁部の境はやや甘く沈線状になるが、2は明瞭な稜を形成する。3は須恵器の坏身で、口縁端部に段を有し、底部には回転ヘラ削りを施す。4は器種不明の須恵器の胴部破片で、提瓶とも考えたが、器壁が薄く断定できない。5は須恵器高坏で、残存部の中位に1条の突帯とその下に櫛描き波状文を施す。以上の須恵器は1・4がやや新しい時期に位置づけられる可能性が考えられるが、その他は陶邑編年第I型式4・5段階(TK23・TK47)に比定できる。6は土師器の複合口縁壺で、口縁部内外面と頸部外面はハケメ調整を主体とする。また、胴部内面には削りを施す。7~23は土師器の壺である。17の底部外面に認められるヘラ描き沈線は、ヘラ記号である可能性が考えられる。24・25は土師器鉢。24は口縁の周辺にナデを施し、口縁部と胴部の境に甘い稜線をつけている。25の口縁部は外反し、底部内面付近には指頭痕が認められる。26は小型の壺で、口縁内面と底部内面に指頭痕が認められる。Fig.87-27~29は土師器の長頸壺、30~33は土師器の高坏である。34は土師器の鉢で、底部には焼成後の穿孔を有する。35・36は土師器の小型の甕。37~Fig.88-42は土師器の中型の甕である。43は手捏ね整形によるミニチュア土器。44は滑石製紡垂車で、2分の1程度の破片である。45・46は滑石製の管玉で、いずれも両面穿孔である。以上の出土遺物は量的にも充実しており、良好な一括資料としてとらえることが可能である。

S H 25 (Fig. 89) M区 (91年度調査区) に位置する方形プランの住居跡で、調査区の制約から住居跡の北壁と南壁の一部を検出したに留まる。規模は東西は不明、南北4.4m、深さ10cmを測る。支柱穴およびカマドは検出できていない。床面には一部に焼土の広がり認められる部分がある。出土遺物には土器類が認められ、住居跡の構築時期は5世紀末前後に比定できる。

出土遺物 (Fig. 90) 1は須恵器の甕の胴部破片で、下半部に平行叩き、上半部にカキメ、内面にナデ調整が施されている。器形や調整の特徴から、陶邑編年第I型式4・5段階 (TK23・TK47) に比定できるものである。2は土師器碗で、器面調整はナデを主体とするが、底部付近には手持ちヘラ削りが施されている。3は土師器の甕で、口縁内外面はナデ調整、胴部外面はハケメ調整、胴部内面は削り調整が行なわれている。

S B 1 (Fig. 91) L区 (91年度調査区) で検出された総柱の掘立柱建物である。北西隅のピット (P 9) はS H 4 との切り合い関係

が認められ、S H 4 → S B 1 の順で構築されている。規模は梁間3間・桁行2間、梁間間は平均4.3m、桁行間は平均4.1mを測る。床面積は17.6m²である。柱穴掘方は直径70~100cm前後を測り、通常検出されるものよりやや大型であるとの印象を受ける。掘方内には直径30cm前後の柱痕跡が大部分のもので認められ、建物の柱の直径を推定できる。掘方埋土中には須恵器や土師器の破片が混入しているものがあり、器形を特定できるものとしては須恵器坏蓋天井部・土師器碗・土師器甕口縁部などがある。またP 8の北西側より完形に復元できる土師器碗が出土しており、出土地点付近に土坑や住居跡などが検出されていないことから、当該遺物も本来的にはS B 1に伴うものと解釈した。S B 1に関連する遺物の中には、古墳時代以降に比定されるものは認められない。S B 1が陶邑編年第I型式4・5段階 (TK23・TK47) 前後に比定できる須恵器を包含するS H 4を切って構築されていることや掘方埋土中より出土した遺物の中に陶邑編年第II型式1段階 (MT15) 前後の須恵器が認められることから、構築時期は5世紀末から6世紀初頭前後に位置づけられる。

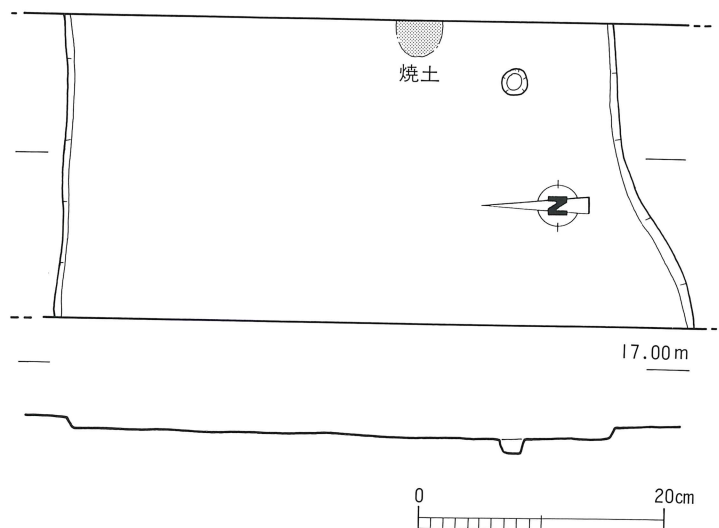


Fig. 89 SH25実測図 (S = 1/60)

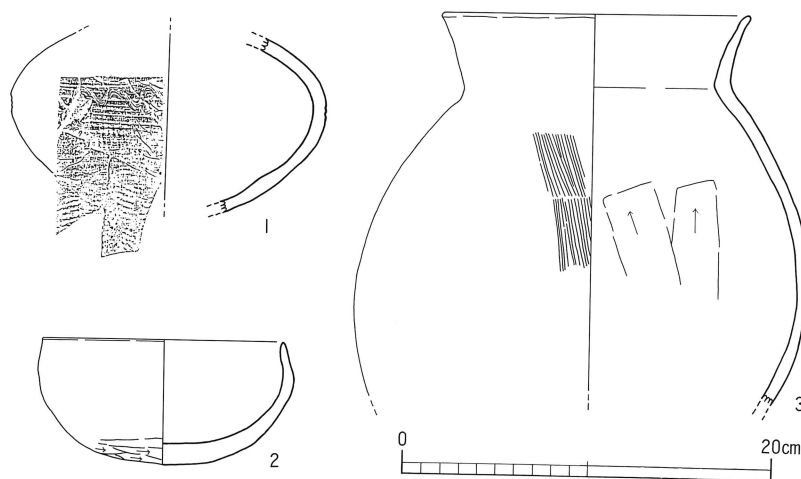


Fig. 90 SH25出土遺物 (S = 1/4)

出土遺物 (Fig.92) 1はP7掘方埋土中より出土した須恵器蓋坏天井部である。残存部外面の大部分に回転ヘラ削りが認められる。最大長11.5cmを測る破片資料で、口径や器高の復元は不可能であるが、かなり大きめの口径を有するものと思われる。陶邑編年第II型式1段階 (MT15)前後のものである可能性が高い。2はP1掘方埋土中より出土した土師器甕で、器壁が磨滅しているが、内外面をナデ調整によって仕上げている。3はP8の北西側より出土した土師器甕である。掘方内の出土ではないが、本来的にはSB1に帰属する遺物である可能性が高い。器壁の磨滅が著しく詳細な調整手順は不明であるが、底部付近にハケメ調整が残存するほかは、ナデを主体とする調整を行なっている。4も土師器甕で、P11掘方内からの出土である。内外面に赤色顔料の塗布がみられる。そのほか、図示していないがP9の埋土中より、土師器甕の口縁部の破片が出土している。

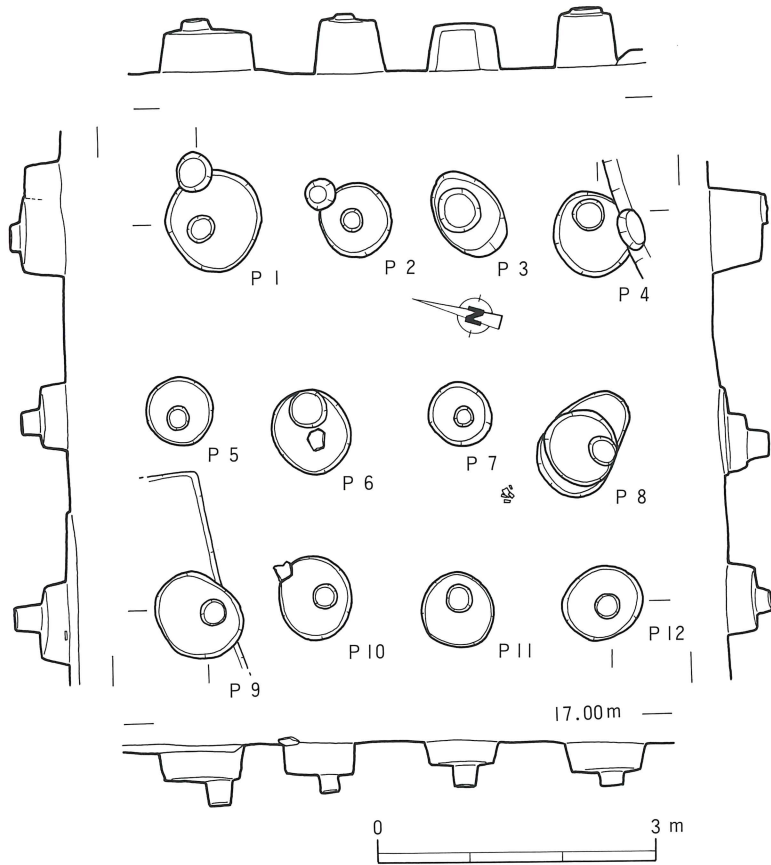


Fig. 91 SBL実測図 (S = 1/80)

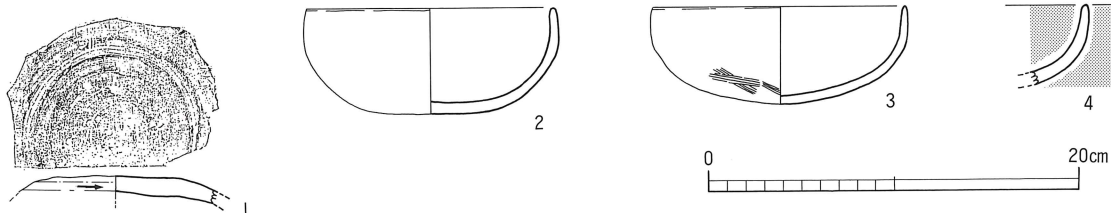


Fig. 92 SB1出土遺物 (S = 1/4)

SK1 (Fig.93) L区 (91年度調査区) に位置する平面形態楕円形プランの土坑である。調査区の制約により全体を検出できていない。規模は長軸1.6m、短軸0.5m以上、深さ50cmを測る。土坑北側から完形品の土師器高坏が出土している。土坑は上面を近代以降の溝などから削平されているため、この高坏も本来は土坑埋土中に含まれていた可能性が高い。5世紀後半以降の構築と考えておきたい。

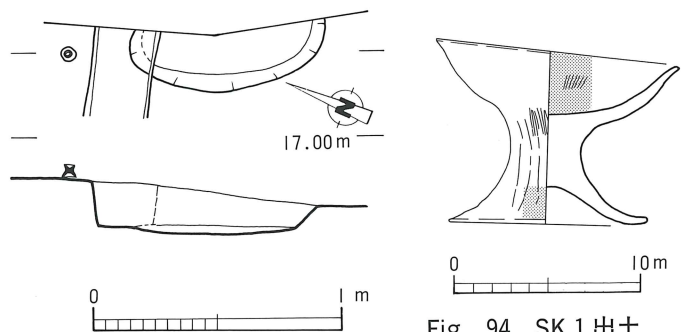


Fig. 93 SK1実測図 (S = 1/30)

出土遺物 (Fig.94) 1は土師器高坏で、器壁外面と口縁内面に赤色顔料の塗布が認められる。

Fig. 94 SK1出土遺物 (S = 1/4)

SK 2 (Fig.95) A区 (88年度調査区) に位置する平面形態楕円形プランの土坑である。規模は長軸1.5m、短軸1.1m、深さ20cmを測る。埋土は暗褐色粘質土の単一層で、分層できないが、焼土や炭を多く含む。床面および埋土中より須恵器・土師器が検出され、同時に被熱した拳大の石が1個出土している。土器の中には床面直上からや床面からやや浮いて出土するものがあるが、一括して廃棄された状況を呈している。この中には完存品はなく、いずれも一部欠損あるいは半欠の状況にあり、土師器甑のように破碎されたものが接合する出土状況を示すものもある。出土土器の組成をみると坏が4個体、供膳形態の高坏・鉢が2個体、甑が1個体認められる。これらの土器類は甑で穀類を炊飯し、それを高坏や鉢に盛りつけ、数名の人々が坏によそって共同飲食をするといった状況を想定することが可能である。その後飲食に使用した器をすべて破碎し、炊飯時に生じた焼土・灰・被熱した石とともに、土器類を土坑内に廃棄したと解釈したい。これらの行為は「祭祀」という概念に包括できるものであるが、その目的は明らかにできていない。土坑の時期は、5世紀末前後に比定される。

出土遺物 (Fig.96) 1・2は須恵器の坏身である。1の口縁端部には明瞭な段を有し、底部には回転ヘラ削りを施す。また、受部には坏蓋を重ねて焼いた「重ね焼き」の痕跡もみられる。1・2はいずれも陶邑編年第I型式4・5段階 (TK 23・TK47) に比定できる。3・4は土師器碗で、内外面ともナデ調整を施す。3は4に比べて、器壁がやや薄くスマートな印象を受けるが、いずれも口縁部がやや直立するクセをもち、同一工人によるものである可能性が高い。5は土師器の鉢で、口縁部に強いナデを施すため、外面に弱い稜がつく。内面はヘラ削り、外面上半部は不整方向ナデ、下半部は荒いミガキを施す。6は土師器高坏で、ボール状の坏部とラップ状に開く脚部を有するものである。脚部内面には、ヘラ削りとシボリ痕を有する。7は土師器の甑である。把手は同一個体の可能性があるものが1個出土しているが、接合していないので、図上復元している。底部には略半月形の透孔を2個穿つ。調整は内面が削り、外面をナデが主体となる。

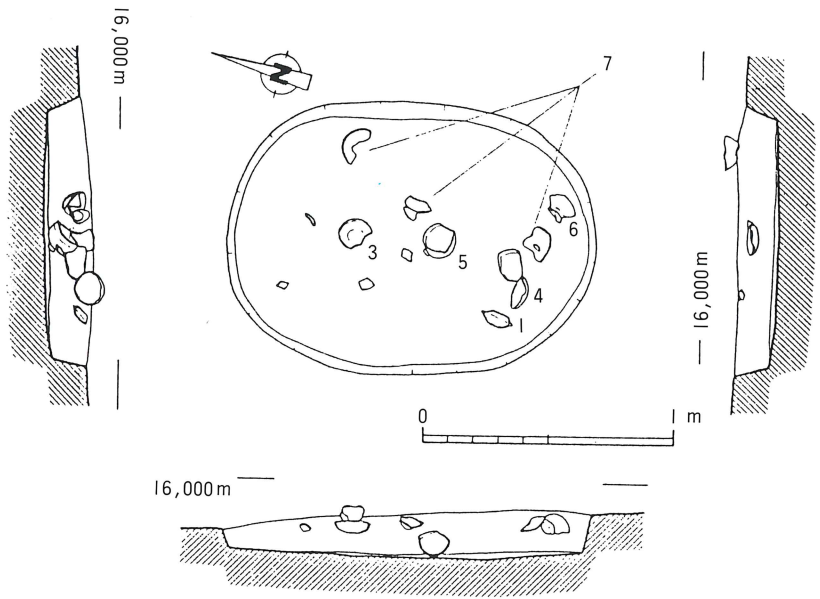


Fig. 95 SK 2 実測図 (S = 1/30)

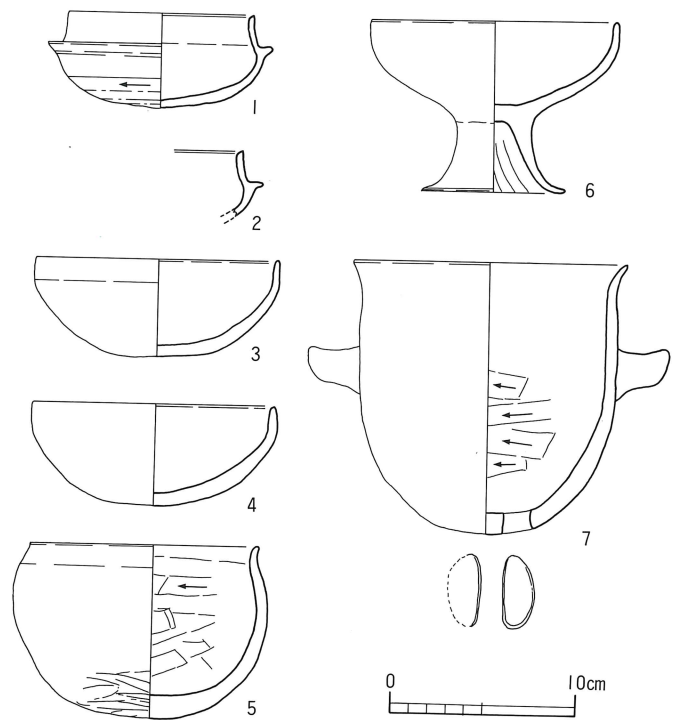


Fig. 96 SK 2 出土遺物 (S = 1/4)

SR 1 (Fig. 97) 調査区を斜めに縦断する形で検出された大規模な流路である。結論を先にいえば、当該遺構は水田耕作のために掘削された灌漑用水用の水路と推定される。総延長は約300mにおよび、幅・深さは地点によって差があるが、それぞれ2~4.8m前後、1m前後を測る。埋土は砂質土が主体で構成されており、流水の方向は西から東である。流路SR 1には後述する溝SD18~21が取り付いており、それらの溝はSR 1より分水して、水を取り込む施設であろう。特に、SD17との接続部には杭列や杭列と思われるピットが残存している部位が認められ (Fig. 97・98)、堰状の施設が設けられていたことが推定される。当該接続部の付近には7世紀前半前後に比定される須恵器 (Fig. 101-12) が出土しており、これらの杭列が7世紀前半頃には造営されたことがわかる。

埋土には須恵器・土師器をはじめとして、古墳時代中期から後期に比定される多量の遺物が含まれていた。出土遺物の中で詳細な時期を判別できる

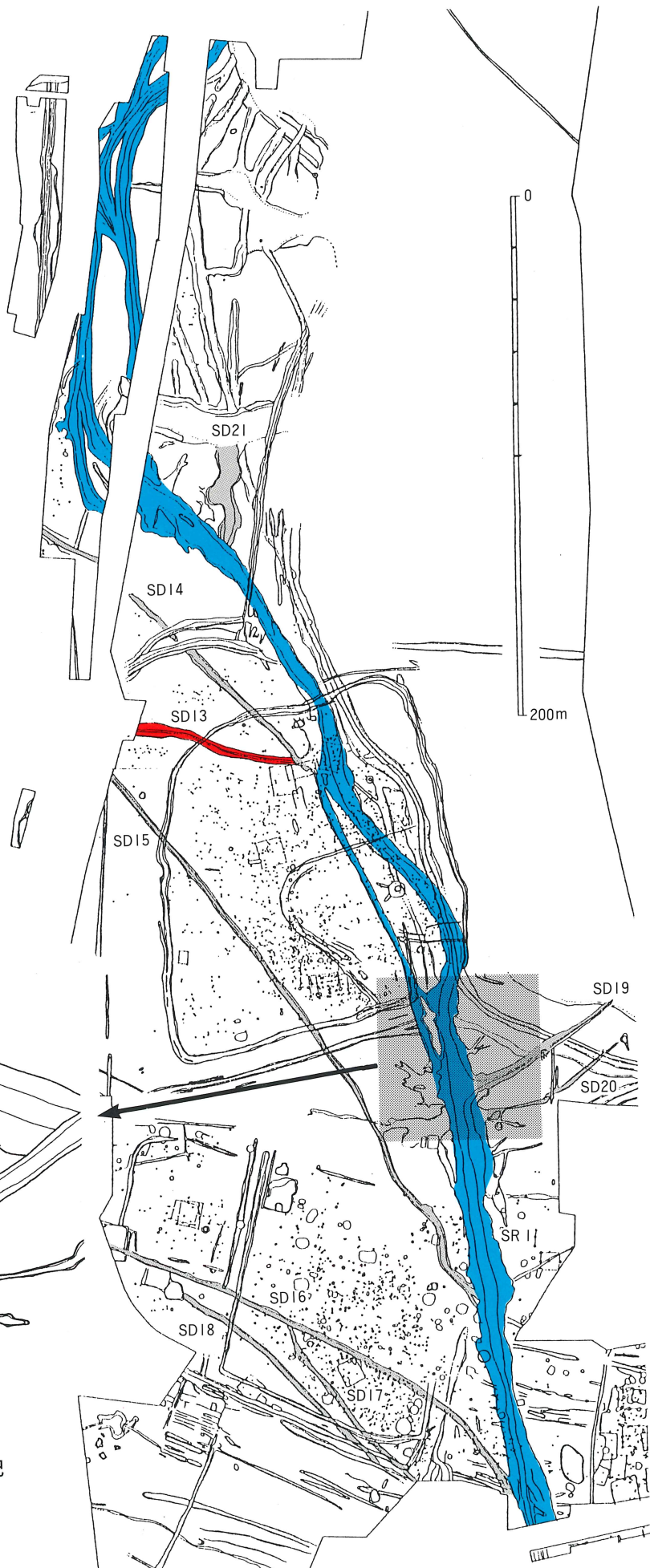
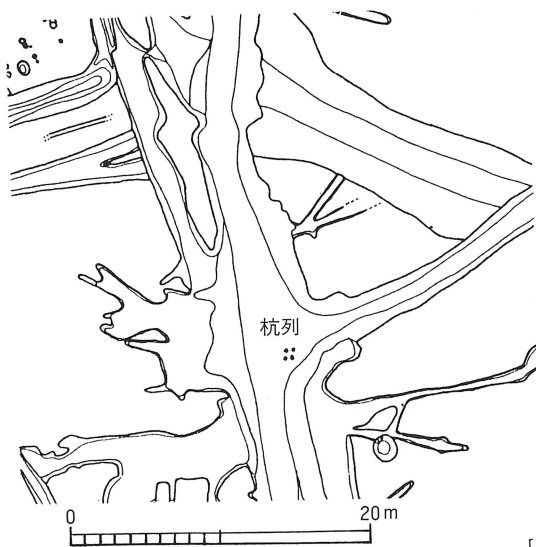


Fig. 97 流路SR 1と接続する溝
(青は流路SR 1、赤は5世紀後半、グレーは6世紀以降)



Fig. 98 SR 1 杭列周辺の状況 (s = 1/40)



クイ列検出状況

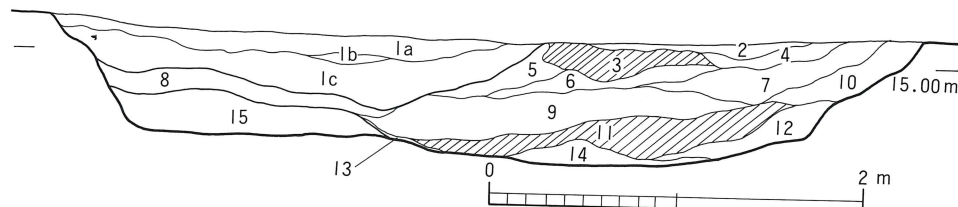


クイ列全景



クイ列細部

ものには、5世紀後半から7世中頃前後にわたるものが認められ、6世紀末から7世紀前半前後のものがやや多い印象を受ける。調査開始当初は出土量の多い6世紀末から7世紀前半が流路SR1の構築時期であり、それ以前の遺物はすべて流れ込みと考えていた。ところが、調査が進行するにつれて5世紀代の遺物も一定量以上が認められるようになり、最終的には、当該遺構が5世紀後半から7世紀前半前後まで引き続いて機能していたと判断するに至った。このような観点から、例えばFig.99で提示した土層断面図を検討すると、1c層下面や8・13・11・14・12・10層下面をつなぐラインなどに、掘り直しと解釈されるような整合面を認めることもできる。このことから、流路SR1は5世紀後半から7世紀前半前後の時期にわたり、数度の掘り直しや改修を受けてながら存続した遺構であると解釈される。また、H区(90~91年度調査区)の調査において、SR1上面から検出された遺物(Fig.101-3)の実年代より、7世紀中頃前後にはSR1が完全に機能を停止していることが推定される。さらに、土層断面には粗砂が認められる部位(Fig.99-3層および11層)があり、流路の埋積の原因のひとつが洪水によるものであることを示すものである。



- 1 灰黄褐色砂質シルト (lbは褐色砂質土のブロックを含む。lbで上下層に分類され、lcは砂質土のブロックを包む。)
- 2 褐色砂質シルト 3 にぶい褐色砂質土 (粗砂層) 4 黄褐色砂質土 5 にぶい黄褐色砂質土
- 6 赤褐色砂質土 (鉄分含む。細砂層) 7 褐色砂質シルト 8 赤褐色砂質土 (鉄分含む。6と類似。)
- 9 にぶい黄褐色砂質土 (細砂層) 10 灰褐色粘質土 11 にぶい褐色砂質土 (粗砂層)
- 12 暗褐色砂質シルト 13 酸化鉄のうすい帯状の層 14 灰黄褐色砂質土 15 褐色粘質土

Fig. 99 流路SR1土層図

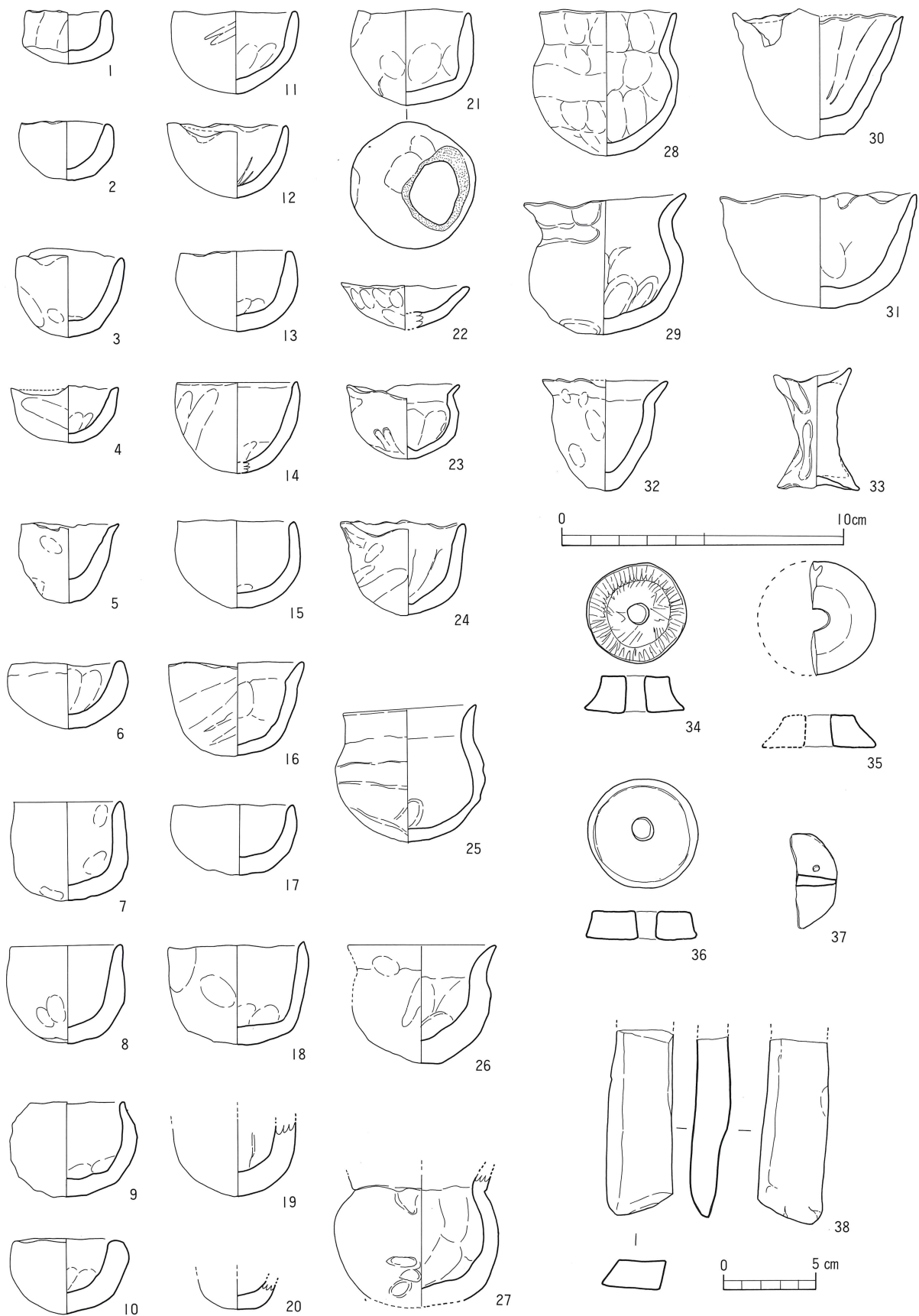


Fig. 100 流路SR 1 出土遺物① (1~37はS = 1/2、38はS = 1/3)

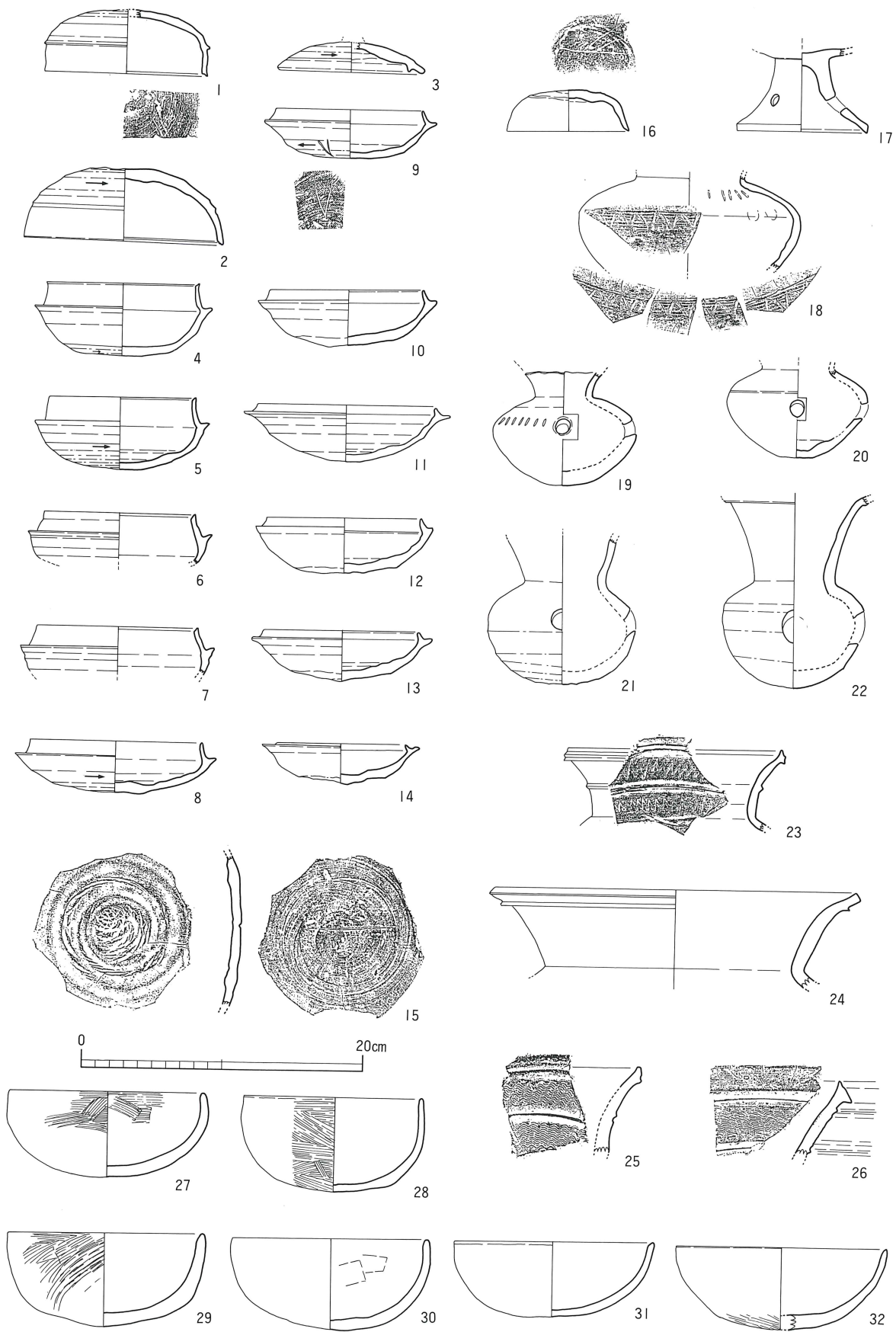


Fig. 101 流路SR 1 出土遺物② (S = 1/4)

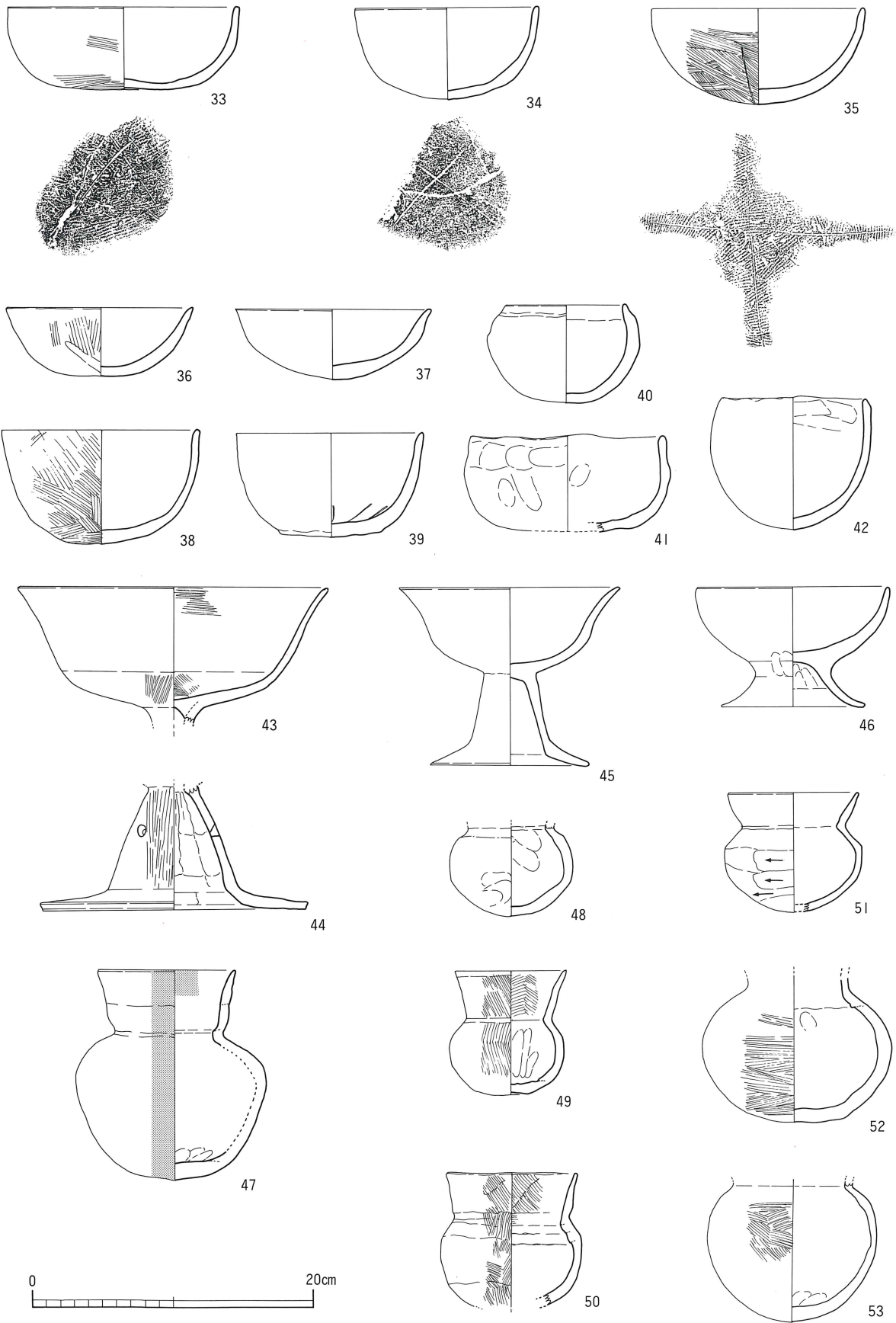


Fig. 102 流路SR 1 出土遺物③ (S = ¼)

出土遺物 (Fig.100~104) 流路SR1の出土遺物は多量に及んでおり、特に土器類については、その遺存率の大小を問題にしなければ、5世紀後半から7世紀中頃にわたる須恵器・土師器の代表的な器種がすべて出土しているといつてよい。ここでは紙幅の関係から、代表的なものや遺存率の大きいものを紹介する。Fig.100-1~33は流路SR1から出土したミニチュア土器である。1~24は埴形、25~29は壺形、30~32は甕形、33は器台形を呈する。また、21の底部には穿孔があり、意図的なものである可能性も考えられる。34~36は紡垂車で、いずれも滑石を素材とする。37は結晶片岩を素材とした円盤状の製品で、穿孔が認められる。垂飾具である可能性が高い。38は砂岩を素材とした砥石である。Fig.101-1・2は須恵器坏蓋で、1は陶邑編年第I型式4・5段階(TK23・TK47)、2は第II型式2段階(TK10)前後に比定される。製作年代は1が5世紀末前後、2が6世紀前半から中頃に比定される。また、2の天井部にはヘラ記号が認められる。3は須恵器埴の蓋で、天井部にツマミを有する形態に復元されるが、剥落した状態で出土した。陶邑編年第III型式1段階のもので、7世紀中頃に比定できる。当該資料はH区(90~91年度調査区)の調査時において、SR1の上面から検出されたもので、流路の機能の停止時期を示唆するものであろう。4~14は須恵器坏身である。4~7は第I型式4・5段階(TK23・TK47)のもので、5世紀末前後に比定される。8・9は第II型式4段階(TK209)前後のもので、6世紀末から7世紀初頭前後に比定される。8の体部には回転ヘラ削りが行われているが、底部は削り残されており、その部位にはナデが施されている。また9の体部外面にはヘラ記号が認められる。10~13は第II型式5段階(TK209新段階)のもので、7世紀前半前後に比定される。いずれも底部付近に回転ヘラ削りは認められず、未調整ないしはナデを施すのみである。15は須恵器提瓶の胴部破片で、回転ヘラ削りが施された外面にヘラ記号が認められる。6世紀後半代の所産である。16は須恵器短頸壺蓋で、天井部はヘラ切り未調整のままである。天井部にヘラ記号が認められる。7世紀前半代の所産である。17は高坏の脚部で、円形の透かしが存在する。5世紀後半から末に比定される資料である。18~22は須恵器甕で、18~20は5世紀後半から末、21・22は6世紀代に比定される。18は肩部に楡描き波状文、19は木口端による列線文が認められる。23~26は須恵器甕の口縁部で、いずれも5世紀後半から末の所産である。図示したものは、口縁部に突帯や楡描き波状文を施すものである。その他、須恵器甕には6~7世紀代のものが多数出土しているが、ここでは割愛した。27~Fig.102-42は土師器埴である。このうち、33~35の底部にはヘラ記号が認められる。また、40は口縁部周辺にナデを施し、無頸壺的な器形としている。43~45は土師器高坏で、5世紀後半以降の所産である。44には円形の透かし孔が認められる。47は土師器長頸壺で、外面と口縁内面の一部に朱塗りが施されている。5世紀後半代の所産である。48~53は土師器小型丸底壺で、この形態のものは5世紀後半代に比定されるものであろう。Fig.103-54~56は土師器甕で、いずれも6世紀代の所産である。57は土師

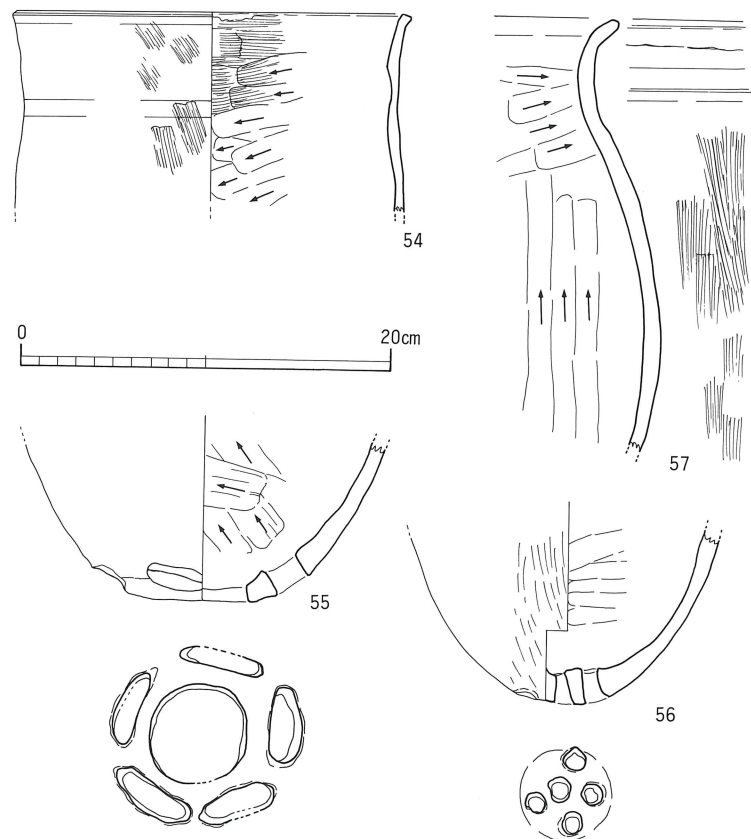


Fig. 103 流路SR1出土遺物④ (S = ¼)

器甕で、長胴気味の器形を呈するものである。6世紀後半から7世紀代に比定される。Fig. 104は耳環で、銅芯部分のみが残存しており、表面の金箔部分は完全に剝落している。

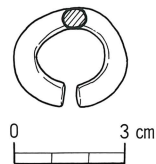


Fig. 104 SR 1出土耳環 (S = 1/2)

SD13~21 SD13~21は流路SR1に付属する溝で、SR1より分水して、水を取り込む施設と推定される。これらの溝はSD13が5世紀後半代に比定されるほかは、すべて6世紀代以降に構築された可能性が高い。

SD13 88年度調査区(C区)で検出された幅2.5m、深さ60cmの溝で、総延長約30mを確認した。部位によっては、断面が二段掘り状を呈する部分が認められる。水流の方向は北側と思われ、南側では流路と接続する。埋土上位より、ほぼ完形の土師器甕や高坏、中位よりミニチュア土器が出土しており、これらは5世紀後半代に比定される。また、この溝が流路と接続していることから、SR1の上限年代が5世紀後半代に遡ることを傍証していると考えられる。

出土遺物 (Fig. 105-1~3) 1はミニチュア土器で、粘土帯の折り返しによって口縁部を形成する。内外面には指頭によるわずかな凹みが認められる。2はやや小型の土師器甕で、外底部は赤変しており、口縁外面の一部と胴部外面にはススの付着が認められる。3は土師器高坏である。調整は内外面ともハケメを主体とするが、脚部内面にはシボリ痕が認められる。脚部内面下位には甘い稜線が認められ、シボリ痕とハケメ調整との境となっている。以上の土器類は、5世紀後半代に比定される。

SD14 88~91年度の調査区であるC・D・H区を斜めに縦断する形で検出された溝で、その規模は幅0.5~1.5m、深さ約70cm、総延長約70mを測る。断面の形態は逆台形であるが、89年度調査区(D区)では二段掘り状を呈する部位も認められる。水流の方向は北側で、南側では流路と接続するとともに、5世紀後半代の溝であるSD13と切り合い関係を有する(構築順序はSD13→SD14)。出土遺物には小片が主体を占め、図示できる遺物はないが、遺構の切り合い関係より6世紀代以降に比定できる。

SD15 87~89年度の調査区であるA~C区を斜めに縦断する形で検出された溝で、その規模は幅約1.5m、深さ約70cm、総延長126mを測る。断面の形態は逆台形である。水流の方向は北側で、南側では流路と接続する。埋土中より土師器碗が出土しており、遺構の構築年代は6世紀代以降である可能性が高い。

出土遺物 (Fig. 105-4) 4は土師器碗で、内外面は風化により、詳細な調整は不明である。6世紀代以降に比定される遺物である。

SD16~18 88年度および91年度調査区(A・L区)で検出されたSR1に接続する溝である。その規模はいずれも幅1m前後、深さ約70cmを測り、SD16は約85m、SD17は約40m、SD18は約60mを検出している。断面の形態は、いずれも逆台形を呈する。出土遺物には小片が多く、遺構の詳細な時期を確定できないが、6世紀代以降に比定される可能性が高いと考える。

SD19・20 87年度および90年度調査区(B・E区)で検出されたSR1に接続する溝である。SD19は

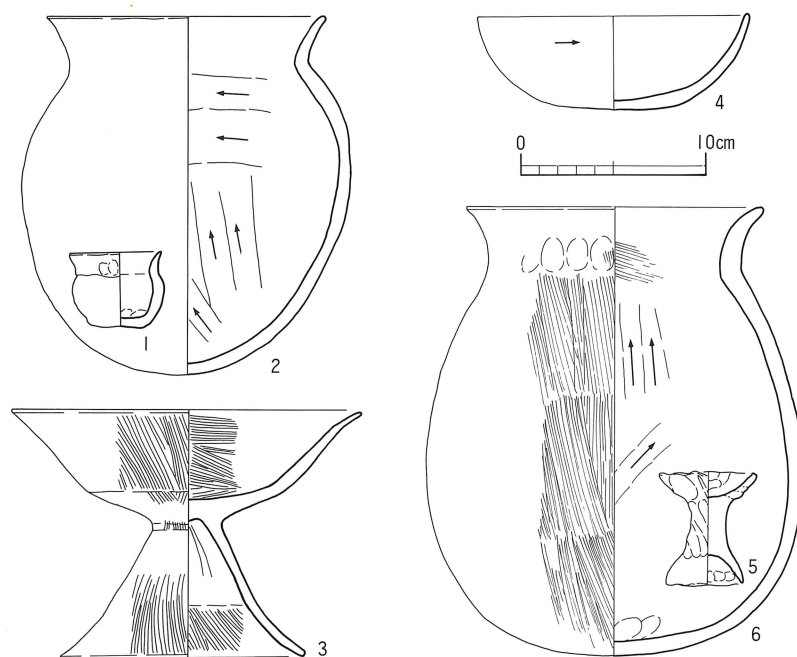


Fig. 105 SD13・15・19・20出土遺物 (S = 1/4)
(1~3 SD13、4 SD15 5・6 SD19・SD20)

幅1.5～2 m、深さ約40cm、延長約60mを測る。流路SR1との接続部には杭列が認められた (Fig.99)。SD18は幅0.5～1.5m、深さ約40 cm、延長約30mを測る。SD17・18の出土遺物には互いに接合するものがあり、両者が同時併存したことを示している。遺構の構築時期は、6世紀後半以降に比定される。

出土遺物 (Fig.105—5・6) 6は土師器甕で、やや長胴気味の胴部をもつ。6は器台形を呈するミニチュア土器で、ミニチュア土器としては大型の部類に属する。5・6とも6世紀後半代以降の所産であり、いずれもSD19およびSD20から出土した破片が互いに接合した。

SD21 (Fig.106) 89・90年度調査区 (C・F区) で検出された溝で、幅約4 m、深さ約1.1m、総延長21mを測る。断面の形態は逆台形を呈する。埋土下位には流木を多量に含んでいる。流木を包含する埋土とほぼ同レベルで、ミニチュア土器や須恵器・土師器の小片が出土した。出土遺物より、遺構の構築時期は6世紀後半から7世紀前半前後の時期と推定される。

出土遺物 (Fig.107) SD19の出土遺物の中で、ミニチュア土器土器のみを図示した。1・2いずれも碗形を呈するもので、SD19埋土中の流木群とほぼ同一レベルより出土している。

SL2 90年度調査区 (F区) の中央西側の一部に堆積する包含層で、弥生時代と古墳時代の遺物が少量検出された。弥生時代の遺物については26～27頁ですでに紹介した。古墳時代の遺物も、少量出土している。

出土遺物 (Fig.108・109) Fig.108は小型勾玉で、滑石を素材とする。Fig.109—1は須恵器高坏蓋で、6世紀末から7世紀前半の所産である。2は土師器碗で、外面に朱塗りが認められる。

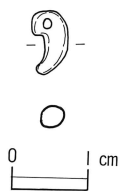


Fig. 108 SL 2 出土 出土勾玉 (S = 1/1)

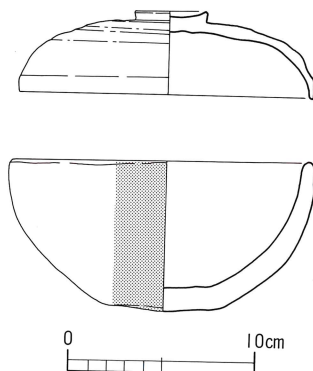


Fig. 109 SL 2 出土遺物 (S = 1/4)

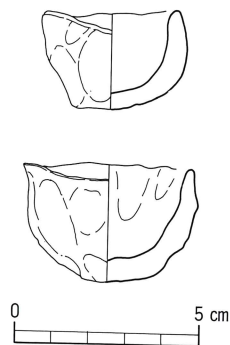


Fig. 107 SD21出土遺物 (S = 1/2)

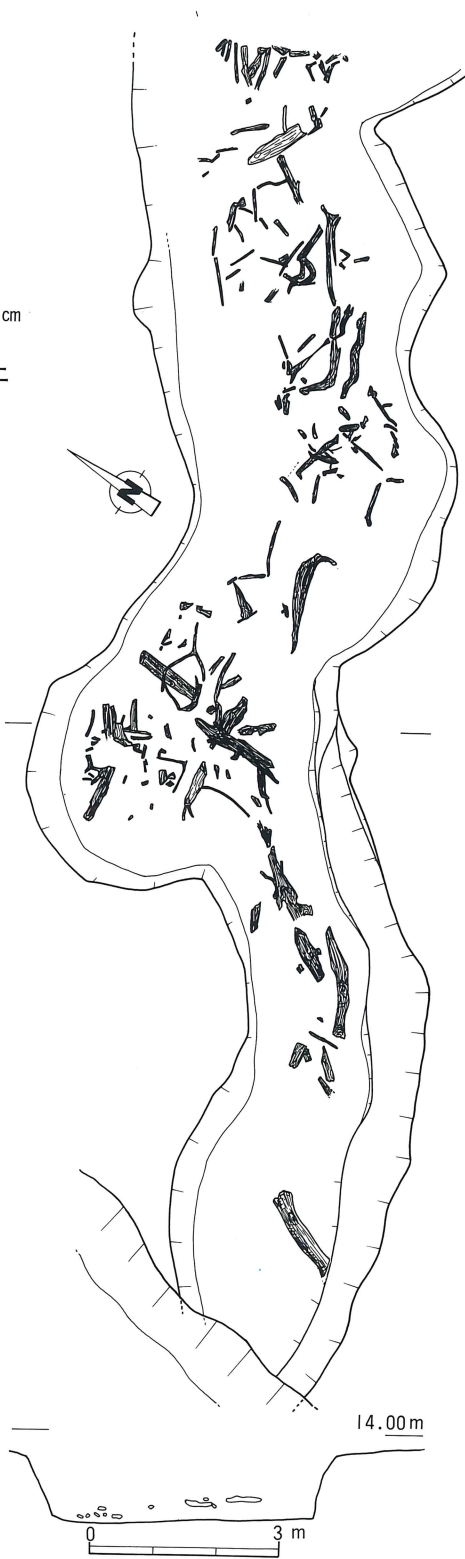


Fig. 106 SD21実測図 (S = 1/120)

小結 植田市遺跡における古墳時代中・後期の遺構としては、流路とそれに付属する溝、および住居跡がある。古墳時代中～後期を5世紀後半・5世紀末から6世紀初頭・6世紀代以降の3時期に分けて、遺構の変遷を図示したものが、Fig.110である。以下、各小時期ごとの遺構の状況を瞥見して、小結とする。

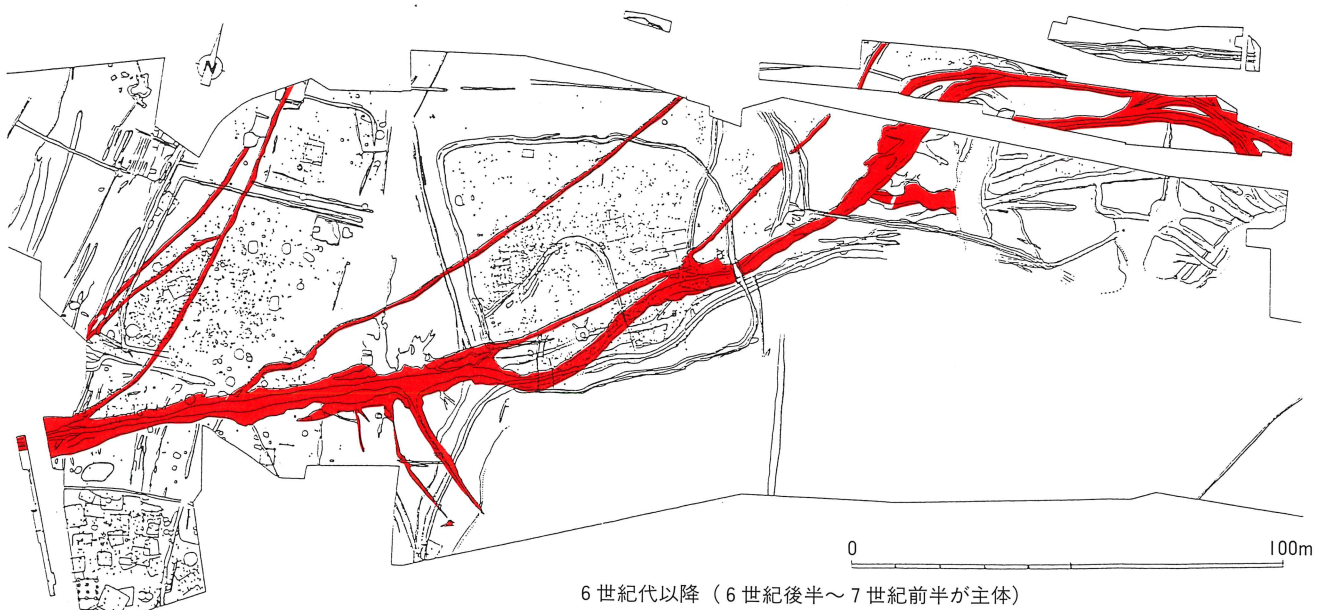
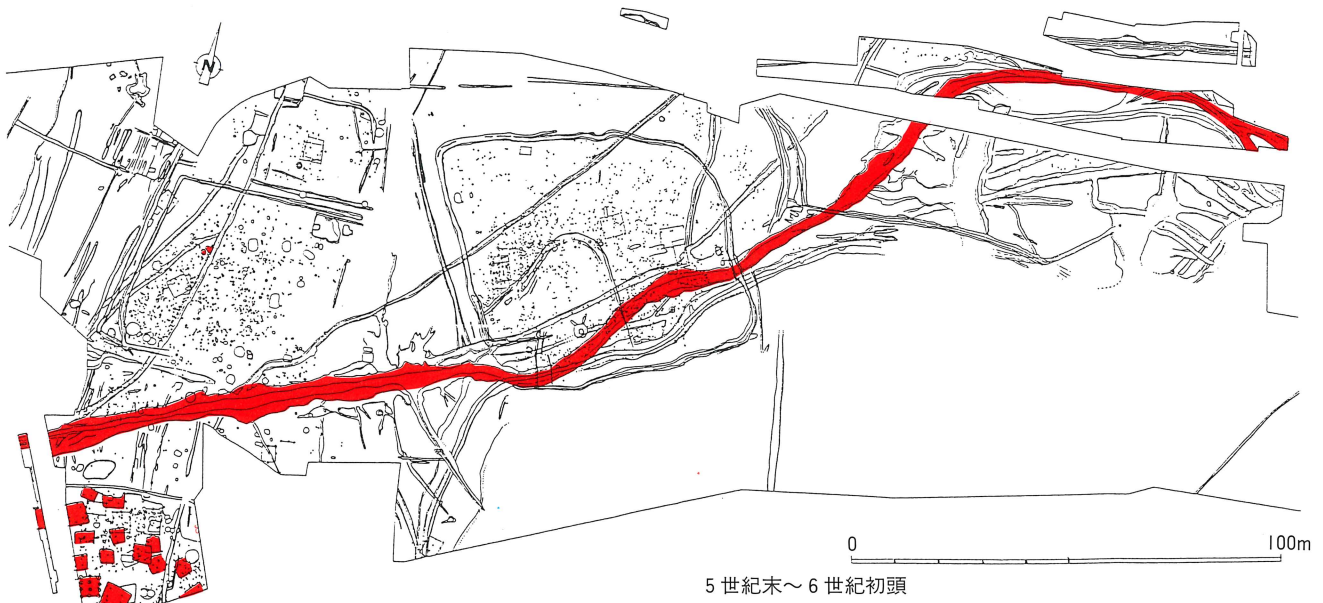
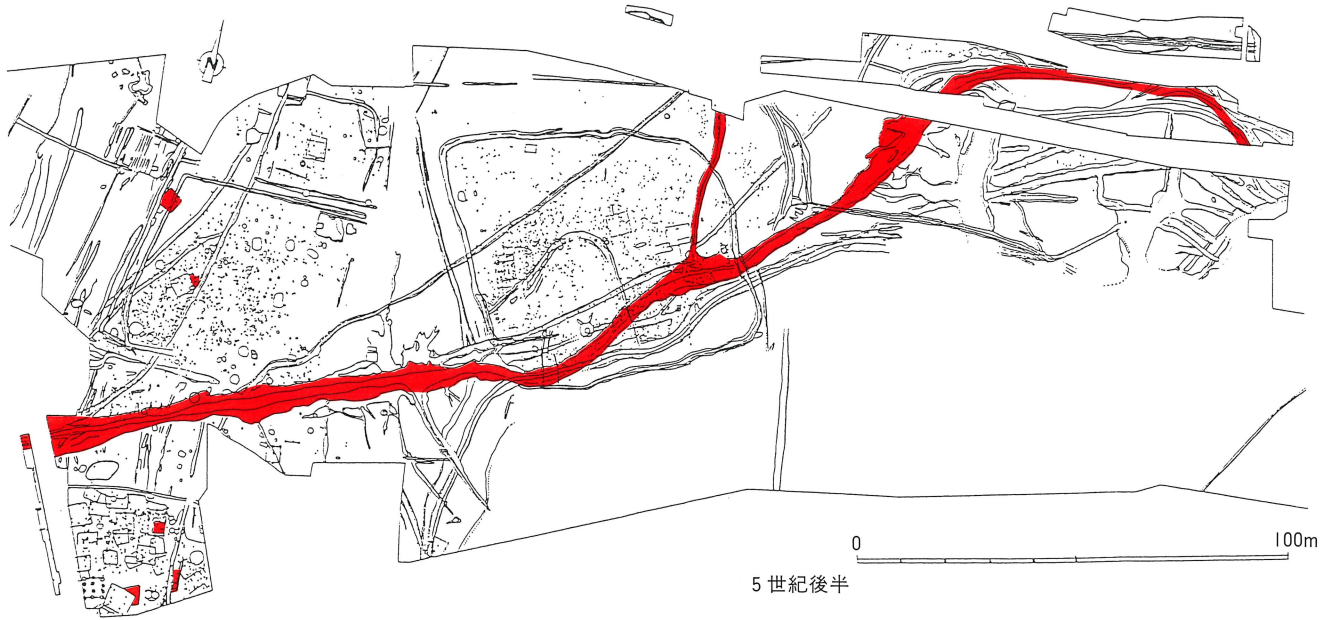


Fig. 110 穂田市遺跡における古墳時代中～後期の遺構

5世紀後半になると、沖積低地の縁辺部に沿う形で流路SR1が掘削される。当該遺構は水田耕作の灌漑用水に使用されたと推定され、この時期には流路から分水して、水を取り込む溝であるSD11が、すでに付属している。流路SR1は、弥生時代後期末から古墳時代前期に比定される溝SD1（28～40頁参照）とほぼ同一の場所に位置する部位もある。このことは弥生時代後期末から古墳時代前期の溝SD1の埋没後、古墳時代中期の5世紀後半代に、前代の溝を拡張・延長する形で、流路SR1が新たに掘削されたと解釈してよい。ただし、SD1の取水口は90年度調査区（E区）の延長部、流路SR1の取水口は91年度調査区（L・M区）の延長部に存在すると推定され、それぞれの取水口の位置は大きく離れているものと思われる。これはSD1の最終埋没が布留式古段階（4世紀後半代？）に比定され、流路SR1の初めての掘削時である5世紀後半代と、時間的にヒアタスを認めることも関係する。溝SD1と流路SR1の取水口の位置の相違は、川の流れの変化などの自然的な要因も考えられようが、さらなる耕地の拡大を指向した人為的あるいは意図的なものである可能性が高いと考える。当該時期には91年度調査区（L・M区）の北側と南側で住居が造営され、疎散的ではあるが、集落が構成されたものと思われる。当該時期の比較的良好な土器資料を出土した住居跡はSH3・SH6・SH22の3基に留まるが、遺構の切り合い関係からSH12やSH17も当該期のものである可能性が高い。これらの住居跡はその位置関係から、当然流路SR1の構築や運営に関した人たちの遺構であろう。

5世紀末から6世紀初頭、すなわち陶器編年の第I型式4・5段階（TK23・TK47）～第II型式1段階（MT15）になると、91年度調査区（L・M区）の南側に住居跡が密集して営まれるようになる。当該時期に属する住居跡は15基を数えるが、切り合いを有するものがあり、すべてが同時に併存したわけではない。また、掘立柱建物SB1は第II型式1段階（MT15）に下るものであるが、住居跡の一部と同時期に存在した施設である。さらに、周辺の未調査の区域にも住居跡が分布していると推定され、当該時期には一定規模の集落が存在したと思われる。また、流路も一部に掘り直しなどの改修が加えられ、引き続き存続したものと考えられる。

6世紀前半代以降になると、住居跡の造営は行われなくなり、今回の調査範囲の領域では集落は営まれなくなる。流路SR1には、付属の溝SD12～SD19が新たに接続される。SR1と溝SD17の接続部には杭列が認められ、その杭列の周辺からは第II型式5段階（TK209新段階）に比定される須恵器が出土している。流路SR1に付属する溝には出土遺物が互いに接合するものが認められるなど、同時併存を示すものもある。詳細な時期を確定する遺物が出土していない溝も、遺構の状況から考えれば、6世紀後半から7世紀前半を主体とする時期に構築された可能性が高い。従って、当該時期には流路SR1に付属する溝を多数取り付け、さらなる水田可耕地の拡大を指向したものと考えられることができる。なお、流路上面から第III型式1段階（TK217）に比定される須恵器蓋が出土しており、7世紀中頃には流路SR1はその機能を完全に停止している。今後は当該時期に対応する集落の位置を探索する必要があるだろう。

(5) 古代の遺構・遺物

古代（奈良・平安時代）に比定される遺構は、次のとおりである（Fig.111）。

S D 22 9世紀代の溝

S D 23・24 8世紀代の溝

以下、遺構・出土遺物の詳細を紹介する。

S D 22 (Fig.112) 87年度調査区（B区）で検出した、東西方向に延びる溝である。上面は後世の整地によってかなりの削平を受けており、さらに東側を近世の石組み溝から切断されている。本来の規模は不明であるが、残存長11.4m以上、幅0.3~0.7m、深さ約10cmを測る。埋土は黄褐色砂質土であり、溝底のレベルよりみて、東側へ向って水が流れていた可能性がある。また、南側にはコブ状の張り出しが数箇所認められるが、これらが水口の役割を果たしたかどうかは不明である。出土遺物には、埋土上面から完存品の土師器皿と三片に割れた黒色土器杯の半欠品が出土したほか、埋土中より古墳時代の須恵器・土師器の小片が多数混入していた。

出土遺物 (Fig.113-1・2) 1は黒色土器の杯で、内面と口唇部外面約半周に炭素を吸着させて黒色としている。底部は左回りの回転ヘラ削りを施す。2は土師器の皿で、口縁部が外反する器形を呈する。内底付近は不整ナデ、口縁から胴部にかけては回転ナデを施し、底部はヘラ切り離しのままである。いずれも9世紀代の所産である。

S D 23・24 (Fig.112) 90年度調査区であるI・J区を縦断する形で検出された2条の溝で、切り合い関係を有するものである。S D 24→S D 23の順で構築されており、両者とも砂質土が堆積するなどの流水の痕跡を示す。S D 23はI区では幅1.4m、深さ約60cm、延長約49mを測る。溝は調査区を越えて東側のJ区に続いており、さらに調査区外に延びる。検出されたS D 23の総延長は、J区までの約100mを測る。出土遺物には8世紀代に比定される土師器や石製沈子（石錘）がある。S D 24の残存状況は良好でなく、正確な規模は不明である。I区では36mが検出されており、東側のJ区での延長約30mとあわせ、総延長は約90mを測る。出土遺物には小片が多く、詳細な時期を確定できない。

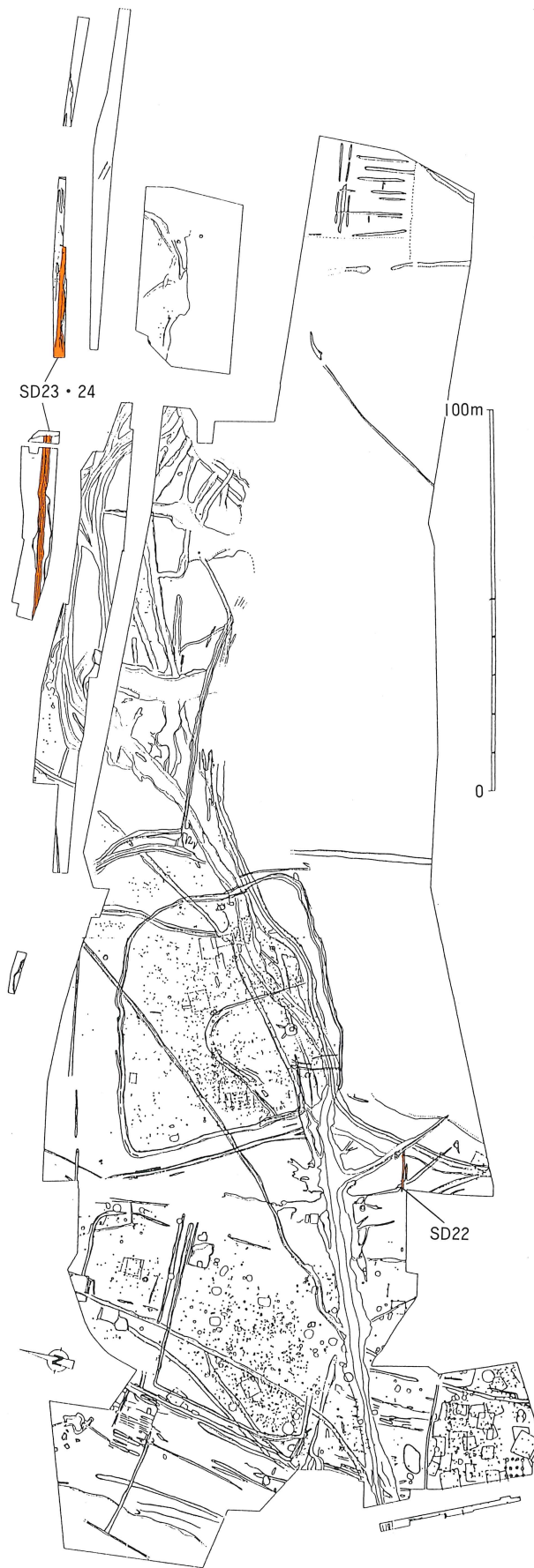


Fig. 111 古代の遺構

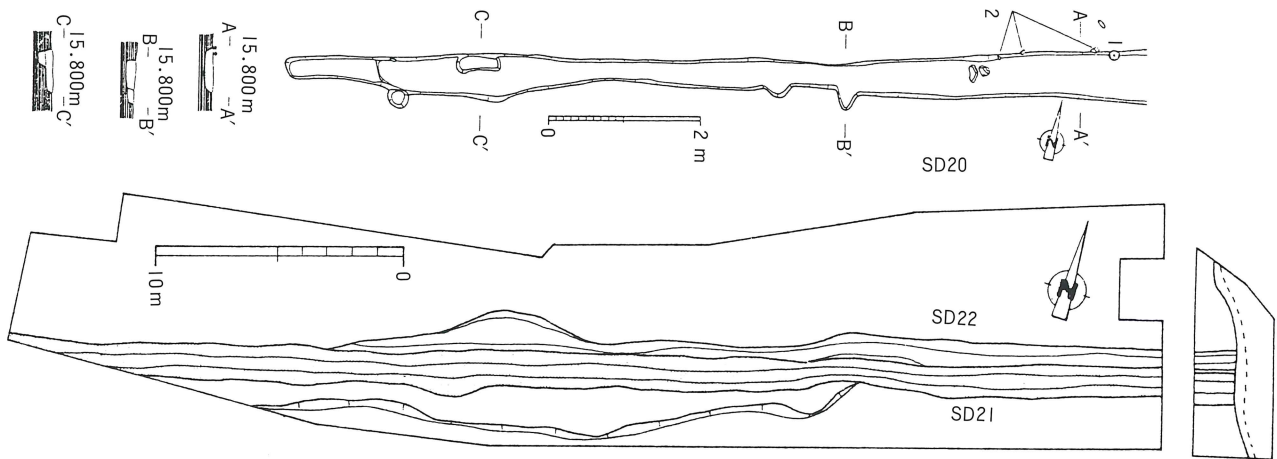


Fig. 112 SD22~24 実測図 (S = 1/100またはS = 1/300)

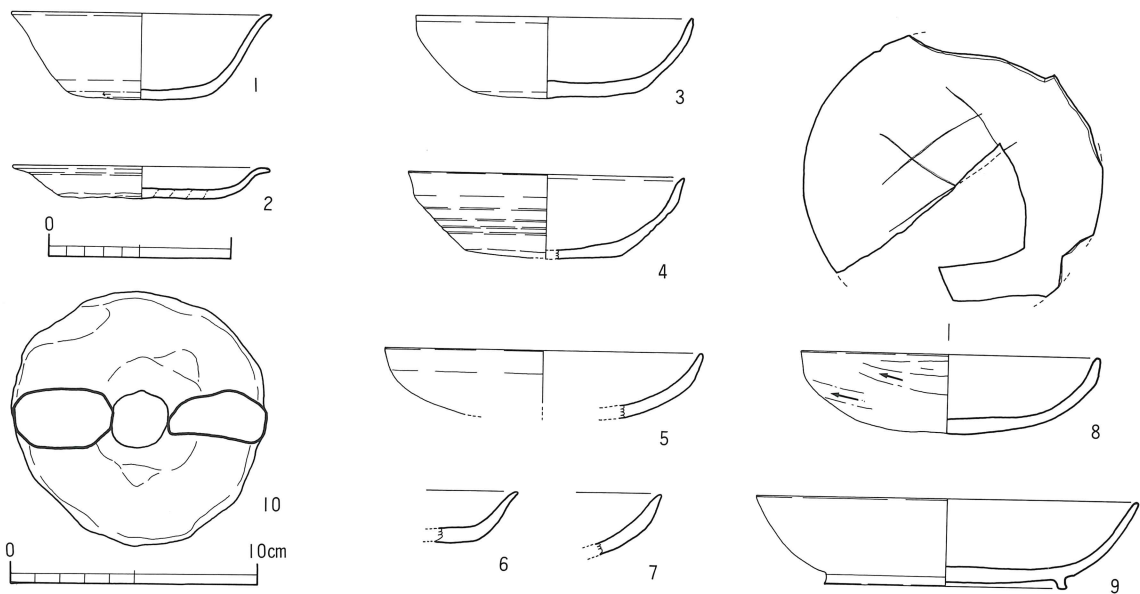


Fig. 113 SD22・23 出土遺物 (1・2 SD22 3~10 SD23 1~9はS = 1/4、10はS = 1/3)

出土遺物 (Fig.113-3~10) SD23の出土遺物を紹介する。3・4は口縁端部が外反気味に立ち上がる器形を呈する。底部はヘラ切りであるが、磨滅が著しく、仕上げの調整にヘラ磨きが一部認められる他は不明である。5~8は土師器皿である。いずれも器表面の磨滅が著しいが、8の底部から胴部にかけては手持ちヘラ削りが施されている。また、8の内面にはヘラ記号が認められる。9は土師器碗であるが、やはり器表面の磨滅が著しい。3~9の土器資料は、器形や調整の特徴から8世紀代に比定される。10は石製沈子(石錘)である。砂岩質の素材が使用されている。

その他 遺構検出中に一括して取り上げた遺物の中に、緑釉陶器があったので、ここで図示しておきたい。Fig.114-1~3は、いずれも胎土が須恵質を呈する緑釉陶器である。1・2は口縁部、3は底部で、いずれも畿内産のものである可能性が高い。1・2は91年度調査区(L区)、3は88年度調査区(C区)より採取したものである。

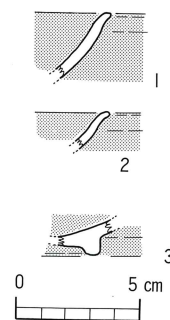


Fig. 114 緑釉陶器 実測図 (S = 1/4)

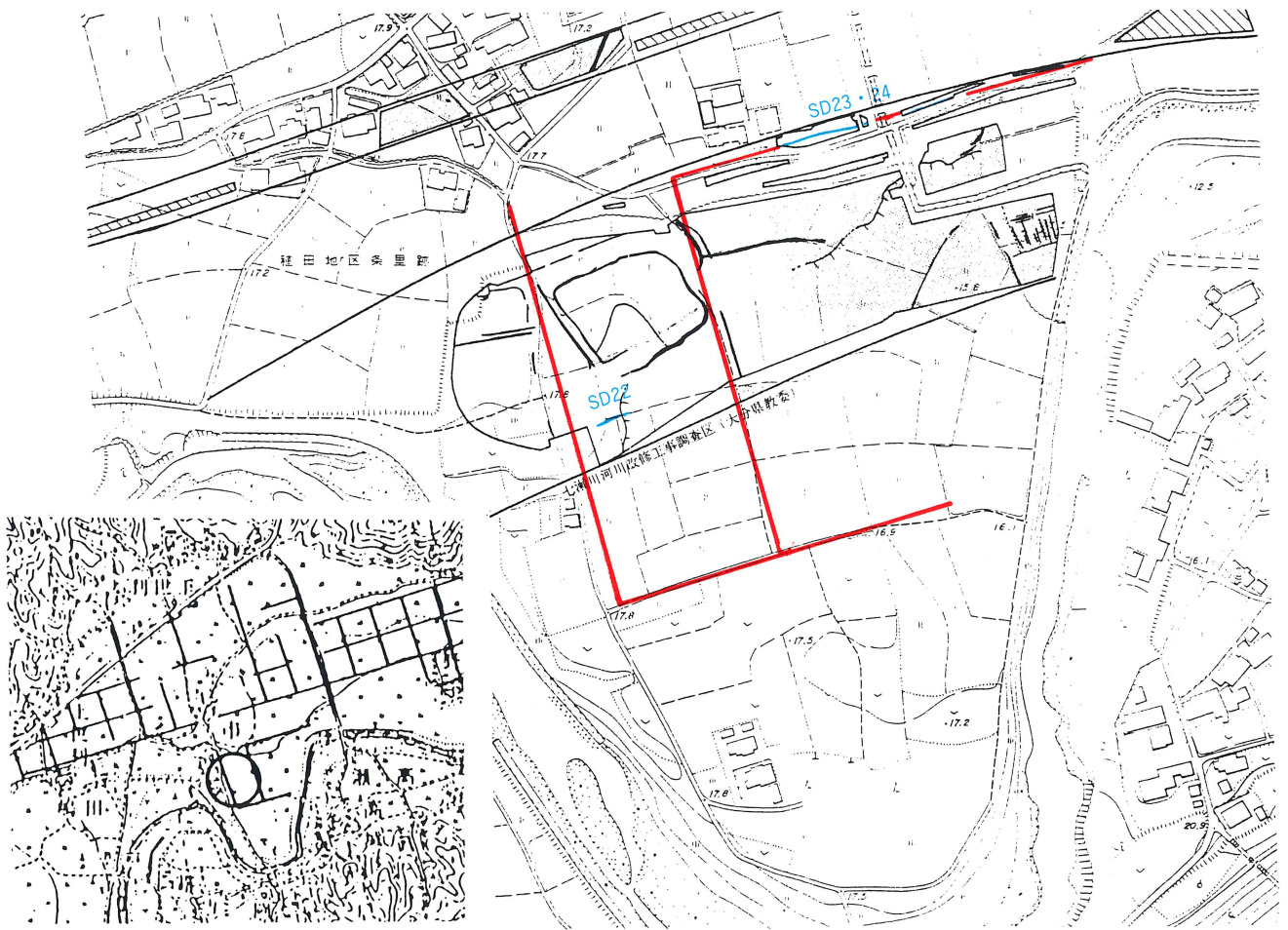


Fig. 115 古代の遺構 (SD22~24) の位置と「植田条里」

小結 植田市遺跡において古代(奈良・平安時代)に比定される遺構は、溝3条(SD22~24)である。確認しておきたいが、今回の発掘調査においてはSD22が9世紀代、SD23が8世紀代、SD24はSD23に切られており、それより古い時期に比定されるため、同時に併存したものは存在しない。ところが、これらの遺構の位置を大縮尺の地形図に重ねてみると(Fig.115参照)、SD23・24の位置は現状で使用されている舗装道路の方向を踏襲しており、SD22は現在の水田畦畔の一部に同一方向を示すものが認められる。植田市遺跡の周辺一帯はいわゆる「植田条里」として知られており、1955年にはすでに兼子俊一によって一町(約108m)四方の区画ラインが復元されている⁽¹⁾。注目したいことは、SD23・24の方向と重なる舗装道路は兼子の復元ラインと一致しており、さらにSD22と同一方向の水田畦畔は兼子の復元ラインから約一町(約108m)の位置に存在していることである。このことは、SD22~24が条里制に基づく一町四方の大区画に関連する遺構であるとの印象を強くもつものである。この想定が正しければ、植田市遺跡の周辺では条里制に基づく一町四方の区画が、少なくとも一部でなされており、その年代も8・9世紀代に遡る可能性が考えられる。ただし、今回検出した溝SD22~24は残存状況が不良であったり、延長部をすべて確認できていないことから、この事例のみを以て植田条里の起源やその具体的な区画施設に説き及ぶことは、さらに慎重な態度が要求されるものであろう。今後の課題としておきたい。

註 (1) 兼子俊一「大分県下の条里遺構」(『大分県地方史』第4号 1955年)

(6) 中世の遺構・遺物

中世に属する遺構・遺物を、以下の順で紹介する (Fig.116・117)。

・中世屋敷とそれに関連する遺構

- S D 25 屋敷地を区画する溝
- S B 2～9 中世屋敷内の掘立柱建物跡
- S E 1・2 中世屋敷内の井戸の中で、屋敷の存続時期に存在した可能性が高いもの。
- S K 3～5 土師質土器を一括出土したもの (S K 3)、備前焼を破砕して埋納したもの (S K 4)、上面に石組みを有するもの (S K 5) がある。
- S T 1 屋敷墓と思われるもの。
- S X 2 屋敷の廃絶後に形成された畝状の遺構

・中世屋敷敷地内に位置する遺構で、屋敷跡に先行する可能性が高い遺構

- S E 3 竹ザルを出土した素掘りの井戸
- S T 2 墓と思われる遺構

・中世屋敷外に位置する遺構

- S B 10～16 中世に比定される可能性が高い掘立柱建物跡で、S B 10は90年度調査区 (E区)、S B 11は88年度調査区 (A区)、S B 14～16は91年度調査区 (L区) に位置する。
- S P 1 90年度調査区 (F区) に位置するピットで土師質土器小皿を出土したもの。
- S E 4・5 いずれも88年度調査区 (A区) に位置する井戸で、S E 4は石組み井戸、S E 5は素掘りの井戸。
- S K 6・7 S K 6は91年度調査区 (L区) に位置する土坑で、瓦質土器火鉢を出土。S K 7は90年度調査区 (F区) に位置する土坑で、備前焼底部と土錘、サシ銭を出土。

中世屋敷跡 (Fig.117) 87～89年度調査区 (B・C区) で確認された、四方を溝で囲まれた屋敷跡である。溝で囲まれた空間は東西約63m、南北約58mを測る。その内部には掘立柱建物をはじめ、井戸・土坑・屋敷

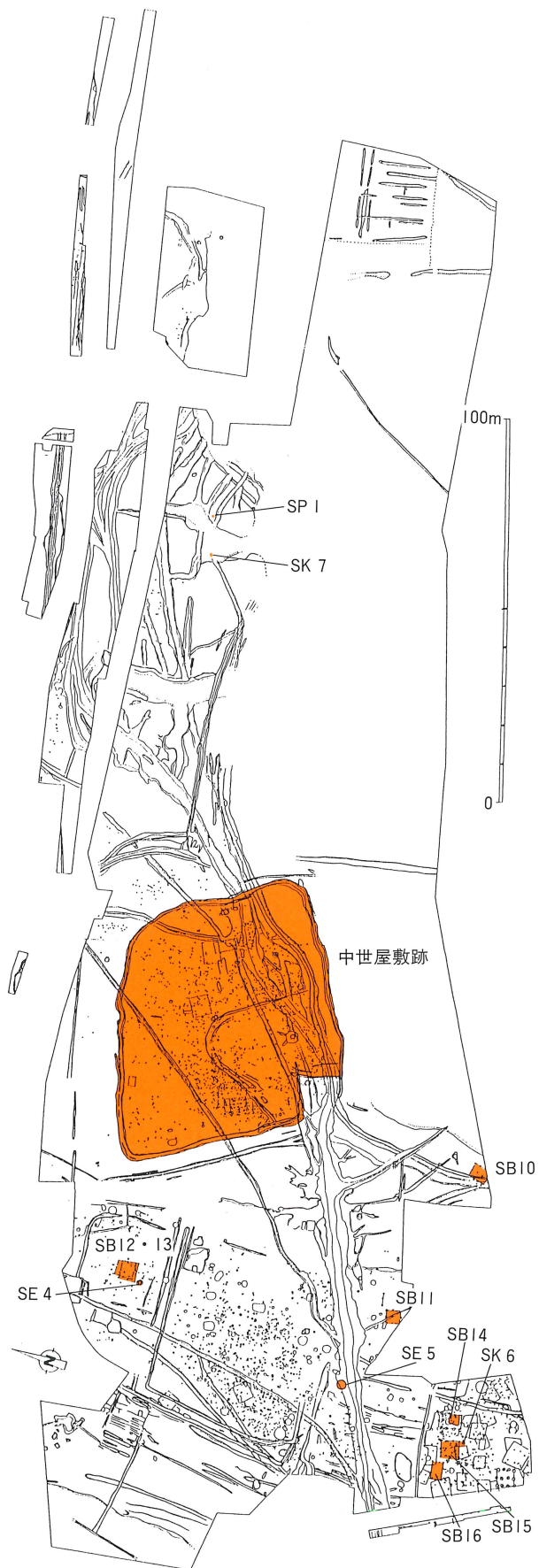


Fig. 116 中世の遺構

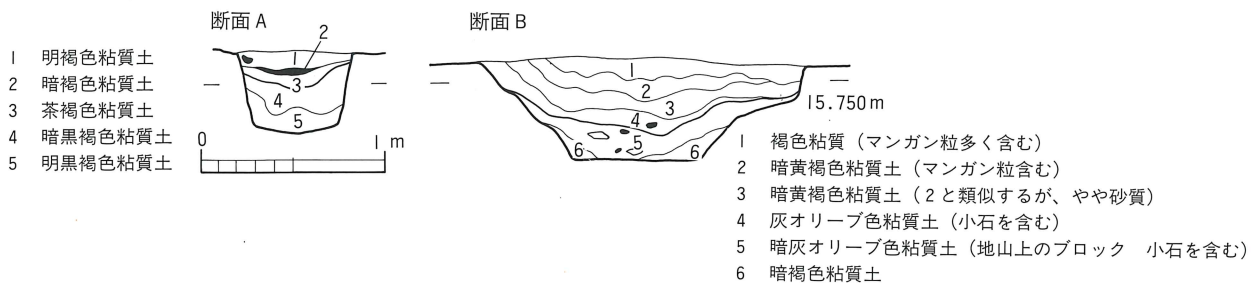


Fig. 117 中世屋敷跡と敷地内に位置する遺構 (S = 1/400、溝断面は S = 1/40)

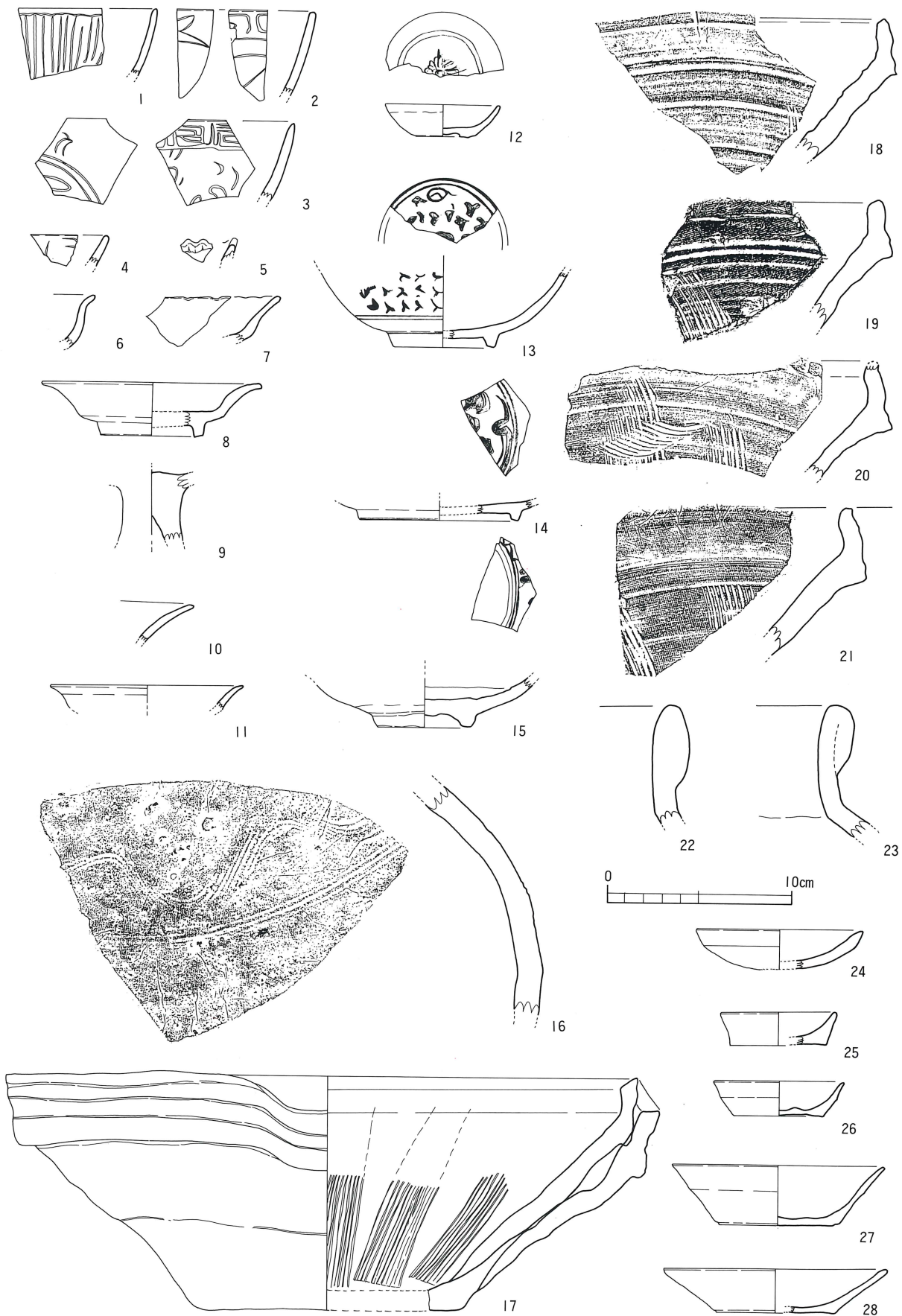


Fig. 118 SD25出土遺物① (S = 1/3)

墓などの施設が認められ、それらの存続時期は15世紀後半から16世紀前半を主体とするものである。なお、屋敷跡の敷地内では多数の柱穴が検出されたが、1頁でも記したように、工事日程や天候不順による調査区水没などの事情から、柱穴間の配列や切り合い関係などを十分把握しないままに遺構の掘り下げを強行したため、柱穴配置による掘立柱建物の復元・抽出が完全ではない。この点は率直に発掘現場での不手際を認めざるを得ない現状にあるが、図上にて復元された建物配置によると、SB 2～4が位置する付近に数度の立て替えを認める母屋的な建物が存在し、それとは別に数棟の掘立柱建物が存在していたことは確実である。また、屋敷内から検出された柱穴群には密集する地区と疎散的な地区があり、溝で囲まれた屋敷地内には意外と建物の棟数は少なく、かなりの空閑地が存在したことを見て取れる。屋敷の存続期間に営まれたと思われる井戸には、石組み井戸(SE 1)と素掘りの井戸(SE 2)があるが、両者が併存したのか順を追って構築されたのかを判断する所見は得られなかった。また、屋敷の東側中央に位置するST 1は、この屋敷地に付属する屋敷墓である可能性が高い。さらに土師質土器を一括埋納したピット(SK 3)や備前焼を破砕して埋納した土坑(SK 4)など、祭祀的な性格の強い遺構も存在する。

SD 25 (Fig. 117参照) 中世屋敷跡の四方を区画する溝である。溝の平面形態は隅丸不整形を呈し、南西側には出入口と思われる大きな開口部を有する。SD 23の東辺は約45m、西辺は約48m、南辺は約55m、北辺は約62mを測る。幅や深さは部位によって異なるが、それぞれ0.8～2 m、0.5～1 mを測り、西辺南側では特に大規模になる状況が認められる。また、北辺溝ではU字状に蛇行する部位が認められ、その付近はなんらかの出入口であった可能性が考えられる。堆積土の大部分は粘質土で、流水の痕跡は認められず、機能時には空堀状を呈していたものと推定される。埋土中の出土遺物より、遺構の構築時期は15世紀後半から16世紀代が主体となるものと思われる。

出土遺物 (Fig. 118・119) Fig. 118-1～9は中国産の青磁である。1は細連弁文青磁碗と呼ばれるもので、15世紀後半から16世紀前半に比定される。2・3は雷文帯青磁碗で、製作年代は14世紀後半から15世紀前半である。4も青磁碗で外面に片彫り文様が認められる。15～16世紀代の所産であろう。5は口縁端部の破片で、器種は不明であるが、特殊な器形を呈する青磁製品である。12世紀以降に比定される。6は青磁碗あるいは鉢の口縁部で、14世紀以降の製品である。7・8は15世紀後半から16世紀前半に比定される青磁皿で、7の口縁端部は稜花状を呈する。9は高杯などの特殊な青磁製品の脚部で、12世紀以降の製品であろう。10・11は中国産の白磁皿で、いずれも15～16世紀代の所産である。11の割口には漆継ぎの痕跡が認められる。12～14は中国産の染付で、いずれも15世紀後半から16世紀前半の製品である。12は碁笥底を呈する小皿で、見込みにはアラベスク文様が描かれている。13・14は蓮子碗タイプの碗底部である。15は朝鮮産(李朝)の白磁碗で、内底部に4箇所の胎度目積みが認められる。16世紀代に比定される。16は東海地方産(?)の陶器甕の底部で、12～13世紀に比定されるものである。外面には櫛状の工具で、波状文と直線文が描かれている。17～21は備前系の陶器播鉢、22・23は備前系陶器甕の口縁部である。17～23の備前系陶器は、いずれも15～16世紀代の所産である。24～28は土師質土器で、24～26は小皿、27・28は坏である。24は京都系土師器と通称される非ロクロ整形のもので、25～28はロクロ整形で、底部に糸切り痕が認められる。Fig. 119-29～31は瓦質土器火鉢の口縁部で、2条の突帯間にスタンプ文を有する。32も瓦質土器で、これも火鉢の脚部であろう。29～32の瓦質土器は、いずれも15～16世紀代の所産である。

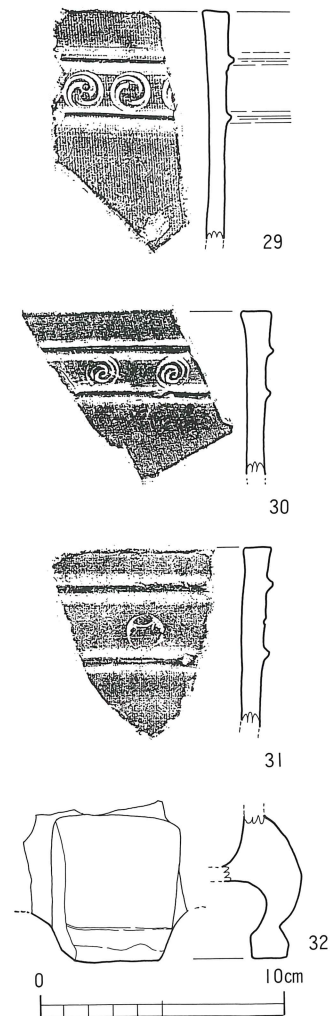


Fig. 119 SD25出土遺物② (S = 1/3)

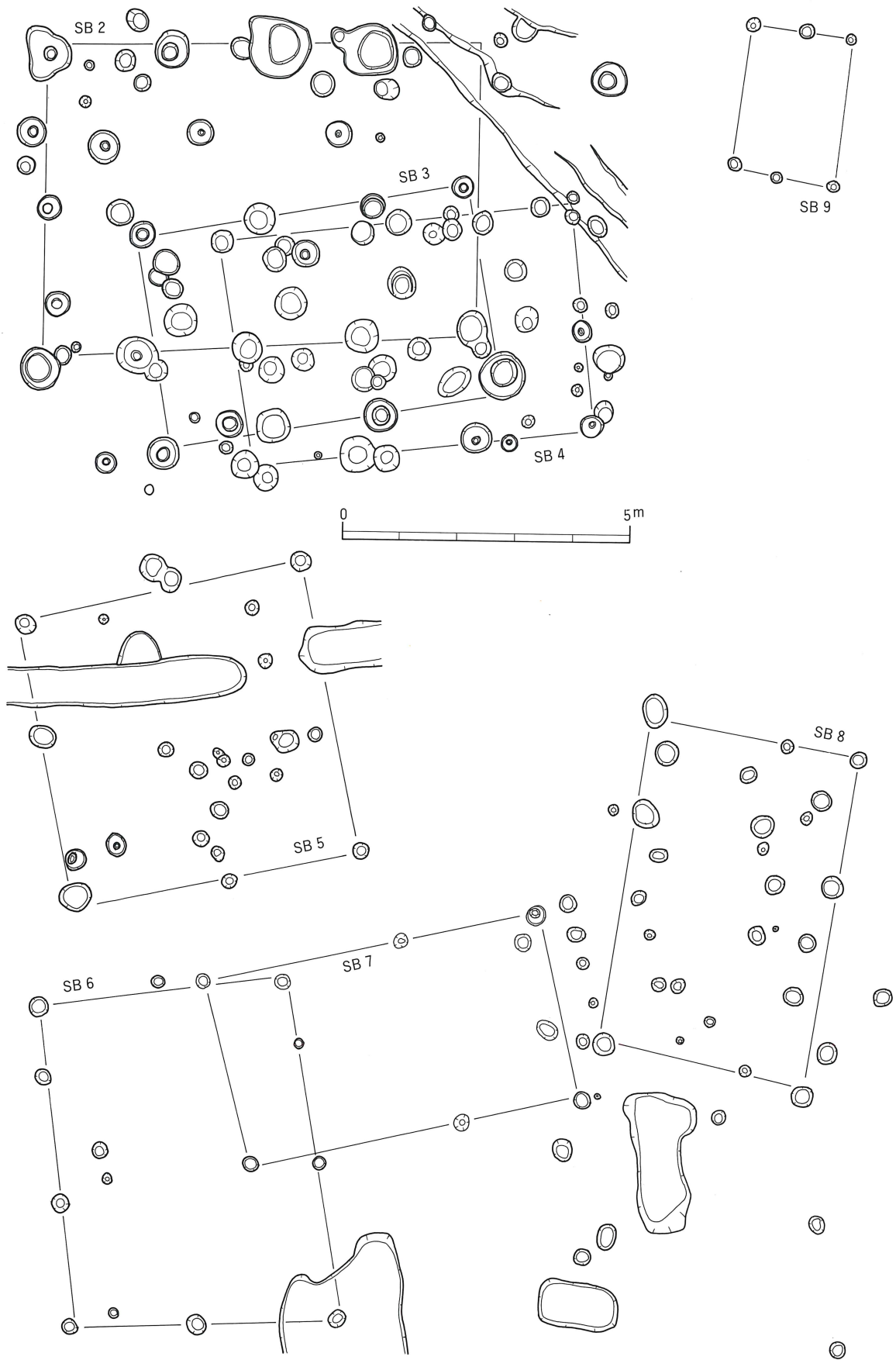


Fig. 120 中世屋敷跡敷地内の掘立柱建物 (S = 1/100)

S B 2～9 (Fig.120) 中世屋敷跡の敷地内で検出した掘立柱建物で、いずれも中世屋敷の施設と思われる。このうちS B 2～4は大型の柱穴をもち、建物面積も大きいことから、母屋的な建物と推定される。S B 2～4はS B 2→S B 3→S B 4の構築順序で切り合い関係を有することから、母屋的な建物も中世屋敷の存続期間中に、3回程度の建て替えがあったことが想定される。S B 5～9は中世屋敷内に位置する付属の建物である。以下では、今回の調査で確認された掘立柱建物の規模を列記しておきたい。

- S B 2 東西2間(5.5m)、南北4間(7.4m)、 建物面積40.7m²
- S B 3 東西2間(3.8m)、南北3間(5.8m)、 建物面積22.0m²
- S B 4 東西2間(4.0m)、南北3間(6.1m)、 建物面積24.4m²
- S B 5 東西2間(4.8m)、南北2間(5.0m)、 建物面積24.0m²
- S B 6 東西3間(5.6m)、南北2間(4.3m)、 建物面積24.0m²
- S B 7 東西1間(3.2m)、南北2間(5.8m)、 建物面積18.6m²
- S B 8 東西3間(5.6m)、南北2間(3.5m)、 建物面積19.6m²
- S B 9 東西1間(2.4m)、南北2間(1.8m)、 建物面積 4.3m²

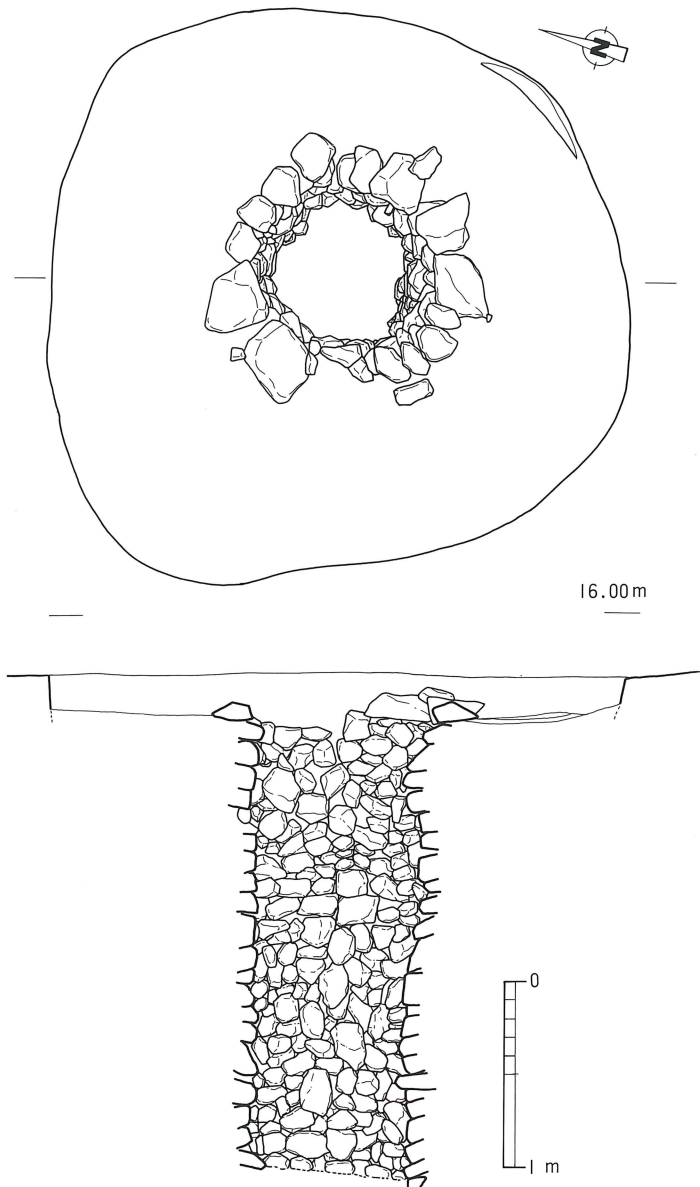


Fig. 121 SE 1 実測図 (S = 1/40)

SE 1 (Fig.121) 中世屋敷敷地の南側中央から検出された石組み円筒形の井戸である。石組みには、拳大から頭大の川原石が使用されている。井戸側内部は石組みに使用されていた石と土砂によって埋没していた。検出面から約2.7m掘り下げたが、井戸底面を検出できず、人力での掘り下げが困難となり、加えて井戸側壁面石積みが崩壊する恐れがあったため、これ以上の掘り下げを中止した。従って、底面の水溜めの構造などは不明である。ボーリングステッキ等による探索では、底面検出までにさらに1.5m以上の掘り下げを必要とする。出土遺物は、掘方埋土中より土師質土器・瓦質土器の小破片、備前焼等を検出している。また井戸側内部の埋土より、土師質土器の坏が出土した。出土遺物から判断して、井戸の構築時期は屋敷の存続時期と重なることは間違いないところであろう。

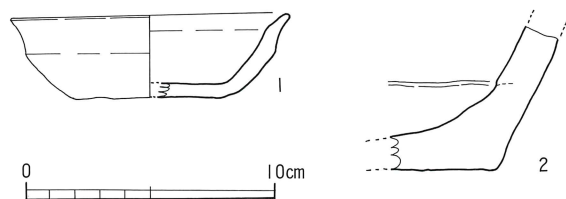


Fig. 122 SE 1 出土遺物 (S = 1/3)

出土遺物 (Fig.122) 1は土師質土器の

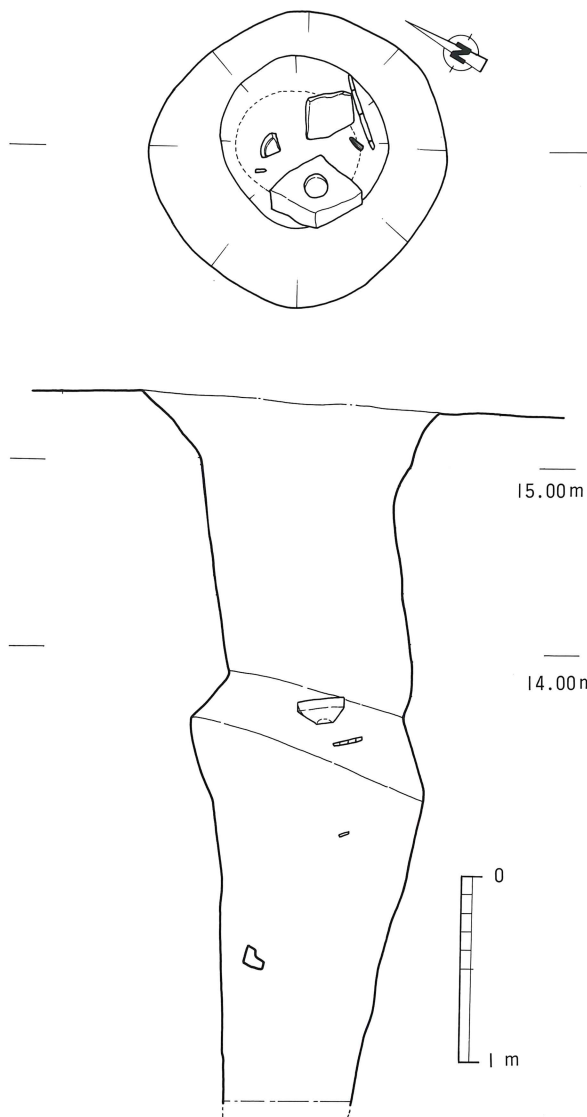


Fig. 123 SE 2 実測図 (S = 1/40)

坏で、底部に糸切り痕は認められず、非クロコ整形の手法によるものである。井戸側内部の埋土中より出土した。2は備前焼甕の底部で、掘方埋土中より出土。内面には粘土帯積み上げ痕が認められ、破損面も粘土継目に対応する。以上の出土遺物は15・16世紀代の所産であろう。

SE 2 (Fig.123) 中世屋敷敷地の東南部で検出した素掘りの井戸である。直径は約1.6mを測る。検出面から約3.7m掘り下げたが、井戸底面を検出できず、これ以上の掘り下げを断念した。、図示できていないが、埋土中より備前焼陶器小片や石塔笠部・石臼・漆器碗小片などが出土した。出土遺物の年代観から、当該井戸は屋敷跡の存続期間と重なる遺構と推定される。

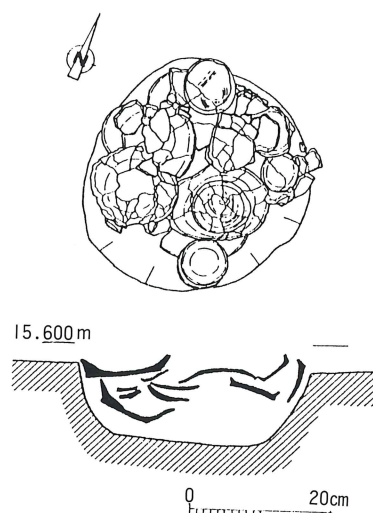


Fig. 124 SK 3 実測図 (S = 1/10)

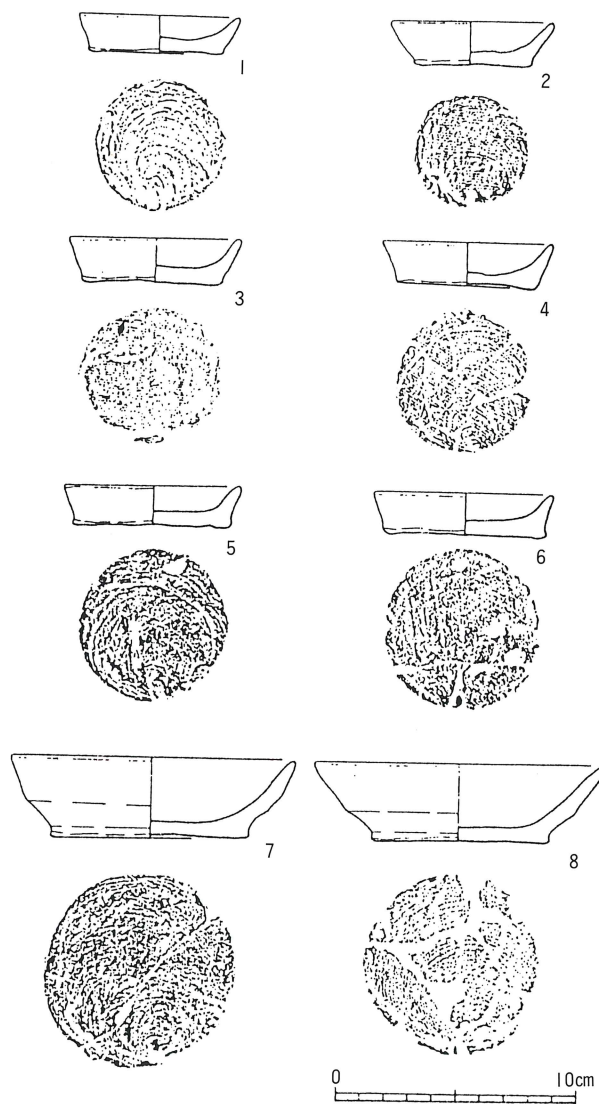


Fig. 125 SK 3 出土遺物 (S = 1/3)

S K 3 (Fig.124) 屋敷を囲む溝S D23の北辺近くのピットから、土師質土器坏7個体、小皿10個体を一括埋置した遺構を検出した。その規模は直径約30cm、深さ約10cmの小型のピットで、底面よりやや上位のレベルから、折り重なるようにして土師質土器が出土している。このピットは単独で営まれており、他に組み合う遺構がないことから、建物の柱穴としてではなく、「地鎮」などの屋敷内建物の安寧を願う呪術的な遺構である可能性が高い。

出土遺物 (Fig.125) 土師質土器の残存状況が不良であることから、一括出土した土師質土器のうち(坏7個体、小皿10個体)、坏2個体、小皿6個体のみを図示した。1～6は小皿で、口縁が直線的に立ち上がる器形となる。いずれも口径7cm前後、器高2cm前後を測る。7・8は坏で、口縁部が内湾気味に開き、底部外面付近に強いヨコナデが施されている。いずれも口径12cm前後、器高3cm前後を測る。以上の土師質土器は、15世紀後半から16世紀前半に比定される。

S K 4 (Fig.126) 中世屋敷敷地の北東部で検出した土坑である。土坑は平面形態が略円形を呈し、直径約70cm、深さ約50cmを測る。埋土中からは破碎された状態の備前焼陶器大甕と人間の臼歯1本が出土した。発掘当初は人間の臼歯が出土したことから、当該遺構を墓と判断していた。しかし、臼歯の出土は1本に留まり、その他には当該遺構を積極的に「墓」と断定する材料に乏しい。従って、正式報告である本書では、当該遺構は性格不明の土坑としておきたい。遺構の性格は不明であるが、中世屋敷内の付属施設であった可能性が高い。なお、埋土中から出土した備前焼大甕は、江戸時代以降に構築されたS D34・35に混入した破片が接合しており、近世に遺構上面がかなり削平を受けていたことが推定される。

出土遺物 (Fig.127) 図示した遺物は、備前焼陶器大甕である。S K 4から出土した大型の破片と江戸時代の溝であるS D34・35出土の小破片が接合したが、全形の2分の1以下しか接合し得なかった。図上復元では口径39.4cm、底径35.6cm、器高68.2cmとなる。備前焼Ⅲ期後半に属するもので、製作年代は14世紀代に比定される。

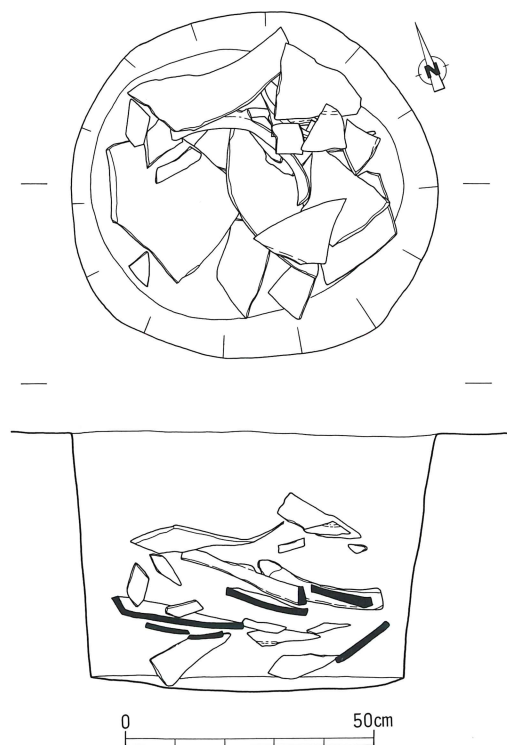


Fig. 126 SK 4 実測図 (S = 1/15)

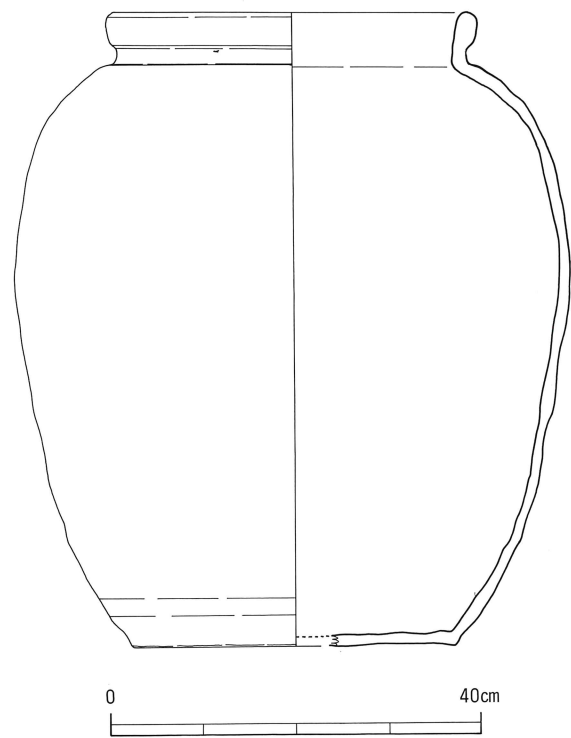


Fig. 127 SK 4 出土遺物 (S = 1/8)

SK 5 (Fig.128) 中世屋敷敷地の南西部で検出した土坑である。土坑は長径約1.05m、短径約0.7m、深さ約40cmを測る。土坑上面には拳大から頭大の大きさの石が多数配置されていた。土坑の性格は不明であるが、あるいは天水を貯める水溜めの遺構である可能性が考えられる。出土遺物より、中世屋敷跡の存続期間と重なる遺構である。

出土遺物 (Fig.129) 図示した遺物は、中国産の細連弁青磁碗である。底部の破片で、見込み部分に花文を描く。15世紀後半から16世紀前半代の所産である。

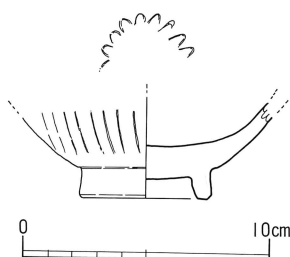


Fig. 129 SK 5 出土遺物 (S = 1/3)

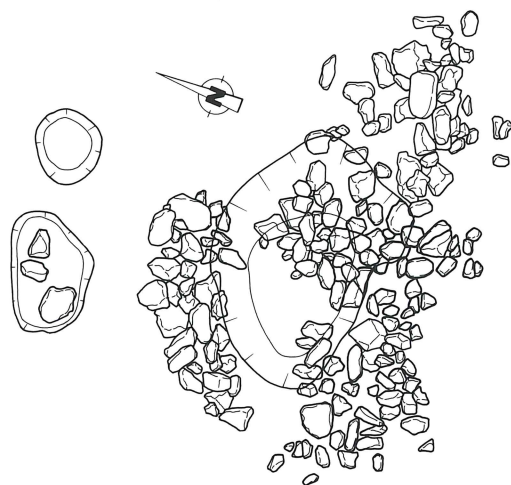


Fig. 128 SK 5 実測図 (S = 1/30)

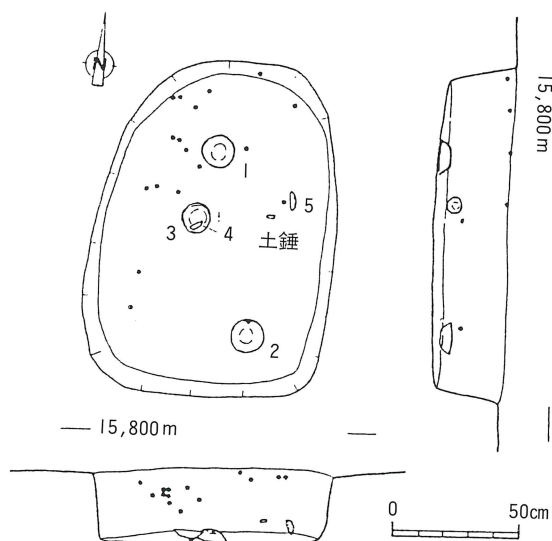
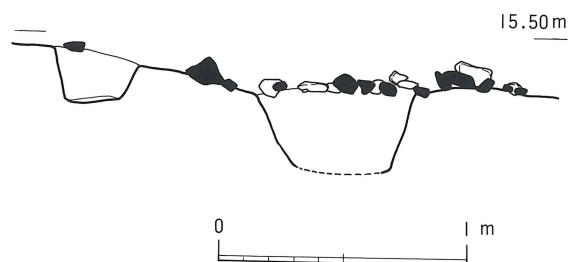


Fig. 130 ST 1 実測図 (S = 1/30)

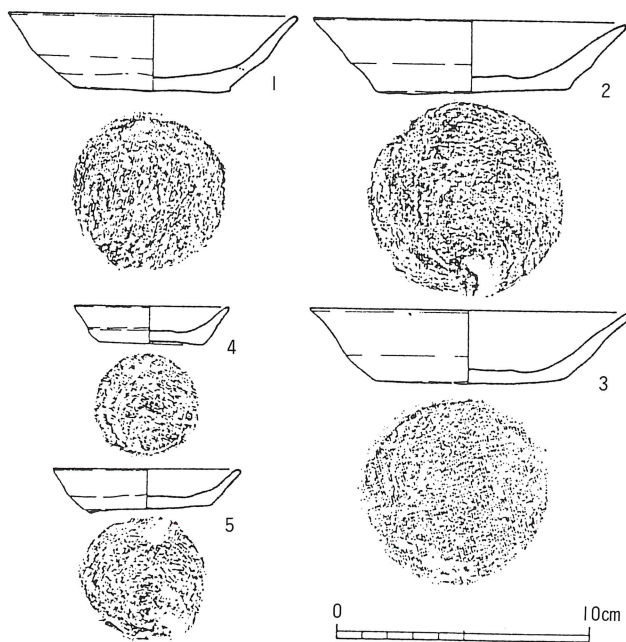


Fig. 131 ST 1 出土遺物 (S = 1/3)

ST 1 (Fig.130) 中世屋敷敷地の東側に位置し、屋敷跡を囲む溝 S D23の東辺に隣接する木棺墓である。

墓坑は長軸約1.3m、短軸約1m、深さ約30cmを測る。埋土中より多数の鉄釘が出土しており、主体部は木棺が想定される。出土遺物は墓坑床面近くより土師質土器5点、床面よりやや浮いて土錘が出土している。土師質土器は遺体とともに、木棺底面付近に安置されていたと思われる。Fig.131-5の土師質土器小皿はその出土状況と位置から、木棺東側の側板に立て掛けられていた可能性が高い。また、同3の土師質土器杯の内面には、検出時にスガがべつりと付着していた。土錘も木棺内側に相当する位置から出土しており、副葬品と考え

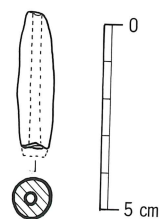


Fig. 132 ST 1 出土土錘 (S = 1/2)

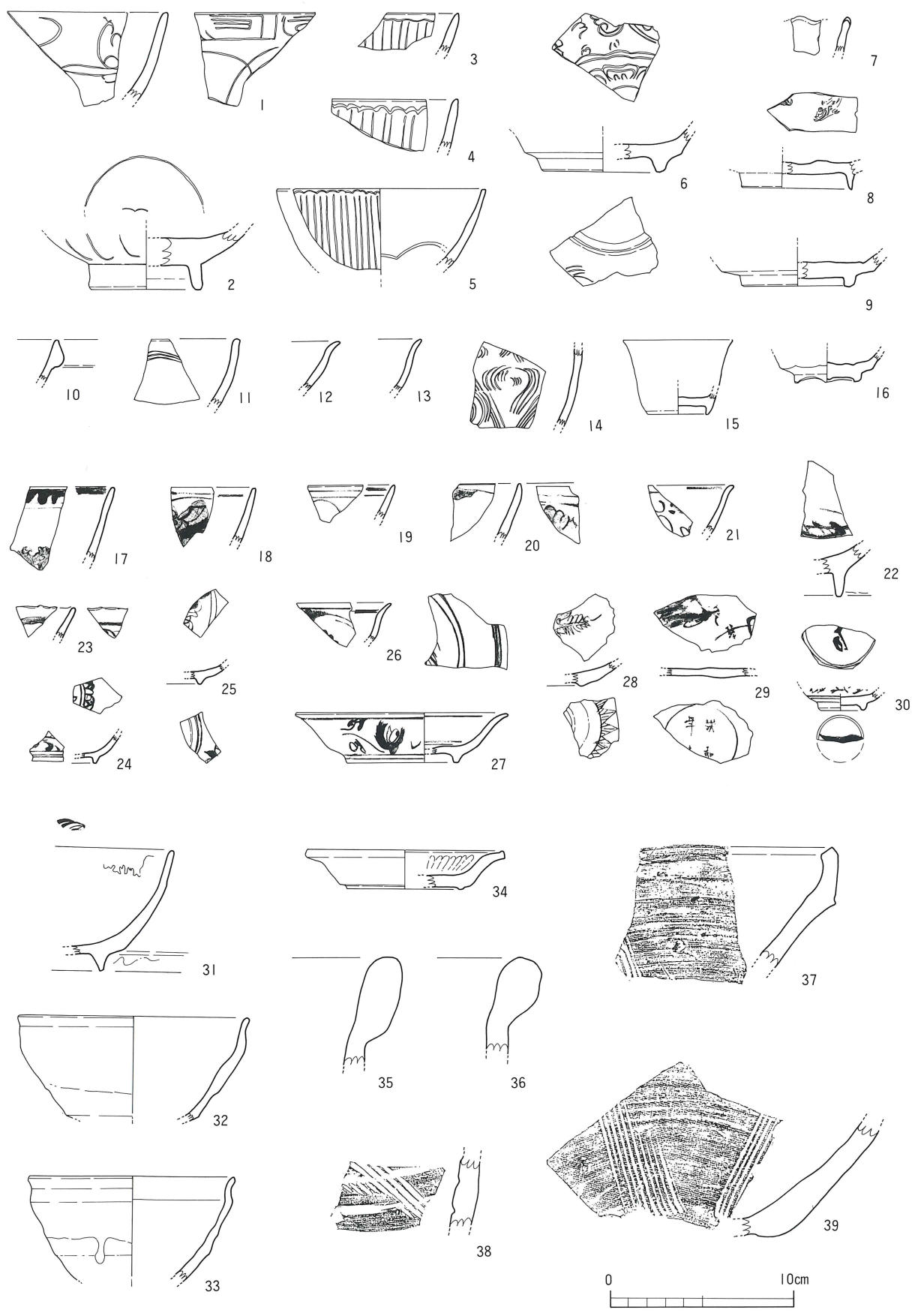


Fig. 133 SX 2 出土遺物① (S = 1/3)

られる。また、墓坑埋土中より多数の鉄釘が検出されており、このうち18点を原位置で記録することができた。これらの平面分布と垂直分布より、木棺は長さ約110cm、幅約65cm、高さ約30cm前後に復元できよう。これらは出土遺物の年代観と出土地点から、中世屋敷に関連する屋敷墓と思われる。

出土遺物 (Fig.131・132) Fig.131—1～3は土師質土器坏で、口径12～13cm前後、器高3cm前後を測る。4・5は小皿で、口径6～7.5cm前後、器高1.5cm前後を測る。底部にはいずれも糸切り痕を有する。15世紀後半から16世紀前半の所産である。Fig.132は土錘である。一端を部分的に破損している。

S X 2 中世屋敷跡の南西側に構築された畝状の遺構である（当該遺構の位置はFig.117を参照）。幅約0.8～2.8m、深さ約30cmを測り、平面がU字状を描くように、長さ約50mが構築されている。中世屋敷跡に関連する遺構との切り合い関係から、当該遺構は中世屋敷の廃絶後に造営されたことは明らかである。埋土中には16世紀後半代の遺物が含まれており、これによって中世屋敷が当該時期には廃絶していた証拠となる。

出土遺物 (Fig.133・134) Fig.133—1～9は中国産の青磁碗である。1・2は雷文帯青磁碗で、14世紀後半から15世紀前半代の製品である。3～5は細連弁文青磁碗で、これらは15世紀後半から16世紀前半代の製品である。6も青磁碗で内外面に片彫り文様を有するもの。7は口縁部が輪花を呈する青磁碗である。8は見込み部分に魚文を浮き彫りにする龍泉窯系の青磁碗底部である。12世紀代の所産である。9も青磁碗の底部で、内底部は露胎となる。14世紀代頃の製品であろう。10～16は中国産の白磁である。10は玉縁状の口縁部を有する白磁碗で、11～12世紀前後に比定される。11は口縁端部に櫛描き文様を有する。15世紀前後の製品である。12・13は口縁部が端反になる白磁皿で、15～16世紀代に比定される。14は外面に櫛描き文様を有する胴部の破片である。15は景德鎮窯系の白磁小杯底部で、16世紀代の製品である。16も白磁小杯の底部で、16世紀代に比定される。17～30は中国産の染付である。17～20は染付碗の口縁部、23は輪花を呈する口縁部である。21・22・24～27は染付皿の破片である。28は碁笥底を呈する染付皿で、15世紀後半から16世紀前半代の製品である。29は内底部に「洪武年造」銘を有する染付皿底部で、16世紀中頃から後半代の製品である。30は染付小杯の底部で、内底部には墨書が認められる。31は産地不明の陶器碗で、内外面には鉄釉を施し、内底部には染付による文様を有する。外底部は露胎となる。32・33は瀬戸美濃産陶器の天目碗で、16世紀後半代の所産である。いずれも内外面に鉄釉を施す。34は瀬戸美濃産陶器折縁ソギ皿で、16世紀末前後の製品である。35～39は備前系陶器で、35・36は大甕の口縁部、37～39は播鉢である。いずれも15～16世紀代に比定される。Fig.134—40～42はスタンプ文を有する瓦質土器で、このうち40は器種不明であるが、41～42は火鉢である。その形態から41は16世紀代、42は16世紀末から17世紀前半代に比定できる。43～45は土師質土器である。43は京都系土師器と呼称される非ロクロ整形によるもの、44・45はロクロ整形によるもので、底部には回転糸切り痕が認められる。

S E 3 (Fig.135) 中世屋敷跡のほぼ中央で検出した素掘りの井戸である。直径は約1.9mを測る。検出面から約2.5m掘り下げたところで、竹で編んだザルを発見した。当該井戸も底面までの掘り下げを行っていない。竹ザル以外の出土遺物は図示していないが、中国産の口髷白磁皿片や瓦質土器小片を認めており、遺構の年代は中世屋敷跡の存続期間に先行する14世紀代以降に比定される可能性が高い。

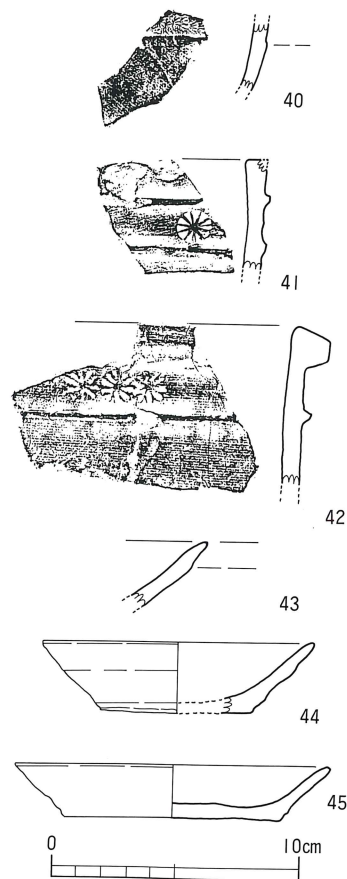


Fig. 134 SX 2 出土遺物②
(S = 1/3)

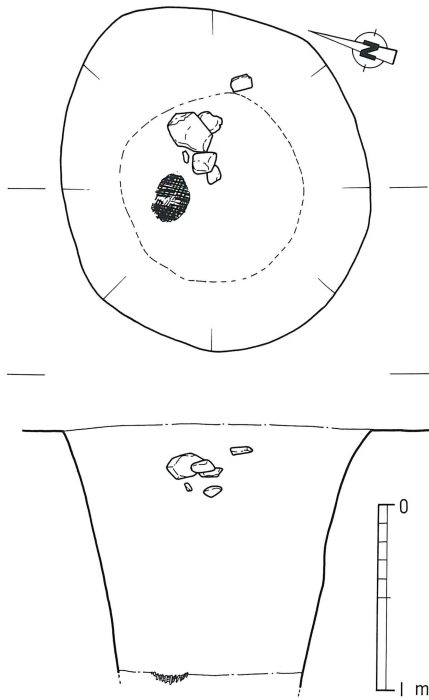


Fig. 135 SE 3 実測図 (S = 1/30)

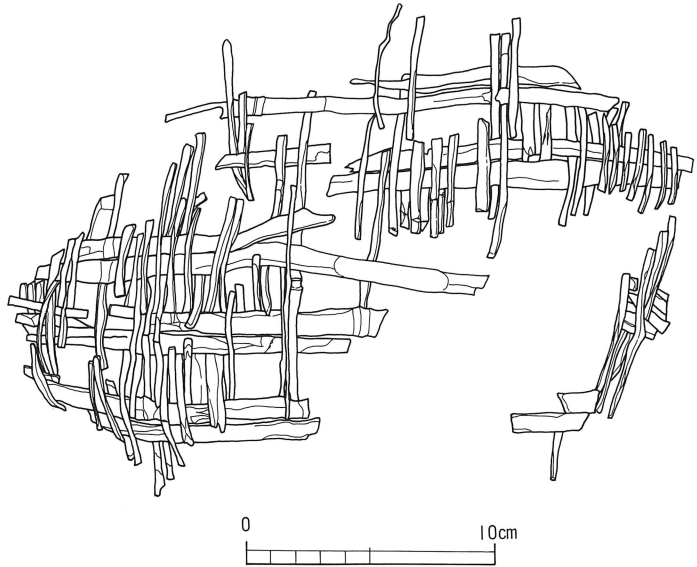


Fig. 136 SE 3 出土遺物 (S = 1/3)

出土遺物 (Fig. 136) 図示した遺物は竹ザルである。保存状況は良好とはいえないが、検出時は長軸27cm短軸16.5cm、深さ約5cmを測る。当該遺物は取り上げに失敗し、破損してしまった。

ST 2 (Fig. 137) 掘立柱建物であるSB 2～SB 4と切り合い関係を有する墓である。墓坑は長軸1.15m、短軸0.65m、深さ35cmを測る。上面には凝灰岩の岩石や板石が置かれ、蓋石の役割を果たしている。板石上面にはノミ痕が認められた。墓坑底面北側からは人間の歯がまとまって出土しており、これにより当該遺構を墓と判断した。埋葬人骨の頭位は北と思われる。埋土中には土器小片が混入していたが、詳細な時期を判定できない。従って遺構の年代は不明であるが、中世屋敷跡のSB 2～SB 4の構築年代より遡ることは確実である。

SB 10 (Fig. 138) 90年度調査区 (E区) で検出した総柱の掘立柱建物跡である。調査区の制限により、南東隅の柱穴が未検出となっているが、東西3間 (約4.7m)、南北2間 (約3.6m) で、建物面積は約16.9m²を測る。出土遺物は認められないが、中世の遺構と推定される。

SB 11 (Fig. 138) 88年度調査区 (A区) で検出した総柱の掘立柱建物跡である。周辺の削平により、南東隅の柱穴が未検出となっているが、東西2間 (約3.6m)、南北2間 (約3.7m) で、建物面積は約48.0m²を測る。出土遺物は認められないが、近世以降の溝に切られており、遺構の構築年代は中世である。

SB 12・13 (Fig. 138) とともに88年度調査区 (A区) で検出した掘立柱建物跡である。両者は重複した地点に位置しているが、構築順序を確認できていない。SB 12は北東隅の柱穴が未検出となっているが、東西2間 (約

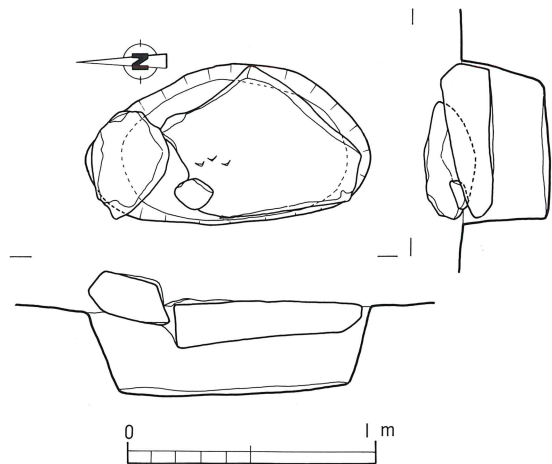


Fig. 137 ST 2 実測図 (S = 1/30)

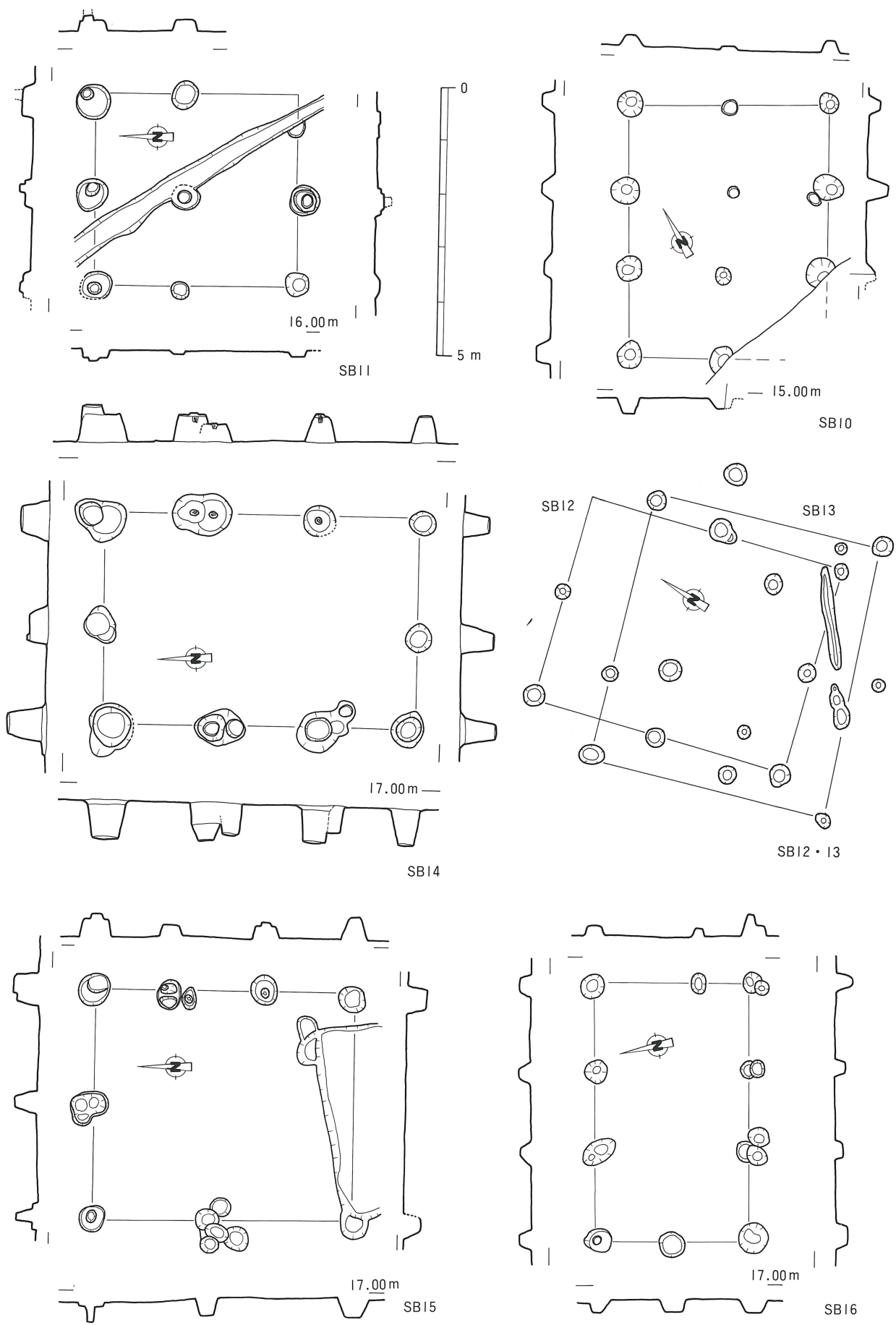


Fig. 138 SB10~16実測図 (S = 1/100)

3.8m)、南北2間(約4.6m)で、建物面積は約17.5m²を測る。S B13は東西2間(約5.0m)、南北1間(約4.2m)で、建物面積は約21.0m²を測る。掘立柱建物跡の近くには小型の石組み井戸S E 4が位置しており、以上の遺構の間になんらかの関連性があったことも想定される。S B12・13の構築時期は不明であるが、中世の所産であろう。

S B14~16 (Fig.138) 91年度調査区(L区)で検出した3棟の掘立柱建物跡である。これらの建物跡の周囲には、中世末から近世初頭に比定される井戸S E 6および中世の土坑S K 7が存在しており、これらの遺構間になんらかの関連があったことを想定することも可能である。S B14は東西2間(約3.8m)、南北3間(約5.7m)で、建物面積は約21.7m²を測る。柱穴が重複している部分が認められ、建て替えがあったことが判断される。S B15は東西2間(約4.2m)、南北3間(約4.8m)で、建物面積は約20.2m²を測る。S B16は東西3間(約4.7m)、南北2間(約2.9m)で、建物面積は約13.6m²を測る。柱穴内からの出土遺物はないが、いずれも構築時期は中世に比定されよう。

S P 1 (Fig.139) 90年度調査区(F区)で検出した柱穴である(遺構の位置については、41頁のFig.33も参照されたい)。掘方は円形で、直径約55cm、検出面からの深さ約10cmを測る。掘方中央よりやや東側に径3cm、長さ8cm程度の柱根がわずかに残存していた。この柱根の遺存状態は良好なものでなく、本来の柱の太さは柱痕跡の直径から、径20cm程度のものであったと思われる。また、掘方南壁付近の底面より、口縁部の一部を欠損した土師器小皿1枚が出土した。検出された柱穴はこの1基のみで、対応する他の柱穴を確認できていない。ただ、検出された柱穴が確実に柱根を有するのにもかかわらず、その深さが約10cmと浅いことから、近世以降にこの周辺が大きく削平されたことが予測できる。出土遺物の年代観から、中世の15世紀後半から16世紀前半代には、この柱穴を利用した掘立柱建物が存在したと推定される。

出土遺物 (Fig.140) 図示した遺物は、土師質土器小皿である。口縁部がやや外反気味に開く器形を呈する。口径7.2cm、器高1.5cmを測り、底部には回転糸切りの痕跡がわずかに残るが、ナデによりほぼ消失している。口縁部外面にはススが付着する部分が認められる。15世紀後半から16世紀前半前後の所産である。

S E 4 (Fig.141) 88年度調査区(A区)で検出した石組み円筒形の井戸である。井戸の掘方の直径約1.6m、井戸側内径約0.7mを測る。検出面より約1m掘り下げた付近で、井戸側側面の石積みが消滅したため、このあたりが底面であると判断した。周囲にS B12・13とした掘立柱建物跡が位置しており、これらの遺構の間になんらかの関連があったことが想定される。出土遺物は認められないが、中世の時間幅の中で構築された遺構であろう。

S E 5 (Fig.142) 88年度調査区(A区)南側で検出した素掘りの井戸である。掘方の平面形態は円形で、直径約2.3mを測る。検出面より約1.5m掘り下げた付近で、これ以上の掘り下げを断念した。従って、

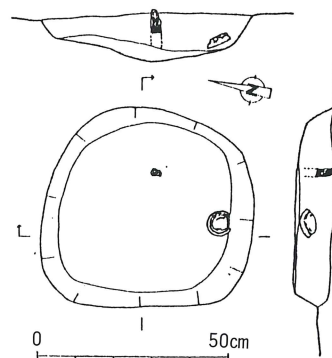


Fig. 139 SP 1 実測図
(S = 1/20)

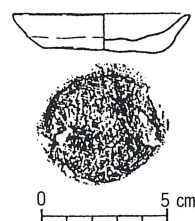


Fig. 140 SP 1
出土遺物
(S = 1/3)

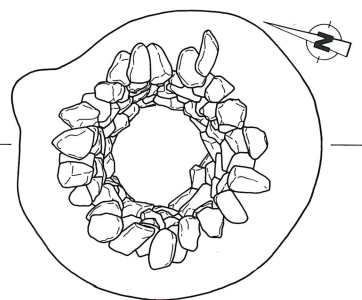


Fig. 141 SE 4 実測図
(S = 1/40)

底面の水溜めの構造などは不明である。出土遺物としては、埋土中より曲物などの木製品がまとめて出土したほか、陶磁器片や土師質土器の破片がある。16世紀後半代に比定される遺構である。

出土遺物 (Fig.142) 1は中国産の染付皿の口縁部である。外面には芭蕉文の一部がみられ、碁笥底を呈する染付皿に復元される可能性が高い。釉は淡黄褐色を呈し、胎土もそれほど硬質である印象を受けない。当該資料は近年着目されている「漳州窯系」の категорияに属する製品であろう。16世紀後半代に比定される。2はロクロ整形の土師質土器小皿、3は非ロクロ整形の土師質土器(いわゆる「京都系土師器」)小皿である。4は用途不明の木材加工品、5・7は曲物側板、6は曲物底板である。7には使用された木釘が残存していた。なお、4～7は樹種同定を能城修一氏が行っており、4の木材加工品にはツバキ属が、5～7の曲物には木釘も含めてスギ材が使用されていた(127～128頁参照)。

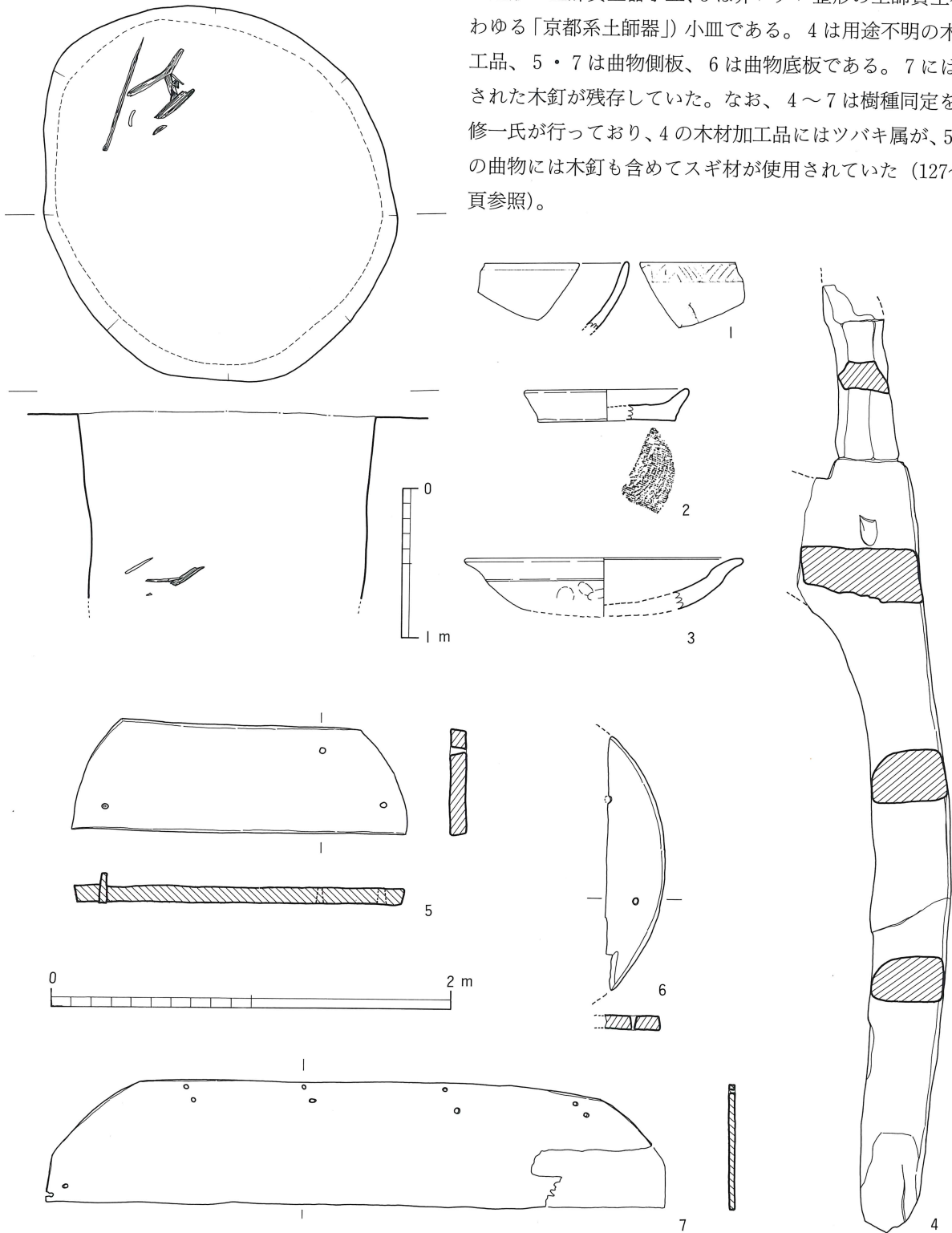


Fig. 142 SE 5 と出土遺物 (遺構は S = 1 / 40、出土遺物は S = 1 / 3)

SK 6 (Fig.143) 91年度調査区 (F区) で検出した土坑である。土坑上面には瓦質土器火鉢を破碎した破片が敷き詰められ、さらにその周囲には拳大の川原石が円形に配置されていた。瓦質土器の破片と川原石は、後者が前者の上位に位置する部分が認められ、瓦質土器破片→川原石の順序で配置されたと判断される。土坑の規模は直径約70cm、深さ約15cmを測る。土坑の埋土中や底面から、遺物の出土は認められなかった。遺構の性格は不明であるが、あるいは祭祀的な行為に関わるものかもしれない。出土遺物の年代観より、16世紀代に比定される。

出土遺物 (Fig.144) 図示した遺物は瓦質土器火鉢である。口縁部の大型破片で同一個体であるが、接合しない。図示した口縁部の他に、やはり同一個体と思われる胴部の破片が出土している。口縁部には2条の突帯を有し、その間にスタンプ文を押圧する。16世紀代に比定される遺物である。

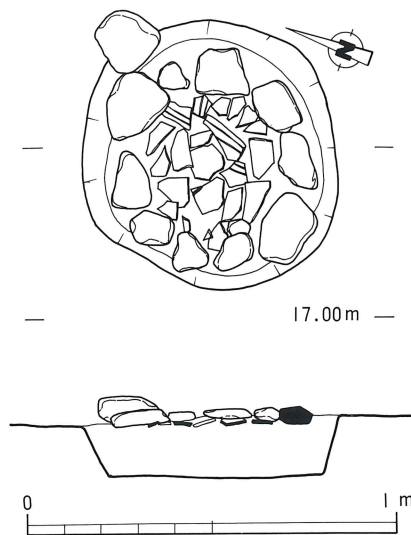


Fig. 143 SK 6 実測図 (S = 1/30)

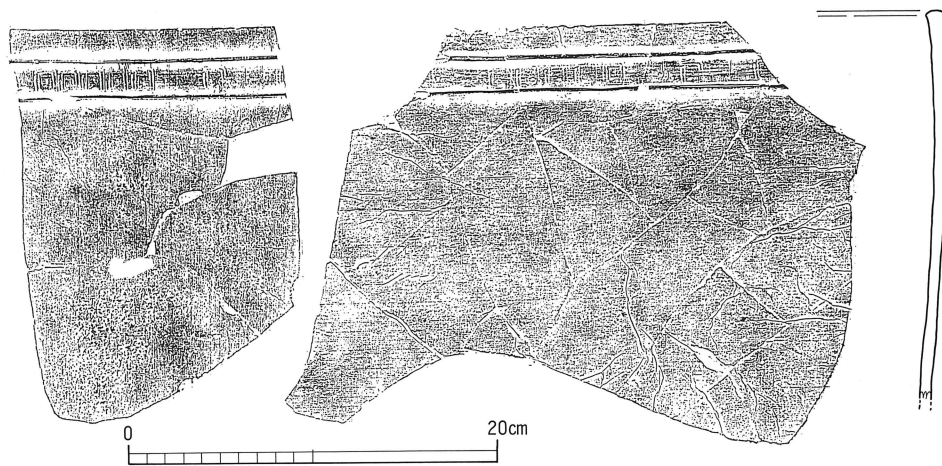


Fig. 144 SK 6 出土遺物 (S = 1/4)

SK 7 (Fig.145) 90年度調査区 (F区) で検出した土坑である。掘方は不整形を呈し、直径60cm前後、検出面からの深さ10cm前後を測る。遺構の残存状況は良好でなく、上面を大きく削平されている。土坑内部からは備前焼大甕の破片が出土し、底部近くには僅かであるが炭化物も認められた。また、土坑埋土中より、一端を欠損した土錘も出土している。土坑掘方北西側には「サシ」の状態にした銅銭15枚が認められ、さらにその北側には川原石2個を配置している。出土遺物より、当該遺構は15~16世紀代に比定される。

出土遺物 (Fig.146) 1~15は銅銭である。銅銭15枚はいわゆる「サシ」の状態出土したもので、初鑄年代1408年の永楽通寶、同じく1423年の朝鮮通寶を多く含む。15枚それぞれの銭種と初鑄年代は、図示した通りである。16は一端を欠損する土錘である。17は備前焼陶器大甕である。胴部と底部

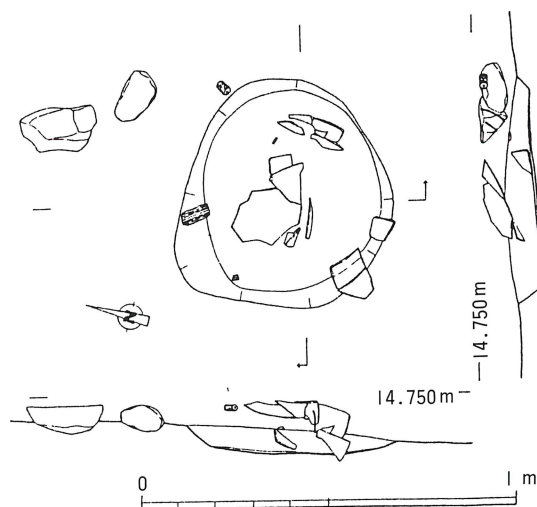


Fig. 145 SK 7 実測図 (S = 1/20)

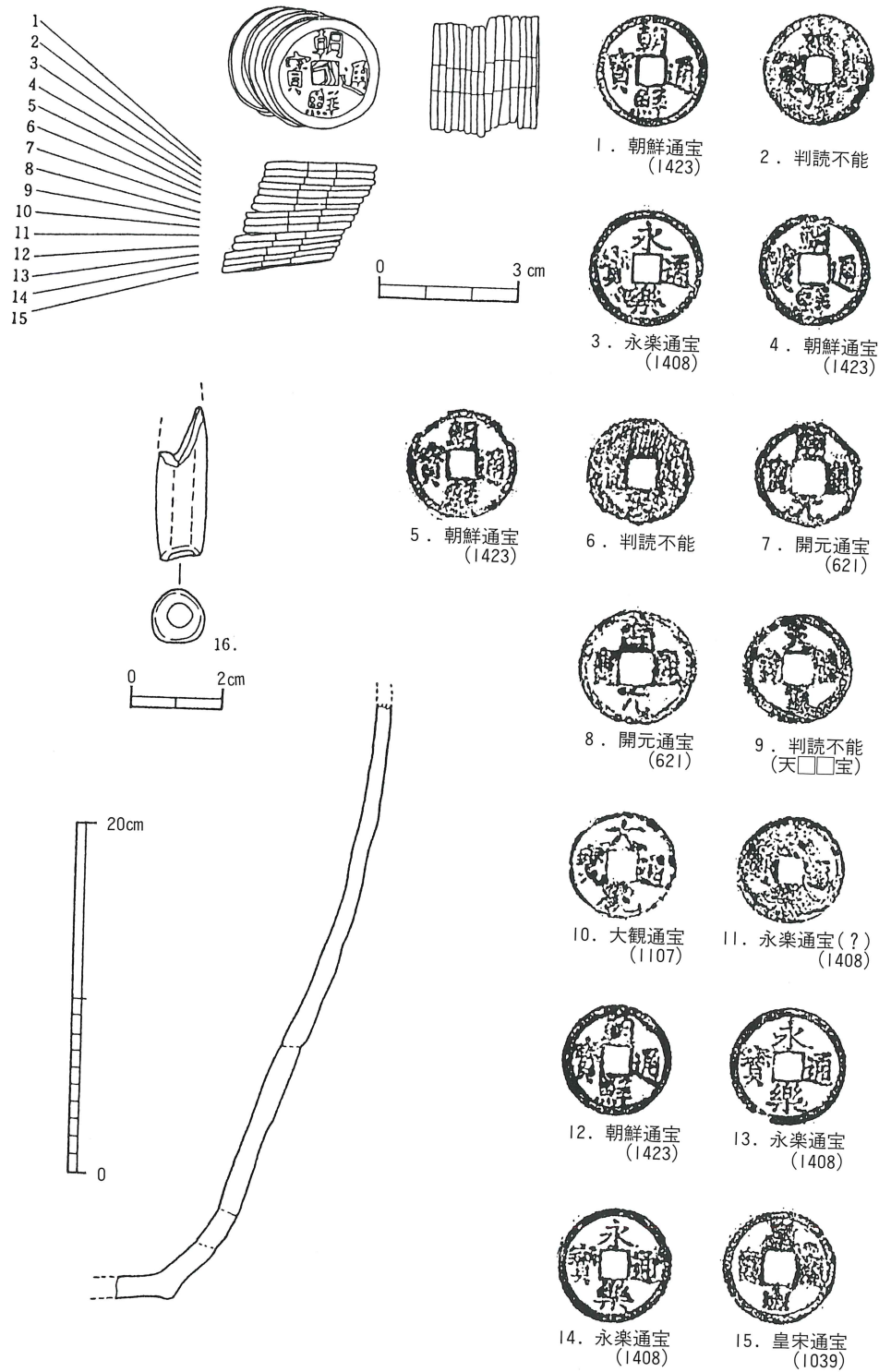


Fig. 146 SK 7 出土遺物
 (1~15. 銅銭 S = 2/3 16. 土錘 S = 2/3 17. 備前焼大甕 S = 1/4)

の一部を残存するのみで、底部径等を復元できていない。時期決定に有効な口縁部を欠損するため、詳細な時期比定は不可能である。

小結 中世の遺構の中で特に注目されるものは、中世屋敷跡である。植田市遺跡の中世屋敷跡の意義や性格については、すでに飯沼賢司氏や小柳和宏氏が開発史的な視点から触れられているため、そちらに譲り、ここでは考古学的な略脈の中で確認できることのみを記しておきたい。

中世屋敷の存続期間は、出土遺物から判断して15世紀後半から16世紀前半代を主体とする。中世屋敷の廃絶後に形成された遺構であるSX2からは16世紀後半代に属する遺物を出土しており、屋敷跡の廃絶年代を示唆するものである。特にFig.133-29の中国産染付皿（16世紀中頃～後半）、34の瀬戸美濃産陶器折縁ソギ皿（16世紀末）、Fig.134-42の瓦質土器火鉢（16世紀末～17世紀前半）はかなりシビアに製作年代を特定できるもので、遺構の年代決定の指標となる遺物である。

また、88年度調査区（A区）でも中世の柱穴群多数が検出されている。個々の検討を行いえなかったが、これらの柱穴群と屋敷跡の造営年代は重複している可能性が高い。というのは、屋敷跡を囲む溝（SD25）に混入していた12～13世紀代の鎬連弁青磁碗の破片と88年度調査区

（A区）に位置する古墳時代の溝SD14の上面で検出した破片が約110m離れて接合した（Fig.147）。このことは、中世屋敷跡と88年度調査区（A区）の柱穴群が同時存在している傍証になると考える。これが事実だとすると、屋敷跡と柱穴群の間には約30mの空閑地が存在し、当該地点が園地や耕作に関連する場所であった可能性も指摘できる。

さらに、90年度調査区（F区）でも柱穴や土坑が検出されており、屋敷跡の東側でも時期的に併行する遺構が確認されている。

以上より、中世後半段階の植田市遺跡では、溝に囲まれた屋敷跡が存在しており、その西側には溝をもたない建物群が存在したという景観を復元できる。また、屋敷跡の東側にも同時期の施設が存在していた。そして、溝で囲まれた屋敷跡に居住する人々と溝をもたない建物に住む人々との間には、当然社会的な階層差を認めることができよう。このように、屋敷の区画施設外にまとまった建物群がみられる例には、山口県下右田遺跡や高知県田村遺跡などにも認められ、当該時期の集落景観のひとつとして注目に値しよう。

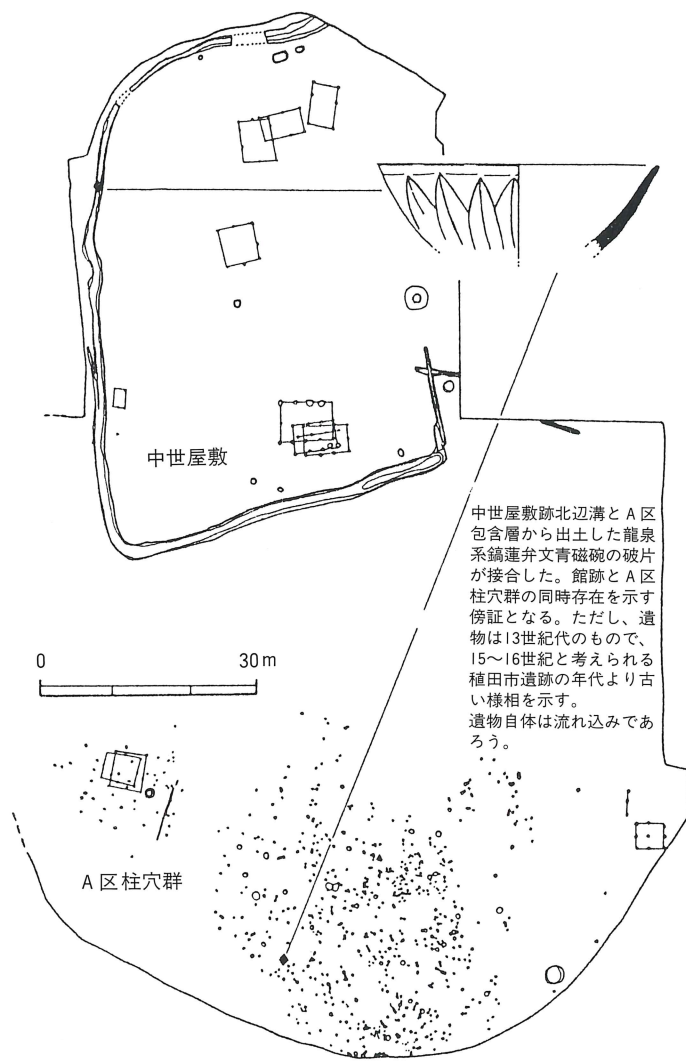


Fig. 147 中世屋敷跡と柱穴群

(7) 近世以降の遺構・遺物

近世以降の遺構として、以下のものを取り上げた
(Fig.148)。

- S D 26～35 近世に構築された溝
- S E 6・7 近世に構築された井戸。S E 6は近世初頭、S E 7は近世後期に比定される。
- S X 3～5 S X 3は近世初頭に構築された集石遺構、S X 4は近世後期の竪穴状遺構、S X 5は近代の竪穴状遺構。

近世の溝については出土遺物を主体に報告する。

S D 26 88年度調査区(A区)で検出した素掘りの溝である。残存状況は不良であるが、幅約50cm、長さ約11m、深さ約10cmを測る。出土遺物には江戸時代前期のものも出土しているが、最も新しいものは18世紀前半代の遺物である。

出土遺物 (Fig.149) 1は肥前唐津系陶器皿で、いわゆる「絵唐津」と呼称されるものである。内面には鉄絵による文様と砂目が認められる。1600～1630年代の製品である。2は肥前唐津系(内山野窯系)陶器皿で、内面には銅緑釉が施されている。17世紀末～18世紀前半の製品である。3は肥前磁器白磁皿で、見込みには型押しによる雷文が認められる。1630～1650年代に比定される。4は肥前磁器染付皿で、見込みは蛇ノ目釉剥ぎとなる。内面に染付文様の一部が認められる。粗製の皿で、おそらく波佐見窯系のものであろう。18世紀前半代の製品である。5は肥前磁器染付小杯である。外面にコンニャク印判による文様が施されているが、つぶれにより文様の詳細が読み取れない。1690～1740年代に比定される。6は肥前磁器染付仏飯器で、18世紀代の製品である。7は肥前唐津系陶器香炉で18世紀前半代、8は肥前磁器香炉で18世紀代に比定される。

S D 27・28 いずれも87年度調査区(B区)で検出した石組みの溝で、切り合い関係を有するものである。出土遺物と切り合いにより、S D 25→S D 26の順で構築されたことがわかる。S D 25は残存状況は不良で、幅約1.6m、深さ約50cm、長さ約4mを検出した。石組みは掘方壁面に沿って2段以上が組ま

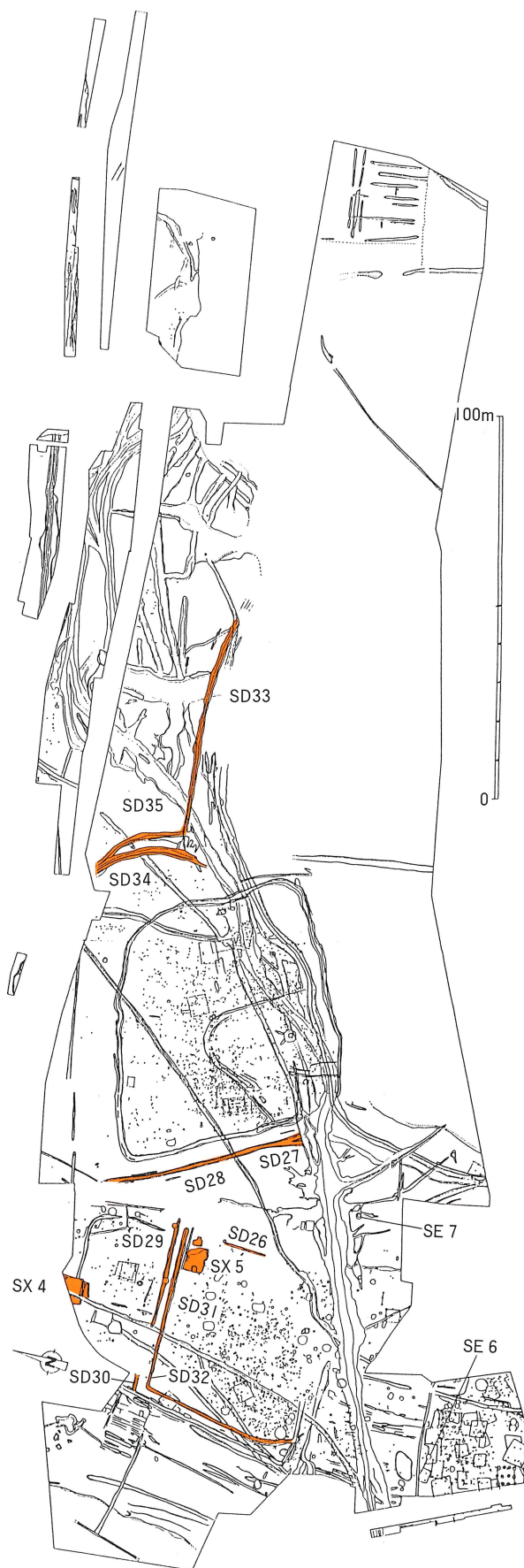


Fig. 148 近世以降の遺構

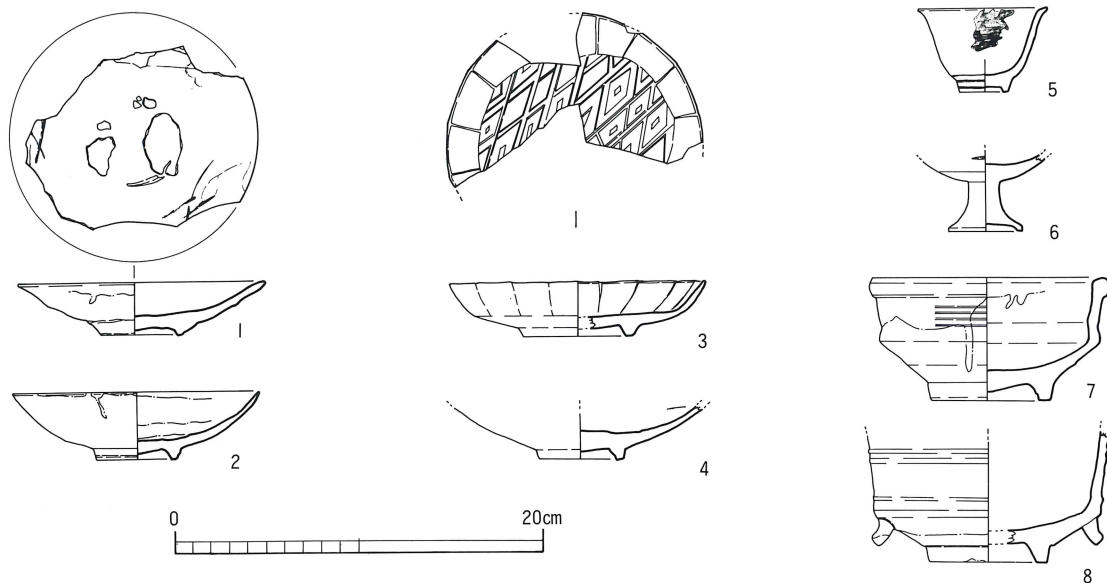


Fig. 149 SD26出土遺物 (S = ¼)

れていた可能性が高いが、S D26に切られているため、詳細は不明である。S D26は幅約1.6m、深さ約50cm、長さ約54mを測る。掘方は2段掘りで、石組みは下段壁面に沿って頭大の石を4～5段積み重ねた構造となっており、部位によっては裏込めが認められる。出土遺物から、S D25の構築年代は17世紀代に遡る可能性がある。また、S D26はおそらく18世紀代以前に構築され、幕末前後まで機能し続けたと推定される。

出土遺物 (Fig.150～152) Fig.150・151はS D25の出土遺物である。Fig.150-1・2は肥前唐津系陶器皿である。1は外面に灰釉を施し、見込みには胎土目が認められる。1590～1610年代の製品である。2は外面に土灰釉を施し、見込みには砂目が認められる。1600～1630年代の製品である。3・4は硯、5は砥石である。4は陸部が使用によって窪んでおり、その部位を利用して、意図的と思われる穿孔がなされている。6・7は土錘である。Fig.151は北宋銭の元豊通寶で、初鑄年代は1078年である。Fig.152はS D26の出土遺物である。1～3は肥前磁器染付碗で、いずれも18世紀後半代の製品である。2の見込みは蛇ノ目釉剥ぎとなり、3の見込みにはコンニャク印判による五弁花文が認められる。4～6は肥前磁器染付碗で、18世紀後半から19世紀前半代に比定される。7は肥前磁器染付小杯で、これも18世紀後半から19世紀前半代の製品である。8は磁器染付碗で、内底部に「岐252」の記号が型押しされている。戦時統制中に岐阜県内で生産されたもので、1940年代に比定される。当該遺物は混入である可能性が高い。9は肥前唐津系陶器香炉あるいは灰落しで、外面に刷毛目文様が施され、

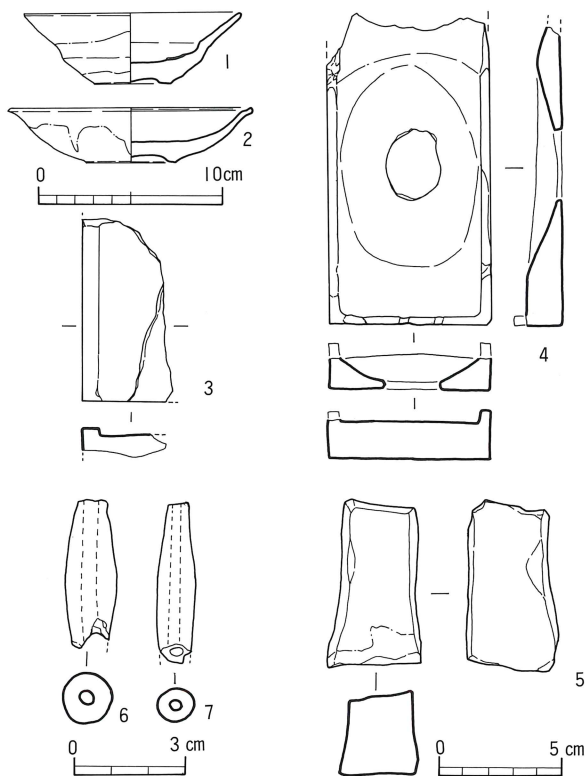


Fig. 150 SD27出土遺物

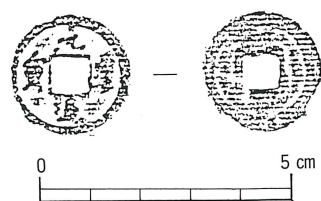


Fig. 151 SD27出土銅銭

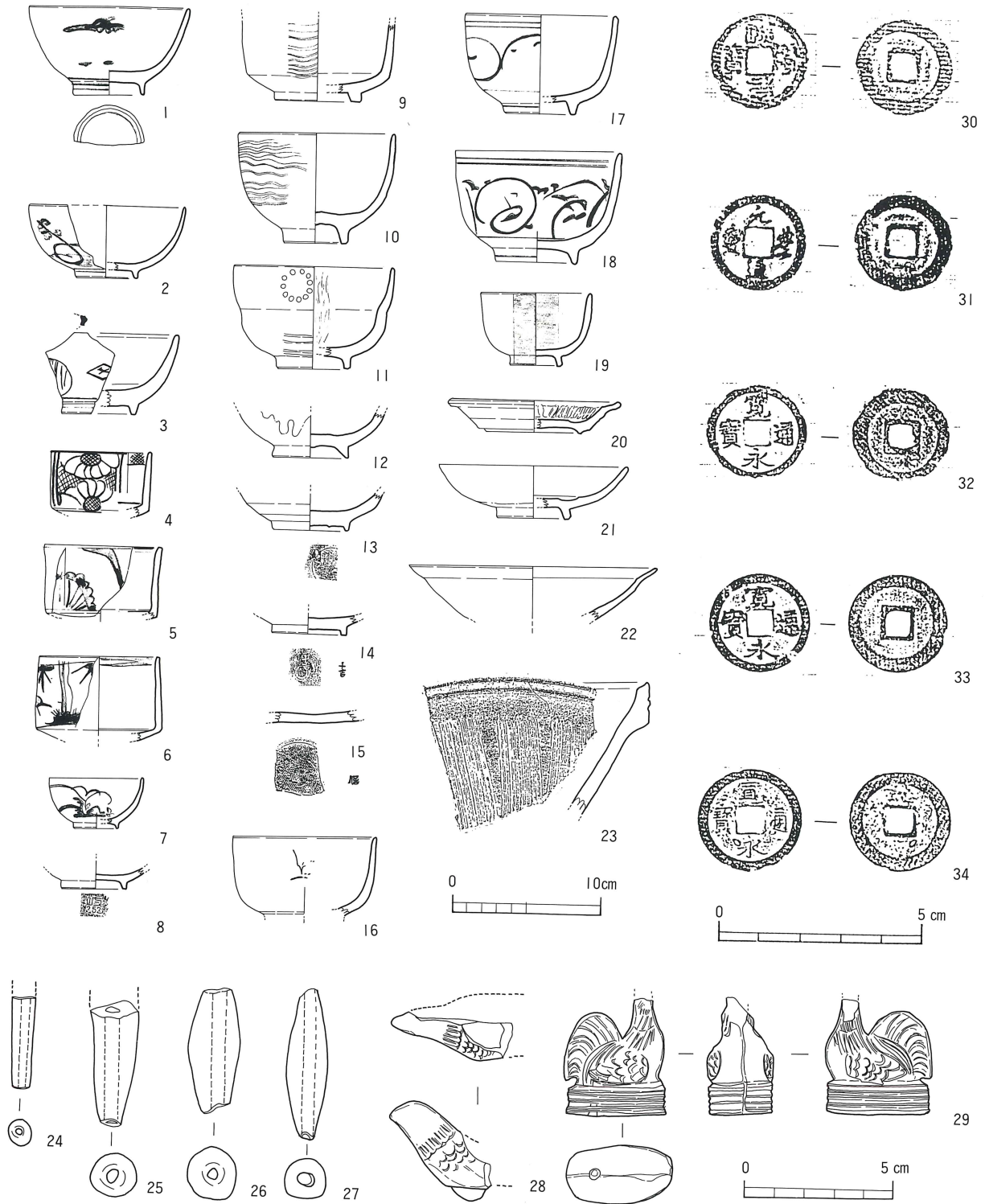


Fig. 152 SD28出土遺物 (1~23はS = ¼, 24~27はS = ½, 30~34はS = ⅔)

内面は露胎となる。17世紀末から18世紀前半代の製品である。10・11も肥前唐津系陶器碗で、10は刷毛目碗、11は外面の文様から「螢手」と呼ばれるものである。17世紀末から18世紀前半代に比定される。12~16は肥前京焼風陶器碗である。12は外面に銅緑釉を施す。13~15は内底部に刻印を有するもので、13は「清水」、14は「千吉」であるが、15は判読できない。12・16は17世紀後半から18世紀前半代、13~15は17世紀後半代に比定される。17・18は肥前陶胎染付碗で、18世紀前半代に比定される。19は福岡産陶器碗で、外面に鉄釉が施されている。18世紀

後半以降の製品である。20は瀬戸美濃産陶器の折縁ソギ皿で、16世紀末前後に比定される。当該遺物は他の遺物に比して、製作年代が古く、混入品であろう。21・22は肥前唐津系（内山野窯系）陶器皿で、17世紀末から18世紀前半代の製品である。23は堺産陶器搦鉢で、18世紀代に比定される。24～27は土錘である。28は鳩笛、29は鶏をかたどった土人形である。30～34は銅銭である。30は北宋銭の熙寧元寶で、初鑄年代は1068年である。31は北宋銭の元豐通寶で、初鑄年代は1078年である。32～34は寛永通寶で、32・33は「古寛永」、34は「新寛永」と呼ばれるものである。34には湯回り不良のため、スが入っている部位が認められる。

S D 29 88年度調査区（A区）で検出した石組みの溝で、S D 29と平行する位置で検出された。その規模は幅約1.2m、深さ約50cm、長さ約30mを測る。延長部にS D 28が位置しており、本来同一遺構であった可能性が考えられる。内部からは多量の陶磁器が出土しており、18世紀後半以降のものが主体となるが、17世紀代のもも一定量出土しており、遺構の構築時期も17世紀代に遡る可能性がある。また、幕末前後には埋没している可能性が高い。

出土遺物 (Fig.153～157) Fig.153—1～3は肥前磁器染付碗で、外面にコンニャク印判による文様を施すものである。1690～1740年代に比定される。4も肥前磁器染付碗で、1690～1740年代の製品。5～17も肥前磁器染付碗で、こちらは18世紀後半代に比定される。5・6の外面文様は同一モチーフが描かれている。7～14は「くらわんか碗」と呼称されるもので、内底部には大明年製崩れ銘が描かれる。18は肥前磁器青磁染付碗で、見込みにはコンニャク印判による五弁花文が描かれる。18世紀後半に比定される。19～26は肥前磁器筒形碗で、いずれも18世紀後半代の製品である。19・20は見込みにコンニャク印判による五弁花文が認められる。22は青磁染付と思われるが、焼成の状況が不良で、文様の詳細が読み取れない。23は外面に鉄釉が施され、見込みにはコンニャク印判による五弁花文が認められる。24～26は青磁染付筒形碗で、見込みにはやはりコンニャク印判による五弁花文が描かれている。27～30は肥前磁器染付碗で、これらも18世紀後半代の製品である。31は肥前磁器青磁染付碗と思われるが、これも焼成不良のため、文様の詳細が読み取れない。18世紀後半代の製品である。32は肥前磁器染付碗で、これは1820～1860年代に比定される。33は肥前磁器青磁染付蓋で、見込みの五弁花文はコンニャク印判によるものである。18世紀後半代の製品である。34は肥前磁器染付広東碗で、1780～1820年代に比定される。Fig.154—35は肥前磁器染付蓋で、見込みに鷲文を描くことから、広東碗に対応する蓋であろう。製作年代は1780～1820年代である。36・37は肥前磁器染付蓋で、端反碗に対応するものである。36の内底部には「乾」字がみられる。いずれも1820～1860年代に比定される。38も端反碗に対応する磁器染付蓋であるが、染付文様がポツテリしており、触ると文様部分に盛り上がりを感じる。これらは瀬戸美濃産磁器の特徴で、19世紀前半から中頃の製品である。39・40は蓋付きの肥前磁器端反碗のセットである。蓋の内底部には「富」銘が描かれている。19世紀前半から中頃に比定される。41～43・45～48は肥前磁器染付碗で、1820～1860年代の製品である。43には焼継がみられる。44は肥前磁器染付碗で、外面文様は素描きによるものである。1820～1860年代に比定される。49～53は肥前磁器染付薄手酒杯で、19世紀前半から中頃の製品である。53には焼継が認められる。54は肥前磁器染付小杯で、18世紀代に比定される。55・56も磁器染付小杯で、コバルト発色が強い呉須で描かれている。1870～1880年代の製品である。57は肥前磁器白磁紅皿で、18世紀後半以降の製品である。58～60は肥前磁器染付紅皿で、これらも18世紀後半以降に比定される。61は肥前磁器染付猪口で、外面には濃み筆による雨降り文が描かれる。1690～1740年代の製品である。62は肥前磁器青磁染付猪口で、見込みには欠損部があるが、コンニャク印判による五弁花文が認められる。18世紀後半代に比定される。63は肥前磁器染付仏飯器、64は肥前磁器色絵段重蓋で、いずれも18世紀代の所産である。65は肥前磁器青磁色絵火容れで、18世紀前半に比定される。66は瀬戸美濃産磁器染付碗で、外面に隸字本文が描かれる。19世紀前半から中頃の製品である。67は磁器染付碗で、外面に型紙刷りの文様を施す。1870～1880年代の製品である。68は肥前磁器青磁瓶類、69・70・Fig.155—71は肥前磁器染付瓶類で、いずれも18世紀代の製品である。72～79は肥前磁器染付皿で、72の内底部にはハリ支えの痕跡、73・77には「渦福」銘が認められる。73・77の見込みの五弁花文はコンニャク印判によるものである。72・75が18世紀前

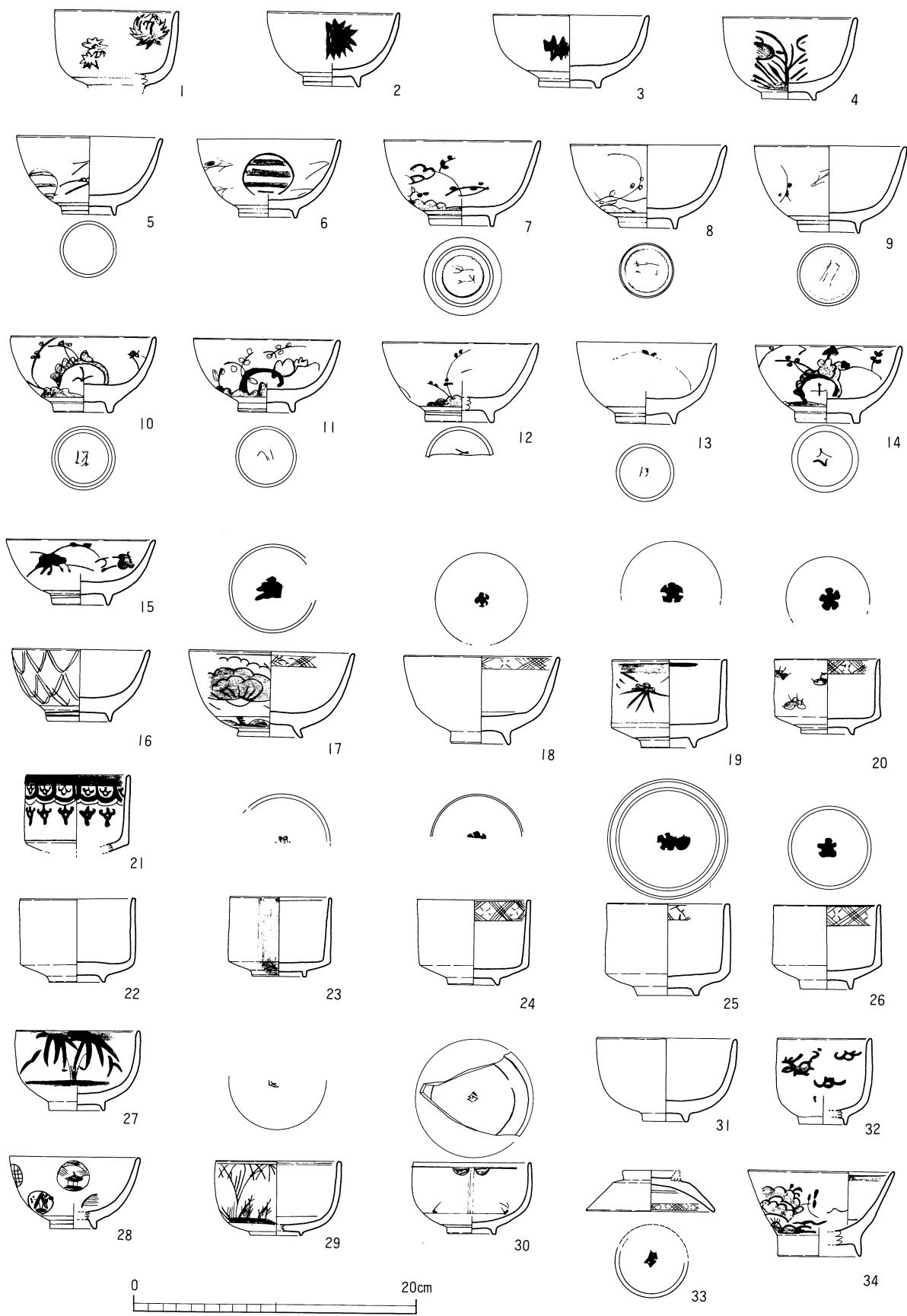


Fig. 153 SD29出土遺物① (S = ¼)

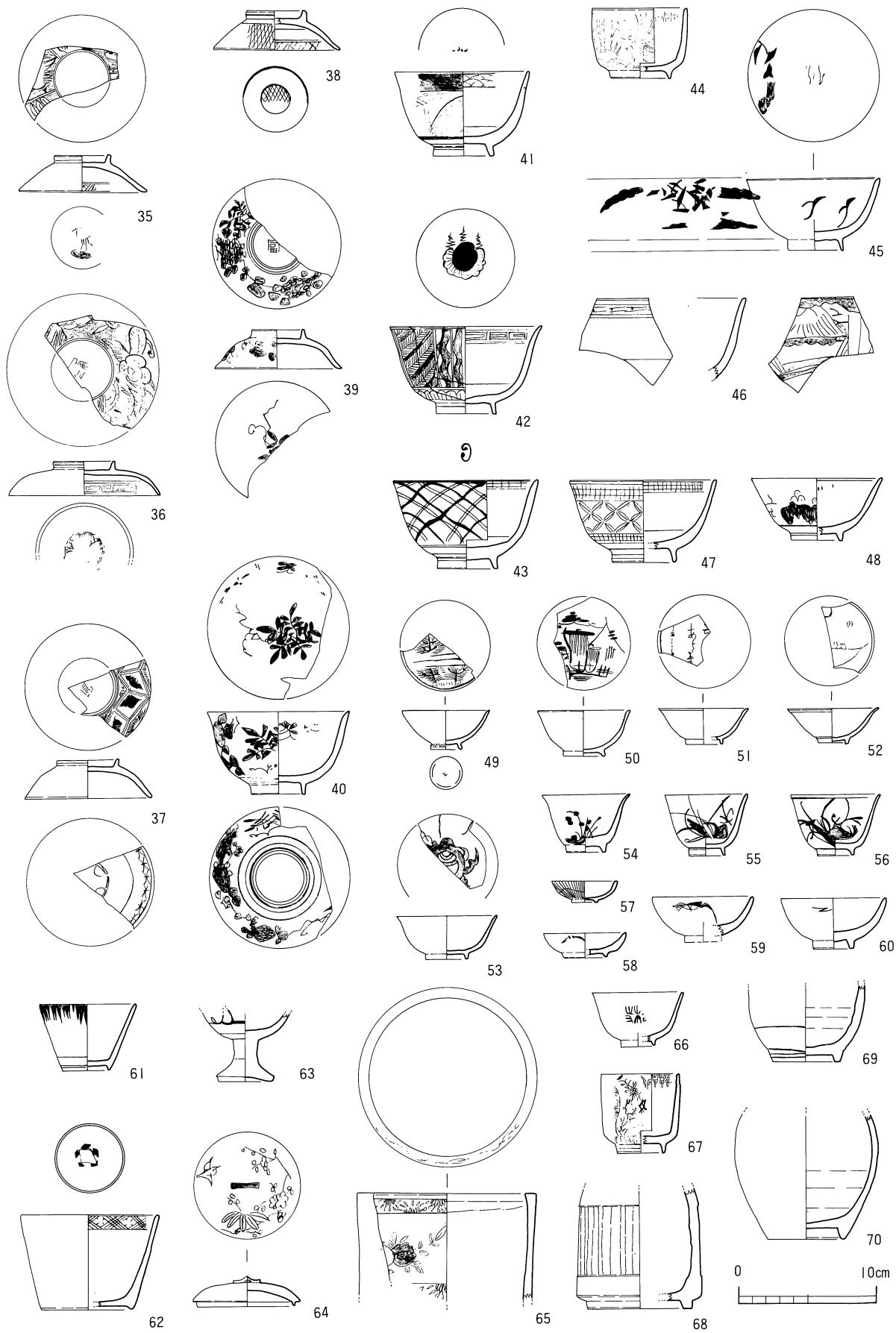


Fig. 154 SD29出土遺物② (S = ¼)

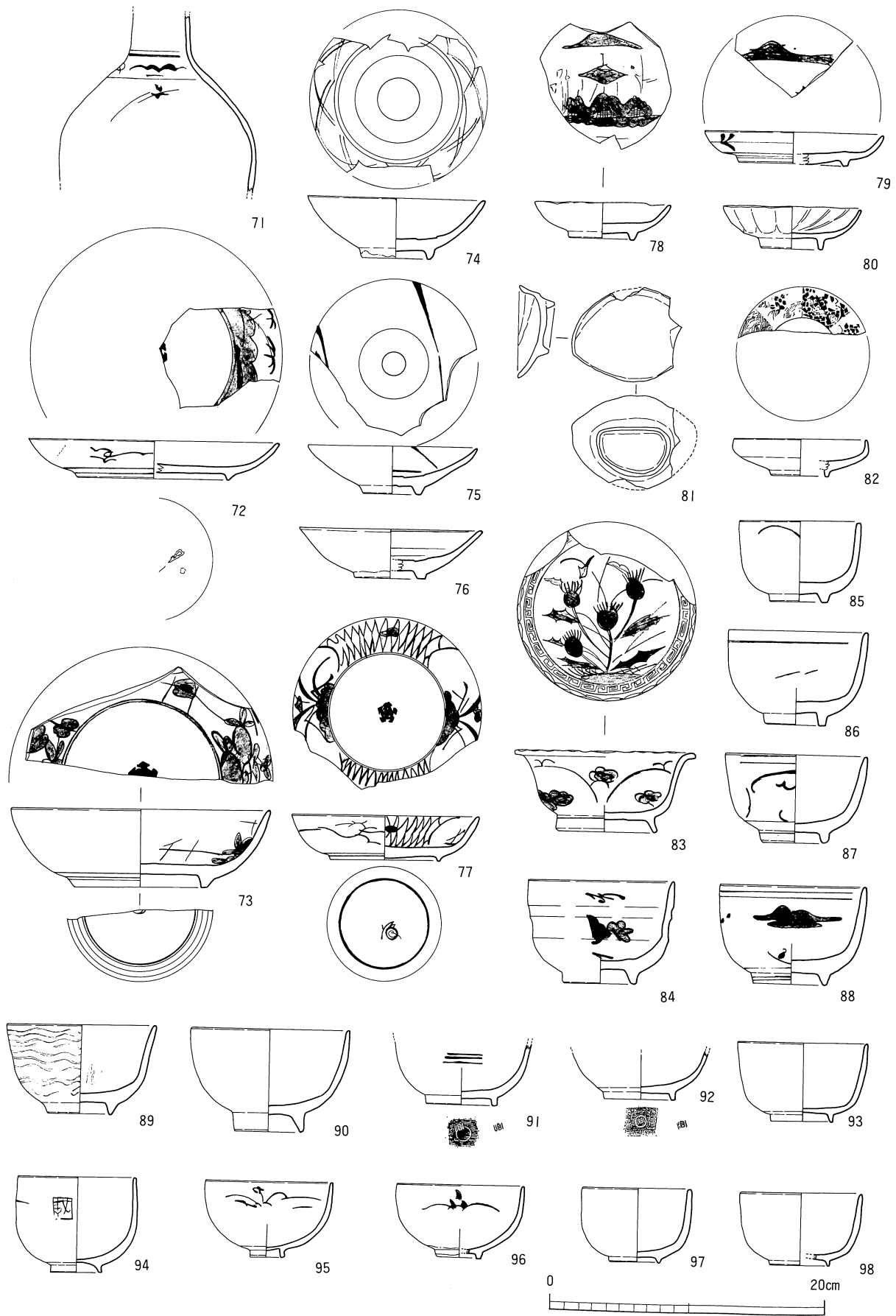


Fig. 155 SD29出土遺物③ (S = 1/4)

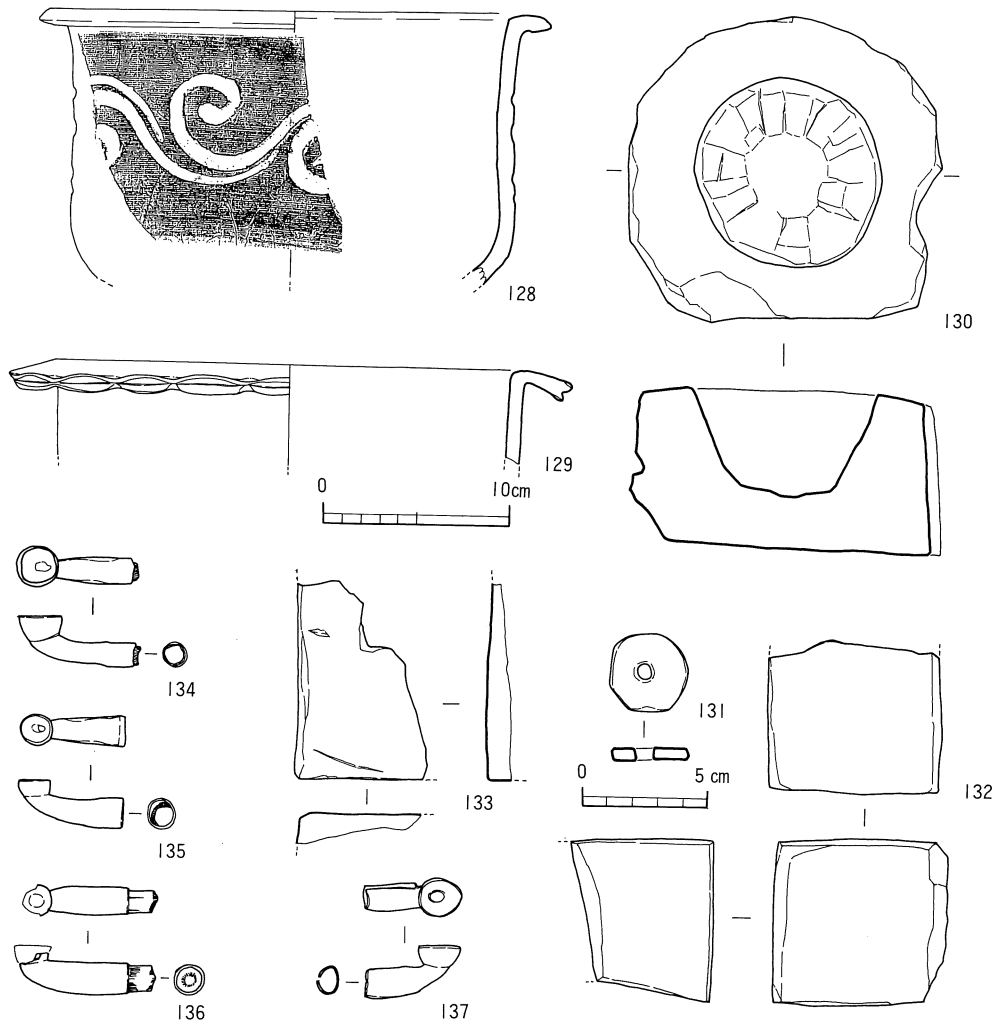


Fig. 157 SD29出土遺物⑤ (128~130は $S = \frac{1}{4}$ 、131~137は $S = \frac{1}{3}$)

半、73・74・76・77が18世紀後半、78が18世紀末から19世紀前半、79が18世紀代に比定される。80は肥前磁器白磁皿で、型打ち整形によるものである。口唇部は口錆となる。18世紀後半から19世紀前半の製品。81は肥前磁器青磁皿で、糸切り細工による製作である。1660~1680年代に比定される。82は磁器染付皿で、内面の文様は型紙刷りによる。1870~1880年代の製品。83は肥前磁器染付鉢で、19世紀前半以降に比定される。84~88は肥前陶胎染付碗で、18世紀前半に比定される。89は肥前唐津系陶器刷毛目碗で、これも18世紀前半の製品である。90は肥前京焼風陶器具器手碗で、17世紀後半代に比定される。91~93は肥前京焼風陶器碗で、91・92の内底部には刻印が認められる。これらも17世紀後半代の製品である。94~98は関西系（京焼系）陶器碗で、いずれも18世紀後半以降の製品である。Fig.156-99・100も同じく18世紀後半以降に比定される関西系（信楽系）陶器碗である。101も関西系陶器碗で、18世紀後半以降の製品である。102は産地不詳の陶器碗の底部である。103も関西系陶器碗で、外面に銅緑釉が施される。18世紀後半以降の製品である。104は瀬戸美濃産陶器碗で、外面に鉄絵による文様が描かれている。「柳茶碗」とも呼ばれるもので、18世紀後半以降の製品である。105・106は肥前唐津系（内山野窯系）陶器銅緑釉皿で、17世紀末から18世紀前半に比定される。107・108は肥前京焼風陶器皿で、見込みに鉄絵文様が描かれている。17世紀後半から18世紀前半の製品である。109は産地不詳の陶器皿で、内外面に灰釉が施される。底部付近は露胎となる。110・111は関西系陶器土瓶蓋で、110には透明釉が、111には鉄釉と灰釉が施されている。いずれも18世紀後半以降の製品である。112・113は関西系陶器土瓶で、112は素焼き、113は透明釉とイッチン掛けが認められる。これらも18世紀後半以降に比定される。114は関西系陶器灰落しで、口縁端部には煙管などを打

ち付けた痕跡が認められる。18世紀後半以降の製品である。115・116も18世紀後半以降に比定される関西系陶器で、115は土鍋、116は灯火具である。いずれも鉄釉が施されている。117は備前系陶器人形徳利で、底部外面には窯印と思われる刻印が認められる。18世紀後半以降の製品である。118・119は肥前唐津系陶器播鉢で、これらも18世紀後半以降に比定される。120も肥前唐津系陶器と推定される香炉で、外面には銅緑釉が施されている。18世紀代の製品であろう。121は関西系陶器で、器種不明であるが、瓶類であろうか。これも18世紀後半以降に比定される。122は土師質土器で、把手付きの十能形土器である。123は土師質土器炮烙で、口縁部の形態から18世紀後半代の所産である。124は瓦質土器鉢で、底部には板状圧痕が認められる。この形態の瓦質土器は、豊後海岸部付近で製作された在土器である。19世紀前半以降の製品である。125・126土師質土器土鍋である。125の製作年代は不詳であるが、126は胴部外面に叩き状の圧痕を残すことから、17世紀後半に遡るものである可能性が考えられる。127は土師質土器で、コシキ状の器形に復元されるものである。小柳和宏氏の教示によると、当該遺物は豊前地域に分布する「高村焼」の土師質土器に極めて類似しているという。Fig. 157—128・129は瓦質土器植木鉢で、19世紀前半以降の製品であろう。130は凝灰岩の加工品で、手水鉢的な用途をもつものである。131は軽石で作られた紡垂車状の石製品である。132・133は砥石で、いずれも砂岩質の素材が使用されている。134～137は煙管雁首で、このうち134・136はロウ部の木質が残存している。

S D30 S D27の約14m西側で検出された溝で、91年度調査区（L区）に位置する。検出された位置から判断して、本来はS D27と同一の遺構であった可能性も考えられる。遺構の状態は良好ではないが、幅約1.2m、深さ約50cm、長さ約3.2mを確認した。内部からは、陶磁器類が少量出土している。

出土遺物 (Fig. 158) 1は1820～1860年代に比定される肥前磁器染付端反碗、2は18世紀後半代に比定される肥前磁器染付二重網目文碗である。3は肥前磁器青磁皿の底部破片で、見込みには型押しによる雷文が認められる。1630～1650年代の製品である。4は肥前磁器染付皿で、見込みにはコンニャク印判による五弁花文、内底部には渦福を描く。18世紀後半代の製品である。

S D31 88年度調査区（A区）で検出した石組みの溝で、S D29と平行する位置で検出された。その規模は幅約1.2m、深さ約50cm、長さ約42mを測る。91年度調査区（L区）でS D32と接続し、L字状に屈曲する。内部からは18・19世紀代を主体とする陶磁器類を多量に出土している。

出土遺物 (Fig. 159) 1～16は肥前磁器染付碗で、いずれも18世紀後半の製品である。1～11はいわゆる「くらわんか碗」で、1～3の内底部には大明年製崩れ銘が描かれている。12～14は二重網目文染付碗である。17・18は肥前磁器染付広東碗で、1780～1820年代に比定される。また、17の見込みには「寿」字が描かれている。19・20は肥前磁器染付端反碗で、1820～1860年代の製品である。21は肥前磁器染付小丸碗で、これも1820～1860年代に比定される。22は瀬戸美濃産磁器染付碗で、19世紀前半から中頃の製品である。23～25は18世紀前半代に比定される肥前陶胎染付碗である。26は関西系陶器碗で、一部に銅緑釉が施される。18世紀後半以降の製品である。27は肥前磁器瓶類で、18世紀代の所産である。28は肥前磁器青磁香炉で、18世紀以降に比定される。29は肥前磁器白磁卸し皿で、19世紀代の製品である。30は肥前磁器染付紅皿、31は瀬戸美濃産陶器紅皿で、いずれも18世紀以降に比定される。32は肥前京焼風陶器皿で、見込みには鉄絵で山水文が描

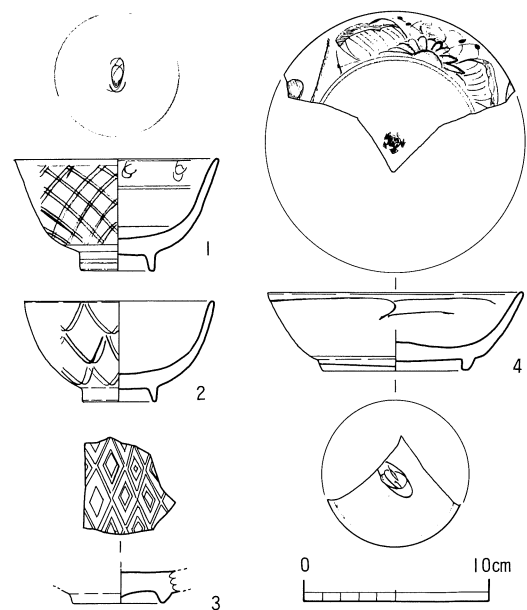


Fig. 158 SD30出土遺物 (S = ¼)

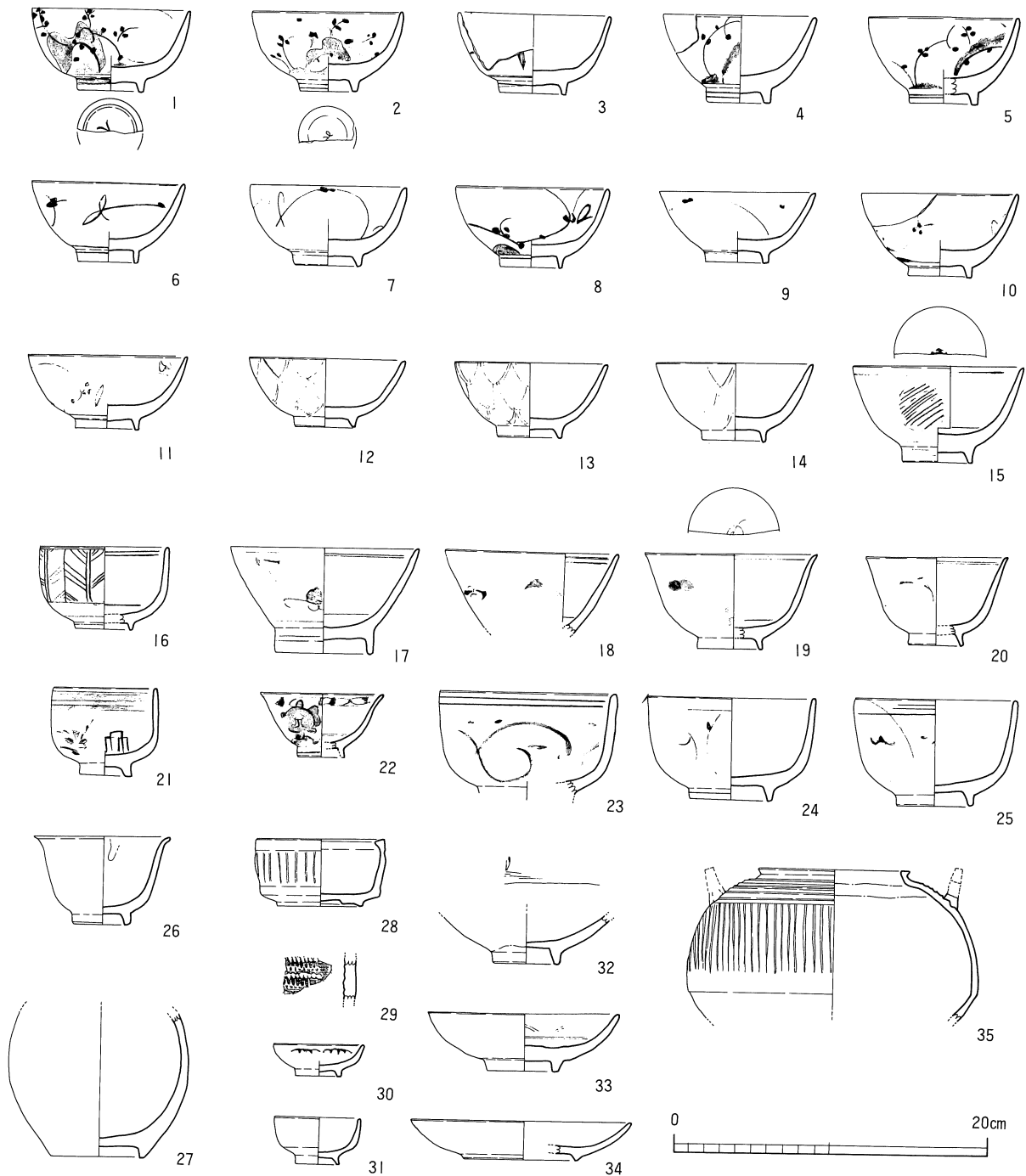


Fig. 159 SD31出土遺物 (S = ¼)

かれている。17世紀後半から18世紀初頭の所産である。33・34は肥前磁器染付皿で、いずれも18世紀後半代の製品である。35は関西系陶器土瓶で、外面と口縁内面に鉄釉が施されている。18世紀後半以降に比定される。

S D 30 91年度調査区 (L区) で検出した石組みの溝である。S D 29と接続し、L字状に屈曲する。その規模は幅約1.2m、深さ約50cm、長さ約43mを測る。内部からは多量の陶磁器類が出土している。

出土遺物 (Fig. 160) 1は18世紀後半に比定される肥前磁器染付くわんか碗である。2は関西系陶器碗で、これも18世紀後半の製品である。3・4は肥前磁器青磁染付蓋、5は肥前磁器青磁染付筒形碗で、いずれも18世

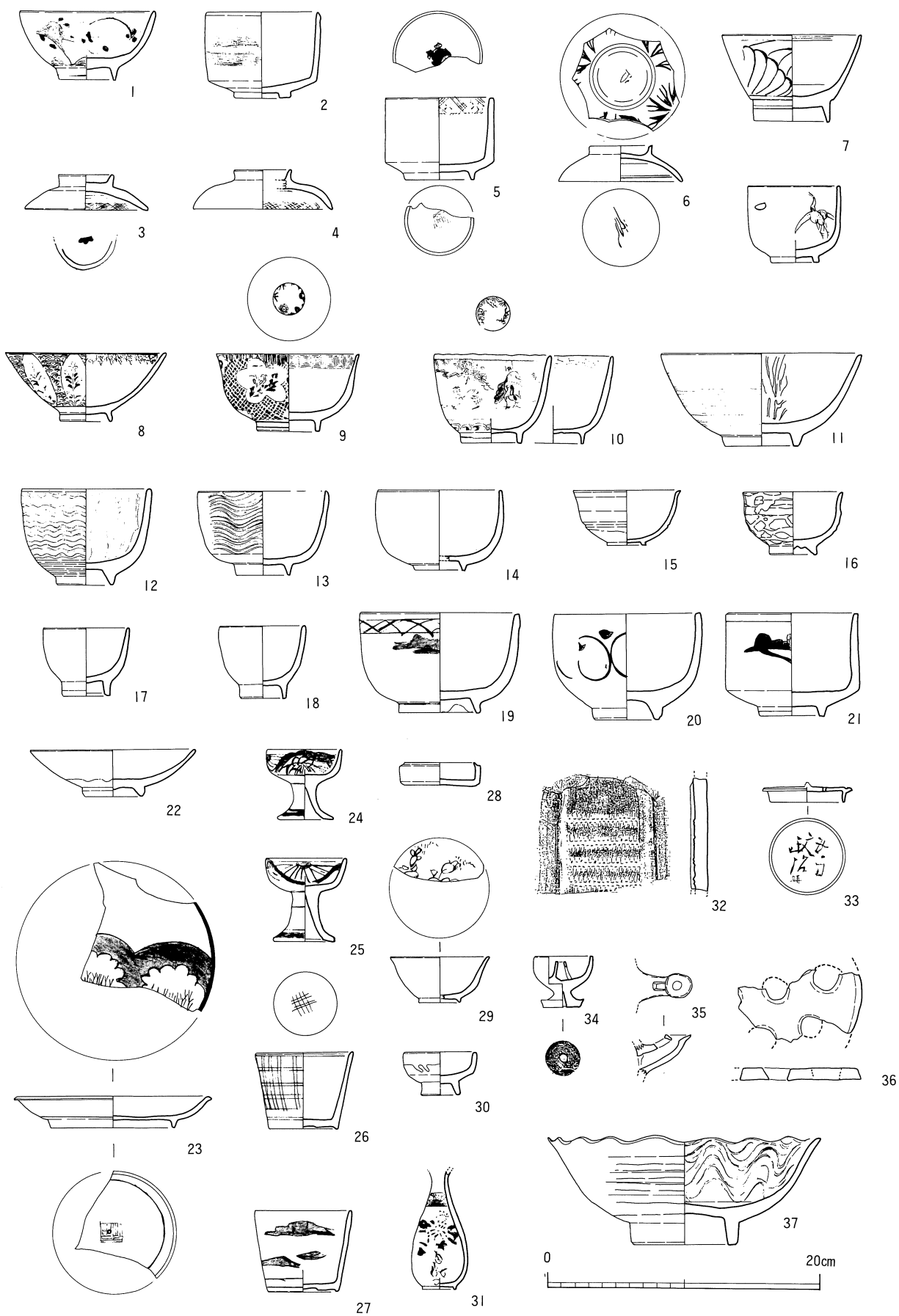


Fig. 160 SD32出土遺物① (S = ¼)

紀後半代に比定される。3・5の見込みにはコンニャク印判による五弁花文、5の内底部には渦福が描かれている。6は肥前磁器染付広東碗蓋、7は同広東碗で、いずれも1780～1820年代の製品である。8は肥前磁器染付小丸碗で、1820～1860年代の所産である。9・10は磁器染付碗で、型紙刷りによる文様が認められる。1870～1880年代の製品である。11も磁器染付碗であるが、呉須の発色の状況から19世紀後半代の製品であろう。12・13は肥前唐津系陶器刷毛目碗で、17世紀末から18世紀前半代に比定される。14・15は18世紀後半以降の所産である関西系陶器碗である。16は萩焼陶器ピラ掛け小碗で、19世紀前半の製品である。17・18は産地不詳であるが、外面に透明釉を施す碗である。18世紀後半以降に比定される。19～21は18世紀前半代に比定される肥前陶胎染付碗、22は17世紀末から18世紀前半代に比定される肥前唐津系（内山野窯系）陶器皿である。23は肥前磁器染付皿で、1660～1680年代の製品である。内底部には変形福字銘を描く。24・25は肥前磁器赤絵仏飯器で、18世紀後半から19世紀前半代である。26・27は肥前磁器染付猪口で、底部は蛇ノ目凹形高台である。これらも18世紀後半から19世紀前半代に比定される。29は磁器色絵薄手酒杯で、19世紀前半から中頃の所産である。20は瀬戸美濃産陶器紅皿で、18世紀後半以降の製品である。31は関西系陶器の小型の瓶類で、これも18世紀後半以降に比定される。32は肥前磁器白磁卸し皿で、19世紀以降の製品である。33は18世紀後半以降の所産である関西系陶器土瓶蓋で、無釉のものである。内面に使用者の名前と思われる墨書が認められ、「政治」と判読できる部分がある。34・35も18世紀後半以降に比定される灯火具で、34の外面には鉄釉、35の外面には透明釉が施されている。36は土師質土器多孔皿状製品で、「サナ」と呼ばれる焜炉の付属品である。19世紀前半から中頃の所産である。37は肥前唐津系陶器鉢、Fig.161—38は肥前唐津系陶器片口で、いずれも18世紀前半の製品である。39は硯で、裏面には意図的と思われる線刻と削痕がある。40～42は土人形である。

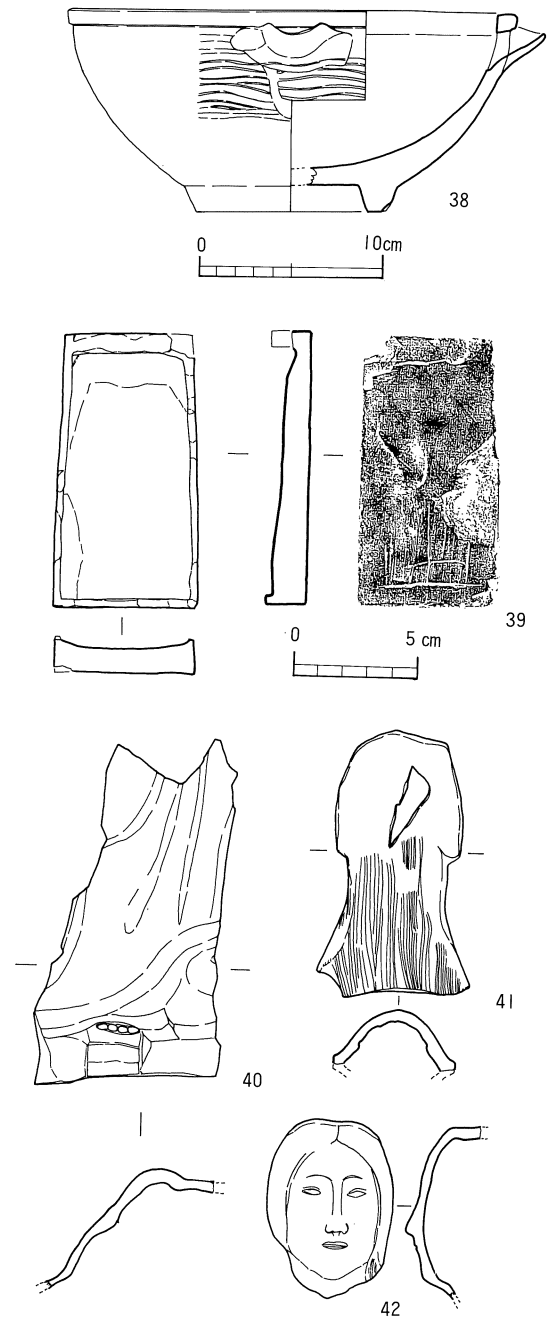


Fig. 161 SD32出土遺物②
(38は $S = \frac{1}{4}$ 、39～42は $S = \frac{1}{3}$)

S D33 89・90年度調査区（C・F区）から検出された石組みの溝である。その規模は幅約1.5～2m、深さ約50cm、長さ約68mを測る。内部からは多量の陶磁器類とともに、銅銭・煙管・土錘・砥石などが出土している。

出土遺物 (Fig.162・163) Fig.162—1は17世紀末から18世紀前半に比定される肥前唐津系陶器刷毛目碗の底部である。2は肥前磁器染付碗の底部で、内底部には「大明年製」銘がみられる。18世紀前半代に比定される。3・4・6・7は18世紀後半代の肥前磁器染付碗である。6の内底部の五弁花文はコンニャク印判によるものである。5は肥前磁器青磁染付碗で、内底部にコンニャク印判による五弁花文、内底部に「筒江」銘が描かれる。これも18世紀後半の製品である。8は1790～1840年代の肥前磁器染付碗で、外面の菊花文はコンニャク印判によるものである。9・10は肥前磁器染付広東碗で、1780～1820年代の製品である。12・13は1820～1860年代の肥前磁器染付端反碗である。14は肥前陶胎染付碗で、18世紀前半に比定される。15・16は18世紀代の所産である肥前

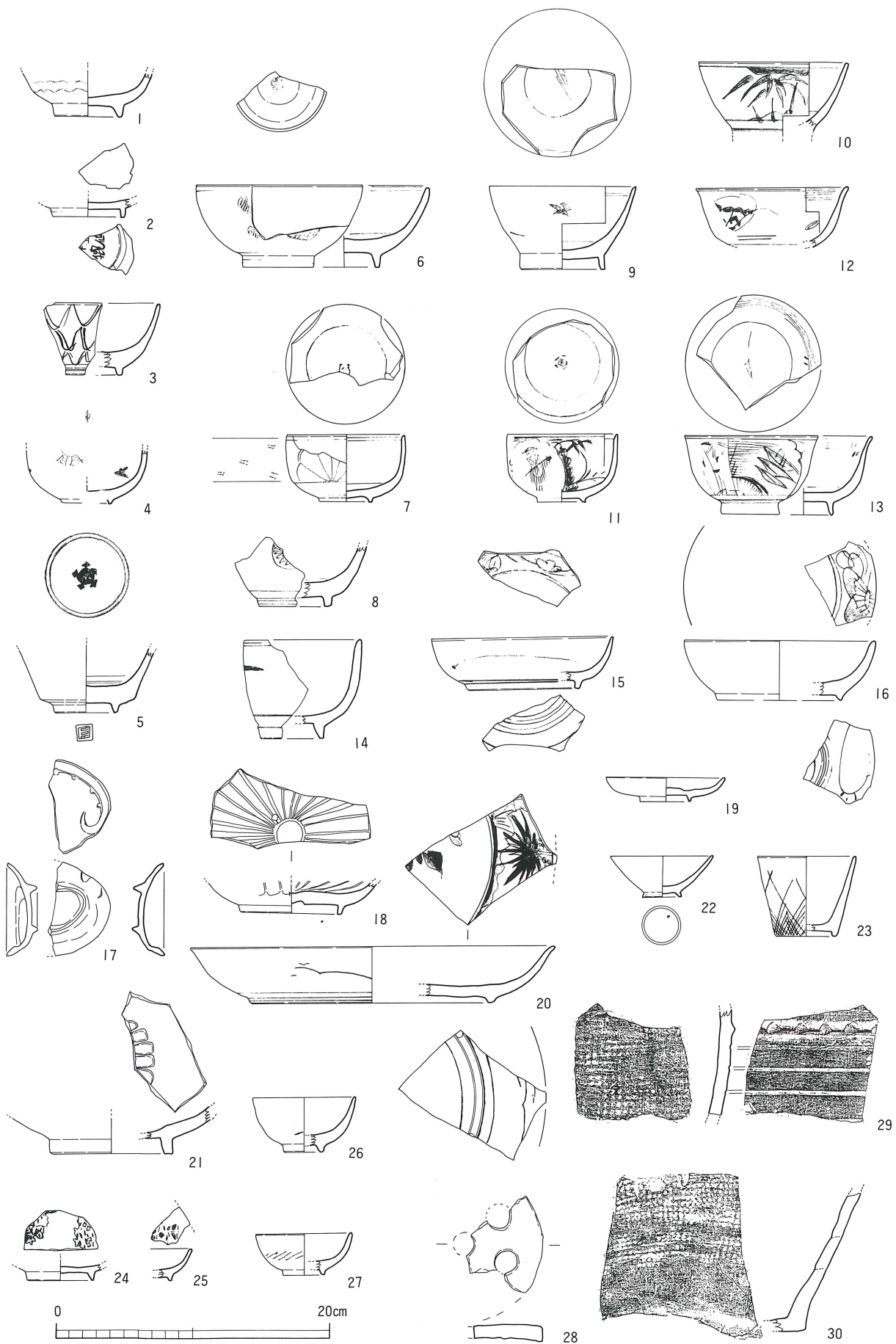


Fig. 162 SD33出土遺物① (S = ¼)

磁器染付皿である。17は肥前磁器青磁皿で、糸切り細工によるもの。1660～1680年代の製品である。18は型押し整形による肥前磁器白磁菊花皿で、底部は蛇ノ目凹形高台になる。19世紀前半以降に比定される。19も肥前磁器皿で、これも19世紀以降の製品である。20は肥前磁器染付皿で、製作年代は18世紀前半である。21は肥前磁器青磁皿で、見込みには菊花の型押しが認められる。1630～1650年代の製品である。22は磁器薄手酒杯で、19世紀前半以降の所産である。23は肥前磁器染付猪口で、18世紀後半以降に比定される。24は見込みにコンニャク印判による文様を有する肥前磁器染付皿で、1690～1740年代の製品である。25は見込みに型紙刷りによる文様を有する磁器皿で、1870～1880年代に比定される。26・27は18世紀後半以降に比定される肥前磁器染付紅皿である。28は焜炉の付属品である土師質土器多孔皿状製品で、19世紀前半から中頃に比定される。29・30は18世紀後半以降に比定される肥前唐津系陶器甕である。Fig.163-1は寛永通寶で、「古寛永」と呼称されるもの。2は煙管雁首火皿、3～6は土錘、7・8は砥石である。

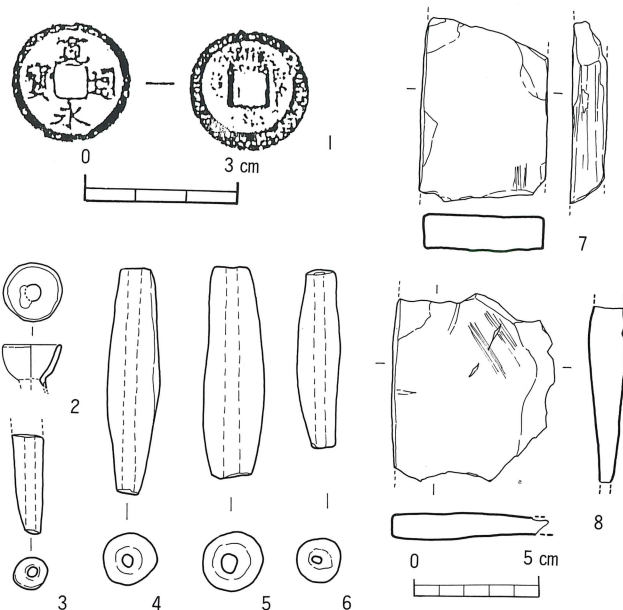


Fig. 163 SD33出土遺物② (1は実大、2はS=1/3)

SD34 89年度調査区(C区)から検出された石組みの溝である。その規模は幅約2m、深さ約50cm、長さ約30mを測る。内部からは陶磁器類・砥石などが出土した。

出土遺物(Fig.164) 1は関西系陶器土瓶蓋で、外面にはイッチン掛けにより鳥をかたどった文様を描いている。18世紀後半以降に比定される。2は砥石である。

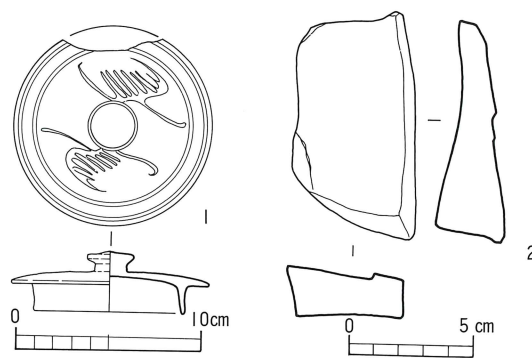


Fig. 164 SD34出土遺物
(1はS=1/4, 2はS=1/3)

SD35 89年度調査区(C区)から検出された石組みの溝であるが、石組みの状況は良好でない。その規模は幅約2m、深さ約50cm、長さ約28mを測る。内部からは陶磁器類・土錘などが出土した。

出土遺物(Fig.165) SD33の内部からは18世紀代の陶磁器類が少量出土しているが、小片のため図示できない。ここでは、図示可能な土錘2点のみを紹介する。Fig.165-1・2は土錘である。いずれも管状の形態を呈する。2は一端を欠損する。

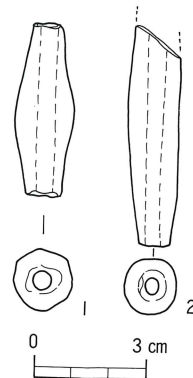


Fig. 165 SD35出土遺物
(S=1/2)

SE6 91年度調査区(L区)から検出された素掘りの井戸である(遺構の位置については、Fig.39も参照)。平面形態は円形で、直径約1.2mを測る。古墳時代の住居跡SH10と切り合い関係にある。また、周辺には中世の掘立柱建物SB14～16が位置しており、なんらかの関係にあった可能性も考えられる。検出面より約1m掘り下げたところ、壁面崩壊の危険が生じたため、これ以上の掘り下げを中止した。埋土中より中国産の染付と唐津焼が出土しており、井戸の埋没は近世初期と思われる。従って、当該遺構の最初の掘削時期は中世段階に遡る可能性も考えられるが、その証拠をつかむことはできなかった。

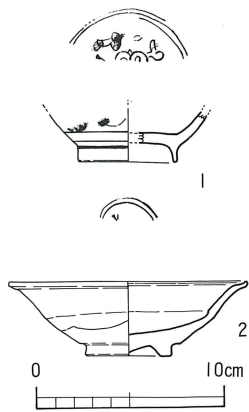


Fig. 166 SE 6 出土遺物
(S = 1/4)

SE 6 (Fig. 166) 1は中国産磁器染付饅頭心碗である。内底部に銘款の一部が見られるが、破損のため判読できない。16世紀後半代の製品である。2は肥前唐津系陶器溝縁皿で、見込みには砂目が認められる。1600～1630年代の製品である。

SE 7 (Fig. 167) 87年度調査区(B区)から検出された井戸である。井戸の掘方は2段掘りで、掘方上段には残存状況は不良であるが頭大の川原石が配置されていた。井戸側には特別な施設がなく、素掘りとなる。検出面の直径は約1.6m、井戸側直径は約1.1mを測る。検出面より約1.6m掘り下げたところで、これ以上の掘り下げを中断した。出土遺物より、当該井戸は18世紀中頃には埋没している。

SE 7 (Fig. 168) 1は肥前唐津系陶器銅緑釉皿で、17世紀後半から18世紀前半に比定される。2・3は堺産陶器播鉢(I型式)で、18世紀前半から中頃に比定される。

SX 3 (Fig. 169) 88年度調査区(A区)から検出された集石遺構である。長軸約1.1m、短軸約0.6mの範囲に頭大～拳大の石を集積している。集石付近や周辺からは志野焼や初期伊万里の皿が出土している。遺構の性格は不明であるが、出土遺物から当該遺構の年代は17世紀前半に比定される。

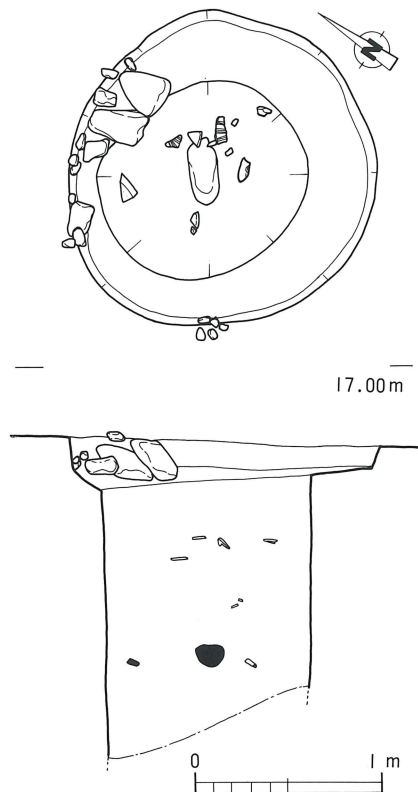


Fig. 167 SE 7 実測図 (S = 1/40)

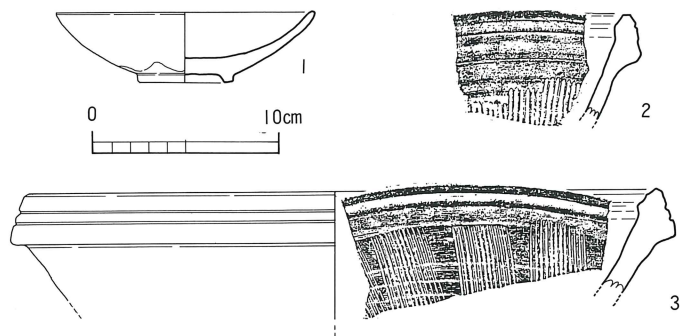


Fig. 168 SE 7 出土遺物① (S = 1/4)

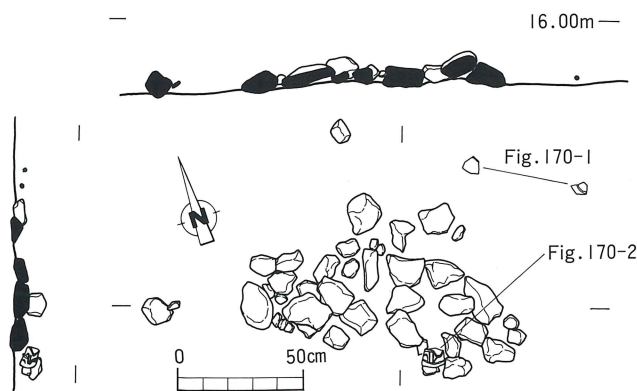


Fig. 169 SX 3 実測図 (S = 1/30)

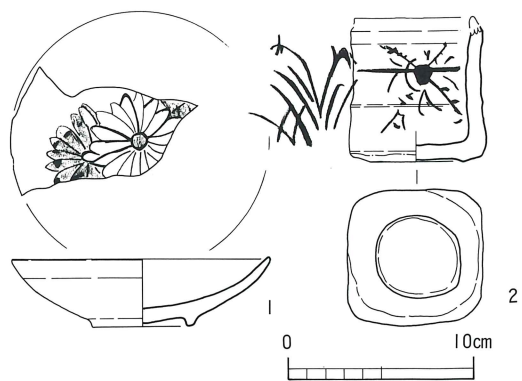


Fig. 170 SX 3 出土遺物 (S = 1/4)

出土遺物 (Fig.170) 1は肥前磁器染付皿で、いわゆる初期伊万里の磁器皿である。見込みには菊花文が描かれている。製作年代は1620～1640年代に比定される。2は志野焼陶器向付で、外面に鉄絵文様が描かれている。口縁部を欠損している。16世紀末前後の製品である。大分県下において、桃山陶磁である「志野焼向付」が発掘調査で出土したことは今回の事例が初めてであり、しかも出土遺構の年代が志野焼の製作年代とそれほど離れていないことは注目に値しよう。

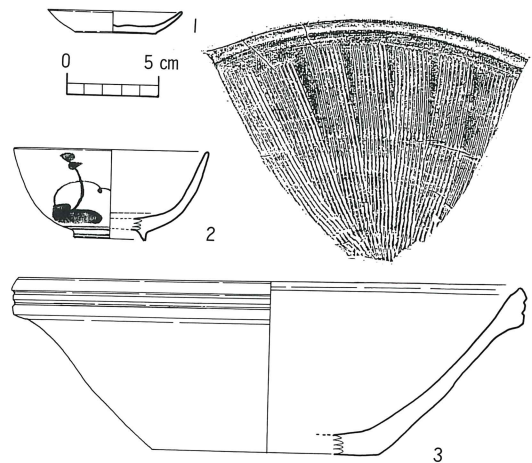
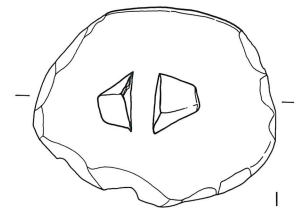


Fig. 171 SX 4 出土遺物 (S = ¼)

SX 4 88年度調査区 (A区) から検出された竪穴状遺構である。調査区の制限により、遺構全体を検出しえなかったが、一辺約 8 m を測る方形プランを呈するものと推定される。遺構の性格は不明であるが、出土遺物から 18 世紀後半代に比定される遺構である。

出土遺物 (Fig.171) 1は土師質土器小皿で、底部には右回転の糸切り痕が認められる。2は18世紀後半に比定される肥前磁器染付くらかわんか碗である。3は堺産陶器播鉢 (I 型式) で、18世紀後半の製品である。



SX 5 当該遺構も 88 年度調査区 (A 区) から検出された竪穴状遺構である。出土遺物から近代以降に構築された遺構であるが、埋土中から近世の土人形などが出土したため、本項で取り上げた。遺構の性格は不明である。

出土遺物 (Fig.172) 1は瓦質土器の蓋状の製品である。詳細な用途や年代は不明であるが、近世以降の製品である。2は土人形で、馬に乗った人物像を表現している。

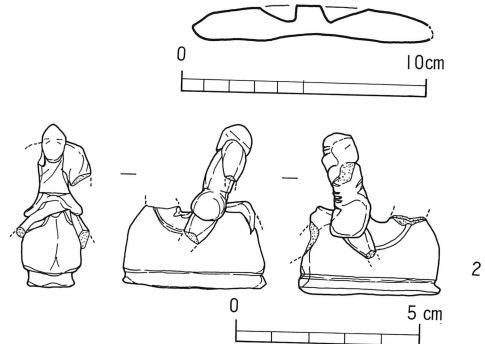


Fig. 172 SX 5 出土遺物
(1はS = ⅓、2はS = ½)

その他 90年度調査区 (G区) から出土した近世遺物の中で、図示できるものがあつたので、紹介しておきたい。Fig.173-1は産地不詳の陶器底部で、外底部には糸切り痕とヘラ記号が認められる。2は肥前磁器染付小丸碗で、1820～1860年代に比定される。3は土錘、4は銅製の簪である。

小結 遺構図および出土遺物の提示が極めて不十分であるが、まず確認しておきたいことは「SD」の遺構番号を付けた溝は、ほぼすべてが灌漑のための用水路である。溝の大半は石組み溝であり、その中のいくつかは現在の水田の区画や水路の方向と一致するものがある。

ここでは石組み溝SD27・SD28に注目しておきたい。SD27・SD28は近世に構築された溝であり、切り合い関係からその構築順序はSD27→SD28となる。ふたつの溝とも最初の掘削年代は明らかではないが、SD27からは唐津系陶器皿

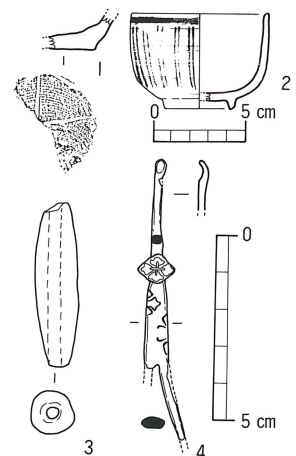


Fig. 173 '90年度調査区 (G区) 出土遺物



Fig. 174 SD25・SD26の位置 (S = 1/500)

が、SD28からは17世紀代から幕末に至る出土遺物が認められる。従って、おそらくSD27の時期は17世紀の早い時期に遡り、SD28は17世紀代以降幕末まで使用されたようである。

両者の位置関係をもてみると、SD28は一見して、中世屋敷跡を囲む溝SD25の西辺溝の方向を踏襲して造営されている (Fig.174)。また、SD28はSD27を付け替えて (改修して)、構築した可能性が高いと考えられる。さらに、中世屋敷跡の溝SD23と近世の溝SD26の方向は、発掘調査以前の田圃の区画 (畦) にも踏襲されていた。この区画は「植田条里」の復元ライン (Fig.115参照) には乗っておらず、この地点の区画の起源は中世屋敷が造営された15~16世紀代までしか遡らないことになる。

調査地点周辺には、「古井路」と呼ばれる幹線水路が存在する。当該水路は鎌倉時代の建久年間に創築されたという伝承をもつが、江戸時代前期の慶安5年 (1652) に大改修されている。植田市遺跡で検出された江戸時代の石組み溝は、その大半が発掘調査以前の土地区画に踏襲されており、現在の水田耕作に伴う水路と重なるものも存在する。以上の石組み溝は、幹線水路である「古井路」から分水した支線の水路であったことが考えられよう。

V. ま と め

今回の調査で判明したことを箇条書きとして、まとめに代えたい。

- ① 植田市遺跡は大分県大分市大字市に所在する縄文時代晩期末から近世に至る複合遺跡である。今回の調査は七瀬川河川改修工事に伴うもので、1987年6月から1992年2月の5年度にわたり、約32,000㎡を発掘調査した。
- ② 縄文時代の遺構・遺物としては、刻目突帯文土器の段階の埋甕（SX1）および遺物包含層がある。出土遺物の中で、土器資料は東九州地方における刻目突帯文土器の型式である「下黒野式」の内容を補強・検証するものであった。また、古墳時代の溝SD14に混入していたが、東日本系の土器も出土しており（21頁、Fig.15-43）、注目される。
- ③ 弥生時代から古墳時代前期の遺構の中では、溝SD1が注目される。当該遺構からは弥生時代後期末から古墳時代前期の良好な土器を出土している。
- ④ 古墳時代中・後期には水田耕作用の流路が掘削され、数回の改修を経て、長期間使用される。また、5世紀中頃から6世紀初頭にかけて25棟の住居跡が検出され、これらの中には陶邑編年第I型式4・5段階（TK23・TK47）の時期に比定されるカマドを有するものが存在しており、注目される。
- ⑤ 古代の遺構としては、溝が3条検出されている（SD22～24）。これらの溝は植田条里の復元ラインと重複する可能性があり、注意を要する。
- ⑥ 中世の遺構の中で注目されるものは、溝で囲まれた屋敷跡がある。中世屋敷跡は東西約60m、南北約55mの範囲を有し、15世紀後半から16世紀前半代を主体に造営されたものである。
- ⑦ 近世の遺構としては、遺構実測図などの提示が十分ではないものの、水田耕作用の水路に使用された石組み溝から大量の陶磁器類などが検出されている。

遺構名	旧遺構名称	遺構の性格	参照概報
SD 1	B区弥生流路 C区溝Ⅰ E区溝Ⅰ	弥生時代後期末～古墳時代前期の溝	『植田市遺跡』Ⅰ 『植田市遺跡』Ⅲ 『植田市遺跡』Ⅳ
SD 2	C区溝Ⅲ	SD 1 に付属する溝	『植田市遺跡』Ⅲ
SD 3	F区 24 号溝	SD 1 に付属する溝	『植田市遺跡』Ⅳ
SD 4	F区 25 号溝	SD 1 に付属する溝	『植田市遺跡』Ⅳ
SD 5	F区 27 号溝	SD 1 に付属する溝	『植田市遺跡』Ⅳ
SD 6	F区 28 号溝	SD 1 に付属する溝	『植田市遺跡』Ⅳ
SD 7	F区 29 号溝	SD 1 に付属する溝	『植田市遺跡』Ⅳ
SD 8	F区 30 号溝	SD 1 に付属する溝	『植田市遺跡』Ⅳ
SD 9	F区 31 号溝	SD 1 に付属する溝	『植田市遺跡』Ⅳ
SD 10	F区 32 号溝	SD 1 に付属する溝	『植田市遺跡』Ⅳ
SD 11	E区 21 号溝	弥生時代後期の溝	『植田市遺跡』Ⅳ
SD 12	L区 50 号溝	弥生時代後期の溝	『植田市遺跡』Ⅴ
SD 13	C区溝Ⅱ	5世紀後半代の溝	『植田市遺跡』Ⅲ
SD 14	—	6世紀代以降の溝	—
SD 15	5号溝	6世紀代以降の溝	『植田市遺跡』Ⅰ～Ⅲ
SD 16	A区 11 号溝	6世紀代以降の溝	『植田市遺跡』Ⅱ
SD 17	A区 13 号溝	6世紀代以降の溝	『植田市遺跡』Ⅱ
SD 18	A区 12 号溝	6世紀代以降の溝	『植田市遺跡』Ⅱ
SD 19	B区流路支流 E区 23 号溝	6世紀代以降の溝	『植田市遺跡』Ⅰ 『植田市遺跡』Ⅳ
SD 20	B区排水溝 E区 22 号溝	6世紀代以降の溝	『植田市遺跡』Ⅰ 『植田市遺跡』Ⅳ
SD 21	C区溝Ⅴ	6世紀後半～7世紀前半前後の溝	『植田市遺跡』Ⅳ
SD 22	B区 3 号溝	9世紀代の溝	『植田市遺跡』Ⅰ
SD 23	I区 38 号溝	8世紀代の溝	『植田市遺跡』Ⅳ
SD 24	I区 39 号溝	8世紀代の溝	『植田市遺跡』Ⅳ
SD 25	B区 2 号溝	中世屋敷跡を区画する溝	『植田市遺跡』Ⅰ
SD 26	A区 10 号溝	近世の素掘り溝	『植田市遺跡』Ⅱ
SD 27	B区 4 号溝	近世（江戸時代前期？）の石組み溝	『植田市遺跡』Ⅰ
SD 28	B区 1 号溝	近世の石組み溝	『植田市遺跡』Ⅰ
SD 29	A区 6 号溝	近世の石組み溝	『植田市遺跡』Ⅱ
SD 30	L区 61 号溝	近世の溝	『植田市遺跡』Ⅴ
SD 31	A区 7 号溝	近世の石組み溝	『植田市遺跡』Ⅱ
SD 32	L区 60 号溝	近世の石組み溝	『植田市遺跡』Ⅴ
SD 33	C・F区 16 号溝	近世の石組み溝	『植田市遺跡』Ⅲ
SD 34	C区 17 号溝	近世の石組み溝	『植田市遺跡』Ⅲ
SD 35	C区 18 号溝	近世の溝	『植田市遺跡』Ⅲ
SR 1	流路	古墳時代の流路	『植田市遺跡』Ⅰ～Ⅴ
SH 1	L区 1 号住居跡	5世紀末の住居跡	『植田市遺跡』Ⅴ
SH 2	L区 2 号住居跡	5世紀末の住居跡	『植田市遺跡』Ⅴ
SH 3	L区 3 号住居跡	5世紀末の住居跡	『植田市遺跡』Ⅴ
SH 4	L区 4 号住居跡	5世紀末の住居跡	『植田市遺跡』Ⅴ
SH 5	L区 5 号住居跡	5世紀末の住居跡	『植田市遺跡』Ⅴ
SH 6	L区 6 号住居跡	5世紀後半の住居跡	『植田市遺跡』Ⅴ
SH 7	L区 7 号住居跡	5世紀末の住居跡	『植田市遺跡』Ⅴ
SH 8	L区 8 号住居跡	5世紀末の住居跡	『植田市遺跡』Ⅴ
SH 9	L区 9 号住居跡	5世紀末の住居跡	『植田市遺跡』Ⅴ
SH 10	L区 10 号住居跡	5世紀末の住居跡	『植田市遺跡』Ⅴ
SH 11	L区 11 号住居跡	5世紀末～6世紀初頭の住居跡	『植田市遺跡』Ⅴ
SH 12	L区 12 号住居跡	5世紀後半の住居跡	『植田市遺跡』Ⅴ
SH 13	L区 13 号住居跡	5世紀後半の住居跡	『植田市遺跡』Ⅴ
SH 14	L区 14 号住居跡	5世紀末の住居跡	『植田市遺跡』Ⅴ
SH 15	L区 15 号住居跡	5世紀末の住居跡	『植田市遺跡』Ⅴ

Tab. 8 遺構一覧表(1)

遺構名	旧遺構名称	遺構の性格	参照概報
SH 16	L区 16号住居跡	5世紀末の住居跡	『植田市遺跡』 V
SH 17	L区 17号住居跡	5世紀後半の住居跡	『植田市遺跡』 V
SH 18	L区 18号住居跡	5世紀末の住居跡	『植田市遺跡』 V
SH 19	L区 19号住居跡	5世紀末の住居跡	『植田市遺跡』 V
SH 20	L区 20号住居跡	5世紀後半の住居跡	『植田市遺跡』 V
SH 21	L区 21号住居跡	5世紀末の住居跡	『植田市遺跡』 V
SH 22	L区 22号住居跡	5世紀後半の住居跡	『植田市遺跡』 V
SH 23	A区 4a号竪穴	5世紀後半の住居跡	『植田市遺跡』 II
SH 24	A区 4b号竪穴	5世紀末の住居跡	『植田市遺跡』 II
SH 25	M区 1号住居跡	5世紀末の住居跡	『植田市遺跡』 V
SK 1	—	5世紀後半代の土坑	—
SK 2	A区 3号土坑	5世紀末の土坑	『植田市遺跡』 II
SK 3	B区ピット	土師質土器を一括出土した中世の遺構	『植田市遺跡』 I
SK 4	C区 1号墓	備前焼を破砕して埋納した土坑	『植田市遺跡』 III・IV
SK 5	B区井戸状遺跡	上面に配石をする中世の土坑	—
SK 6	—	瓦質土器火鉢を出土した中世の土坑	—
SK 7	F区 1号土坑	備前焼と銅銭を出土した土坑	『植田市遺跡』 IV
SB 1	L区 1号建物	5世紀末～6世紀初頭の掘立柱建物	『植田市遺跡』 V
SB 2	建 1	中世屋敷跡敷地内の掘立柱建物	『植田市遺跡』 III
SB 3	建 2	中世屋敷跡敷地内の掘立柱建物	『植田市遺跡』 III
SB 4	建 3	中世屋敷跡敷地内の掘立柱建物	『植田市遺跡』 III
SB 5	建 4	中世屋敷跡敷地内の掘立柱建物	『植田市遺跡』 III
SB 6	建 5	中世屋敷跡敷地内の掘立柱建物	『植田市遺跡』 III
SB 7	建 6	中世屋敷跡敷地内の掘立柱建物	『植田市遺跡』 III
SB 8	建 7	中世屋敷跡敷地内の掘立柱建物	『植田市遺跡』 III
SB 9	建 8	中世屋敷跡敷地内の掘立柱建物	『植田市遺跡』 III
SB 10	E区 1号建物	中世の掘立柱建物	『植田市遺跡』 IV
SB 11	—	中世の掘立柱建物	—
SB 12	—	中世の掘立柱建物	—
SB 13	—	中世の掘立柱建物	—
SB 14	L区 3号建物	中世の掘立柱建物	『植田市遺跡』 V
SB 15	—	中世の掘立柱建物	—
SB 16	L区 2号建物	中世の掘立柱建物	『植田市遺跡』 V
SP 1	F区PH 1	土師質土器を出土した柱穴	『植田市遺跡』 IV
SE 1	C区 1号井戸	中世屋敷と同時期の石組み井戸	『植田市遺跡』 II
SE 2	C区 6号井戸	中世屋敷と同時期の石組み井戸	『植田市遺跡』 III
SE 3	C区 3号井戸	中世屋敷跡に先行する素掘りの井戸	『植田市遺跡』 III
SE 4	A区 2号井戸	中世の石組み井戸	『植田市遺跡』 II
SE 5	A区 1号井戸	中世の素掘りの井戸	『植田市遺跡』 II
SE 6	L区 2号井戸	近世前期の素掘りの井戸	『植田市遺跡』 V
SE 7	B区井戸（江戸）	近世の井戸	『植田市遺跡』 I
ST 1	C区 2号墓	中世屋敷跡の屋敷墓	『植田市遺跡』 II
ST 2	B区 2号墓	中世の墓	『植田市遺跡』 II
SX 1	A区埋甕	縄文時代晩期の埋甕	『植田市遺跡』 II
SX 2	B・C区畝状攪乱	中世屋敷廃絶後に形成された遺構	『植田市遺跡』 I・II
SL 1	—	縄文時代晩期の包含層	『植田市遺跡』 II
SL 2	—	弥生～古墳時代の包含層	—

Tab. 9 遺構一覧表(2)

V. 付 編 — 自然科学的分析 —

(1) 大分県大分市植田市遺跡から出土した木製品の樹種

能城修一（農林省森林総合研究所木材利用部）

植田市遺跡は、大分川の一支流である七瀬川の左岸に位置する。ここでは古墳時代前期の溝SD1から出土した木器（組み合わせ鋤）と、室町時代の井戸SE5から出土した曲物の樹種を報告する。樹種同定のための顕微鏡標本は、木製品から直接、片刃カミソリを用いて横断面・接断面・放射断面の切片を切り取り、ガムクロールで封入して作製した。以下には、当遺跡で見いだされた3樹種の木材解剖学的な記載を行ない、顕微鏡写真をFig.175に示す。また、同定結果の一覧をTab.10に示した。

1. スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don スギ科 Fig.175:1a-1c (OITA-25)

仮道管と樹脂細胞、放射柔細胞とからなる針葉樹材。早材の仮道管は大きな方形で薄壁であり、晩材は厚壁で小型となる。その移行はやや急で、晩材はある程度の量があり、明瞭である。早材の終わりから晩材には、樹脂細胞が不規則な接線状に散在する。分野壁孔は大型のスギ型で、1分野に2個あり、孔口は水平に開く。

2. コナラ属アカガシ科 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 Fig.175:2a-2c (OITA-22)

大型でまるい厚壁の単独管孔が不規則に径を変えながら、放射方向に配列する放射孔材。木部柔組織は不規則な接線状で、ときに大型の結晶をもつ。道管の穿孔は単一。放射組織は単列同姓で、集合状～複合状の大型のものを伴う。

3. ツバキ属 *Camellia* ツバキ科 Fig.175:3a-3c (OITA-23)

小型の単独管孔が、年輪界にむけて径を減じながら散在する半環孔材的な散孔材。木部柔組織は短接線状。道管の穿孔は10～20本ほどの横棒からなる階段状。放射組織は異性で3細胞幅くらい、背が低く、単列部にしばしば大型の結晶をもつ。

植田市遺跡の木製品6点中には、3樹種が見いだされた(Tab.10)。鋤1点はコナラ属アカガシ亜属で、加工品はツバキ属、曲物は木釘も含めてスギであった。コナラ属アカガシ亜属は西日本の鋤鋤でもっとも普遍的なものであり(島地・伊東 1998)、これと同様の樹種選択といえる。また曲物に使われているスギも、九州では16世紀以降、スギが普通で、ヒノキ属の使用例がないという報告(山田 1993)に適うものである。

引用文献 島地 謙・伊東隆夫(編)『日本の遺跡出土木製品総覧』(雄山閣 1988年)

山田昌久「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史—」

(『植生史研究』特別第1号 1993年)

OITA-No.	樹種名	製品名	製品備考	木取り	地 点	時 代
OITA-22	コナラ属 アカガシ亜種	鋤	(Fig. 25)		SD1 (溝)	古墳時代前期 (4C)
OITA-23	ツバキ属	加工品	(Fig. 142-4)		SE5 (井戸)	室町時代 (16C)
OITA-24	スギ	曲物 底板	(Fig. 142-6)	柾目	SE5 (井戸)	室町時代 (16C)
OITA-25	スギ	曲物	(Fig. 142-5)	板目	SE5 (井戸)	室町時代 (16C)
OITA-26	スギ	曲物 木釘	(Fig. 142-5)	OITA-25 割材	SE5 (井戸)	室町時代 (16C)
OITA-27	スギ	曲物	(Fig. 142-7)	柾目	SE5 (井戸)	室町時代 (16C)

Tab. 10 植田市遺跡の木製品の樹種

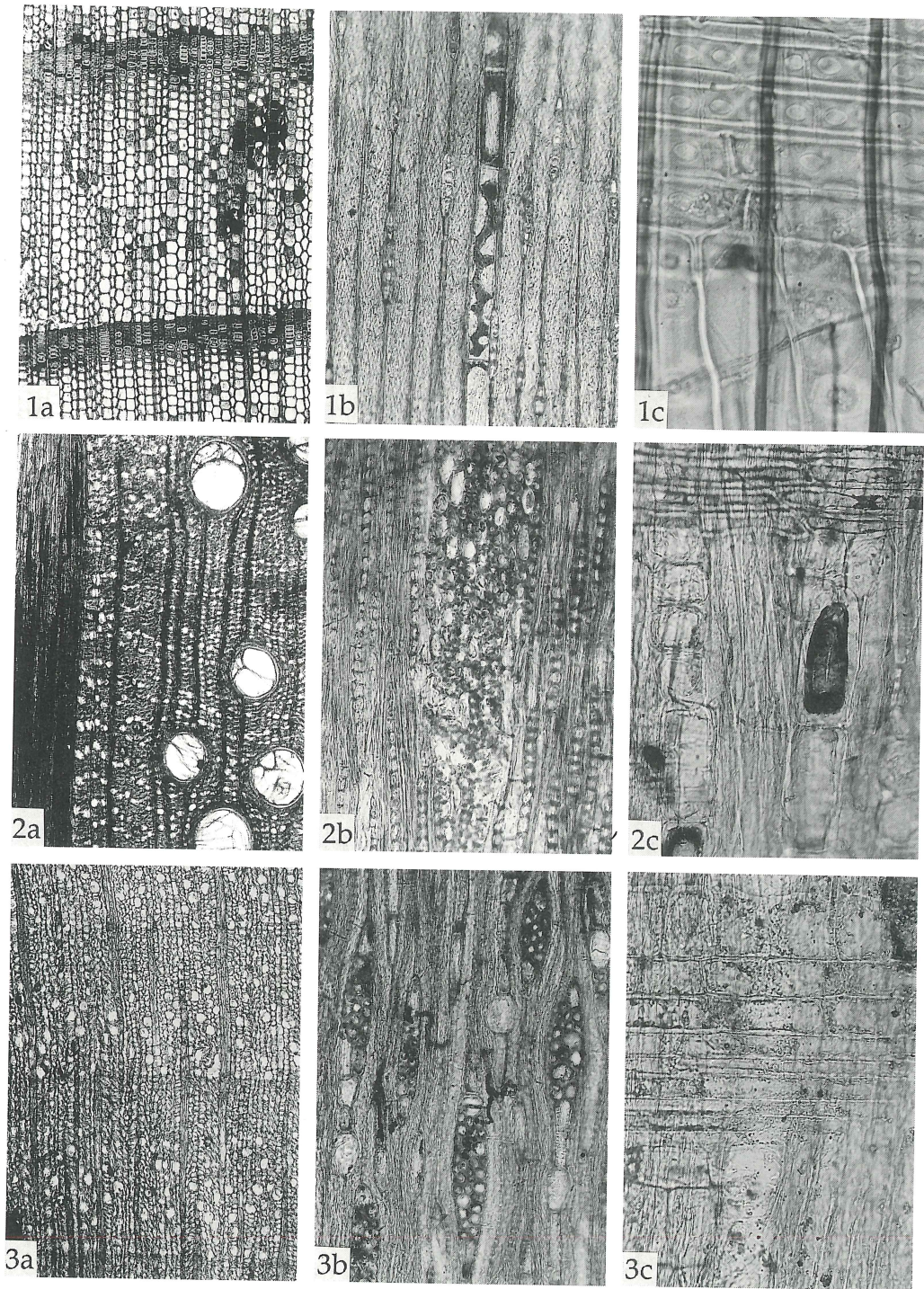


Fig. 175 大分県植田市遺跡から出土した木製品の顕微鏡写真

1a-1c: スギ(OITA-25), 2a-2c: コナラ属アカガシ亜属(OITA-22), 3a-3c: ツバキ属(OITA-23).
 a: 横断面x40, b: 接戦断面x100, c: 放射断面x400 (1c) またはx200 (2c, 3c).

(2) 植田市遺跡出土赤彩土器の科学的調査

成瀬正和 (宮内庁正倉院事務所)

本田光子 (別府大学)

岡田文男 (京都造形芸術大学)

はじめに

植田市遺跡出土の丹塗磨研土器 3 点について、赤色顔料の種類と塗彩技法を明らかにするため、X線分析 (蛍光 X線分析・X線回折) および断面薄片試料の光学顕微鏡観察を実施した。また比較のため下黒野遺跡出土の丹塗磨研土器 7 点についても同様な調査を実施した。

縄文時代に用いられた赤色顔料はベンガラ {鉱物名; 赤鉄鉱 (Hematite)、化学式; Fe_2O_3 } と朱 {鉱物名; 辰砂 (Cinnabar)、化学式; HgS } の 2 種類である。また土器の赤彩技法は土器焼成後に器面に固着成分を含む赤色顔料を塗布するもの (以後焼成後塗彩土器と称す) と、土器焼成前に器面に赤色顔料または鉄分を多く含む原料を塗って、焼成によって赤く焼き付けるもの (以後焼成前塗彩土器と称す) との 2 種類がある。これらのことを念頭におき、調査を行った。

試料

試料に用いた植田市遺跡出土土器 3 点 (OW01~03) および下黒野遺跡出土土器 7 点 (OS01~07) の実測図を掲げる (Fig.176)。

方法

(1) 蛍光 X線分析

赤色顔料の主成分元素の検出を目的として実施したものである。土器片をそのまま試料として用いた。装置は宮内庁正倉院事務所設置の理学電機工業 (株) 製蛍光 X線分析装置を用い、X線管球; クロム対陰極、印加電圧; 40kV、印加電流; 20mA、分光結晶; フッ化リチウム、検出器; シンチレーション計数管、ゴニオメーター走査範囲 (2θ); $10\sim 65^\circ$ の条件で行った。その他の諸条件は適宜設定した。

(2) X線回折

赤色の由来となる鉱物成分の検出を目的としたものである。試料には土器片そのままを用いた。装置は宮内庁正倉院事務所設置の理学電機 (株) 製文化財測定用 X線回折装置を用い、X線管球; クロム対陰極、フィルター; バナジウム、印加電圧; 25kV、印加電流; 10mA、検出器; シンチレーション計数管、発散および受光側スリット; 0.34° 、照射野制限マスク (通路幅); 4 mm、ゴニオメーター走査範囲 (2θ); $30\sim 66^\circ$ の条件で行った。その他の諸条件は適宜設定した。

(3) 光学顕微鏡観察

植田市遺跡出土土器のうち 2 点と下黒野遺跡出土土器 3 点から赤彩された器面を含む数 mm 角の試料を採取し、エポキシ樹脂に包埋し、数 μm に研磨して薄片試料とし、透過光下で顕微鏡観察を行った。

結果

(1) 顔料の種類

蛍光 X線分析および X線回折の結果と、それによって明かとなった顔料の種類を表に掲げる。蛍光 X線分析では水銀および鉄の有無のみ表中に記してある。土器試料ではこのほか、マンガン、ストロンチウム、ルビジウムなどの元素が検出されるが、それらはみな主として胎土部分に由来するものなので省略した。但し鉄は胎土部分にも必ず含まれるため、土器片そのものを試料として用いる分析では、じっさいは赤色顔料由来のものと土器胎

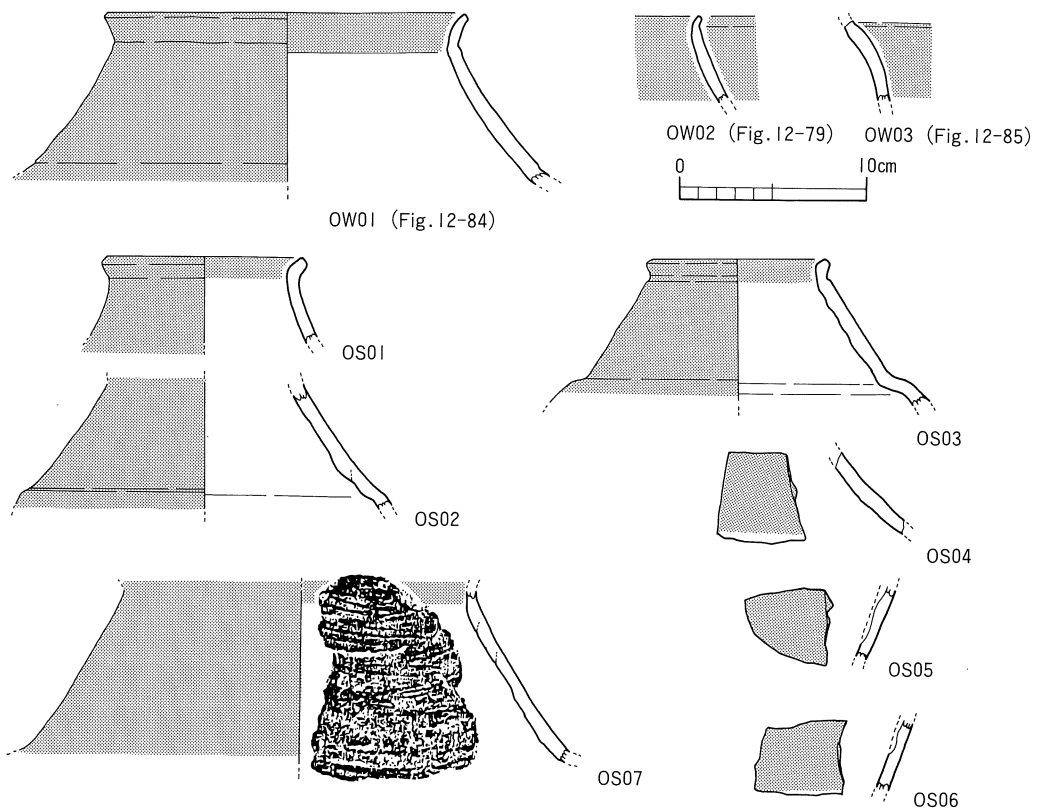


Fig. 176 分析試料 (S = ¼ OW01~OW03 植田市遺跡 OS01~OS07 下黒野遺跡)

	X線回折		蛍光X線分析		顔料の種類
	赤鉄鉱	辰砂	鉄 (Fe)	水銀 (Hg)	
OW01	+	-	+	-	ベンガラ
OW02	+	-	+	-	ベンガラ
OW03	-	-	+	-	ベンガラ
OS01	+	-	+	-	ベンガラ
OS02	+	-	+	-	ベンガラ
OS03	+	-	+	-	ベンガラ
OS04	+	-	+	-	ベンガラ
OS05	+	-	+	-	ベンガラ
OS06	+	-	+	-	ベンガラ
OS07	+	-	+	-	ベンガラ

Tab. 11 X線分析結果と顔料の種類

土由来のものを区別することは困難である。またX線回折では硫化水銀、赤鉄鉱の有無のみについて記した。土器試料ではこの他、石英、長石などが確認されたが、それは主として胎土部分に由来するものなので、やはり省略した。

赤色顔料の付着量が少ないものについては、X線回折では赤色顔料に由来する鉱物が検出できない場合もあり、このような試料については最終的には水銀の有無を顔料同定の決め手とした。すなわち水銀が検出される試料は朱、検出されないものはベンガラと考えた。

いずれの土器試料も蛍光X線分析によって鉄が検出されかつ水銀は検出されていない。またX線回折によって1点(OW03)を除いては赤鉄鉱が検出された。OW03も含め、いずれも赤色顔料にはベンガラが用いられていると考えられる。

(2) 赤色塗彩技法

Fig.177— a)～e)に植田市遺跡の丹塗磨研土器OW01・02および下黒野遺跡の丹塗磨研土器OS01・OS03・OS07の顕微鏡写真を示す。

赤色顔料層は植田市遺跡のOW01が最大で25 μ m、OW02が最大で120 μ m、また下黒野遺跡のOS01が最大で75 μ m、OS03が最大で100 μ m、OS07が最大で50 μ mであり、いずれもかなり不均一である。赤色顔料層は胎土と明瞭に区別できるものの、土器表面と赤色顔料層の境は細かく入り組んでいる。

焼成後塗彩土器の典型例として、埼玉県大宮市寿能遺跡出土縄文中期加曾利E式の浅鉢形土器の断面顕微鏡写真を示す(Fig.177— f))。比較的平滑な土器器面の上に厚さ25 μ mの漆層、その上に厚さ200 μ mの単層のベンガラ漆層が塗られている。間に漆層を挟んでいることもあるが、土器と赤色顔料層の境は明瞭である。

焼成後塗彩土器は水はけの良い普通の埋蔵環境のもとでは、顔料の固着成分をすっかり失って、顔料は単に器面に付着した状態で出土することがむしろ一般的である。植田市OW01は赤色顔料の残存状態が良好でなく、表面から見ると赤色がはげ、白っぽい胎土がのぞく箇所が多いが、それでも断面を観察すると、とぎれながらも赤色顔料層がしっかりと器面にくいついている様子が見える。このような状態は固着成分を失った焼成後塗彩土器のそれとは異なる。

考察にかえて

植田市遺跡あるいは下黒野遺跡より出土した丹塗磨研土器に用いられた顔料はベンガラであり、また断面の顕微鏡観察よりその塗彩技法は固着剤を用いぬ焼成前の塗彩であろうことがみてとれた。今回調査した試料についてはそのほとんどから赤鉄鉱が検出されたが、丹塗磨研土器の中には器面より赤鉄鉱が検出されぬものもあり、赤く発色させるために塗布される原料の材質などの解明が今後の課題となる。

考察にかえて、これまで調査した北部九州から中部九州地域における縄文後期から弥生初頭の赤彩土器について、用いられた顔料と塗彩技法の特徴を概観することにする。

縄文後期前葉で宇佐市西和田貝塚は3点の福田KⅡ式の赤彩土器にベンガラが用いられていることを確認している。いずれも顔料は粉末状に残り、焼成後塗彩土器である⁽¹⁾。

縄文後期中葉から後半の赤彩土器は北九州市下吉田遺跡でまとまった資料が出土している。このうち8点について調査を行った⁽²⁾ところ、いずれも用いられた赤色顔料はベンガラで、また焼成後塗彩土器であった。福岡市四箇・四箇東遺跡出土の資料については、1点の西平式が朱、12点の三万田式土器は10点がベンガラ、2点が朱であり、いずれも焼成後塗彩土器である⁽³⁾。

縄文晩期前半の赤彩土器については福岡市脇山遺跡⁽⁴⁾より出土した7点と北九州市貫川遺跡⁽⁵⁾より出土した13点について調査を行っている。いずれも使用された顔料はベンガラである。顔料は主として沈線内に粉末状に付着しており、焼成後塗彩土器である。

以上述べた晩期前半までの諸例は、いずれも肉眼では塗膜状のものは認められない。関東、東北の焼成後塗彩

土器は低湿地遺跡の出土例をふまえると、ほとんどが本来漆を固着成分として用いたものと推定できるが、九州の縄文後期のそれについては果して漆を用いたものかどうか確信が持てない。四箇遺跡では後期中葉の木刀状漆器も出土しており、土器にも当初漆が使用されたのなら漆塗膜が残ってもおかしくない埋蔵環境である。

縄文晩期後半の赤彩土器については、北九州市内の3遺跡より出土した試料の調査をこれまでにやっている。長行遺跡⁽⁶⁾出土の8点のうち6点、上清水遺跡⁽⁷⁾出土の4点のうち4点、貫川遺跡⁽⁸⁾出土の6点のうち5点は土器器面に赤色塗膜の残存が肉眼でも認められた。このうち断面薄片の顕微鏡観察を行った上清水遺跡の試料については、それが漆塗膜であることが確認された。これらのことから北部九州では縄文晩期後半には漆に赤色顔料を混和して用いる焼成後塗彩が一般的であることがわかる。顔料の種類は朱とベンガラのどちらか、または両方が用いられている。

夜臼～板付期には丹塗り磨研土器が出現する。これについては植田市遺跡例・下黒野遺跡例でも確認したように顔料はベンガラが用いられ、また焼成前塗彩の技法が採用されている。同様な結果は福岡市那珂遺跡第14・21次調査⁽⁹⁾出土の8点の丹塗り磨研土器についても確認している。ただこの時期に比定される四箇遺跡の赤彩土器⁽¹⁰⁾には漆塗膜が認められるものがあり、前代の塗彩技法の伝統を残すものも存在したようである。またこの時期には赤色顔料で細い文様を描く彩文土器が出現する。福岡市比恵遺跡第25次調査⁽¹¹⁾および第30次調査⁽¹²⁾出土の26点、福岡市藤崎遺跡⁽¹³⁾出土の1点について調査を実施したが、ベンガラの使用例が優勢であるものの、朱の使用例が5例、朱とベンガラの併用例が1例確認されている。彩色は焼成後であるが、明瞭な塗膜が認められるものではなく、顔料の固着剤に何を用いたかは不明である。

本調査を実施するにあたり、大分県教育庁文化課坂本嘉弘氏・吉田寛氏には大変お世話になりました。記して感謝いたします。

(注1) 大分県教育委員会坂本嘉弘氏のご厚意により分析の機会をいただいた。

(注2) 北九州市教育文化事業団の佐藤浩司氏のご厚意により分析の機会をいただいた。

(注3) 成瀬正和(1987)「四箇遺跡出土の赤彩土器について」『四箇遺跡』福岡市教育委員会

(注4) 本田光子・成瀬正和(1992)「土器の赤色塗彩に用いられた赤色顔料について」『脇山Ⅳ』、福岡市教育委員会

(注5) 成瀬正和(1994)「貫川遺跡の赤彩土器に使用された赤色顔料」『貫川遺跡8』北九州市教育文化事業団

(注6) 成瀬正和(1983)「長行遺跡の赤色塗彩土器について」『長行遺跡』北九州市教育文化事業団

(注7) 岡田文男・成瀬正和・本田光子(1993)「上清水遺跡出土土器の赤色塗膜について」『上清水Ⅰ区遺跡(縄文～古墳時代編)』北九州市教育文化事業団

(注8) (注5)に同じ

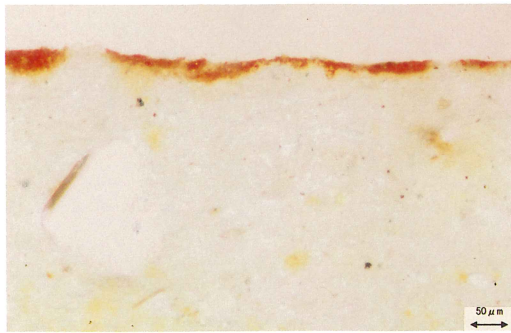
(注9) 本田光子・成瀬正和(1992)「赤色顔料について」『那珂5』福岡市教育委員会

(注10) 本田光子・岡田文男・成瀬正和(1991)「彩色された土器と木器」『四箇遺跡群24次調査』福岡市教育委員会

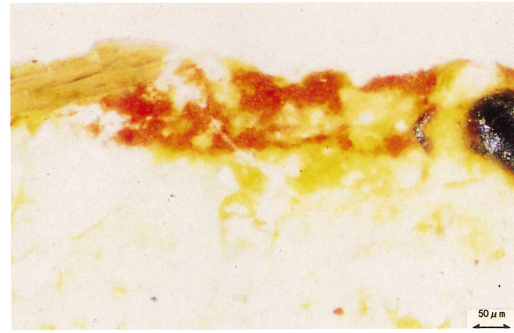
(注11) 成瀬正和・本田光子・岡田文男(1991)「彩文土器、木胎漆器等の赤色顔料について」『比恵遺跡群10』福岡市教育委員会

(注12) 本田光子・成瀬正和(1992)「土器の赤色塗彩に使われた赤色顔料について」『比恵遺跡群11』福岡市教育委員会

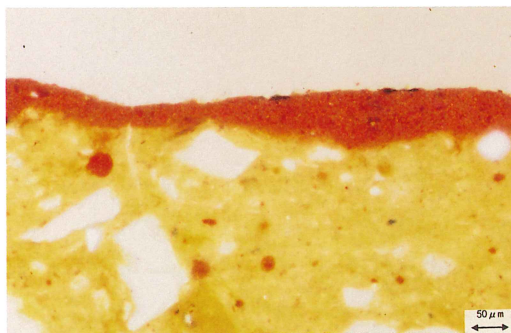
(注13) 本田光子(1986)「小型彩文壺型土器に用いられた赤色顔料について」『藤崎遺跡Ⅳ』福岡市教育委員会



a) OW-01



b) OW-02



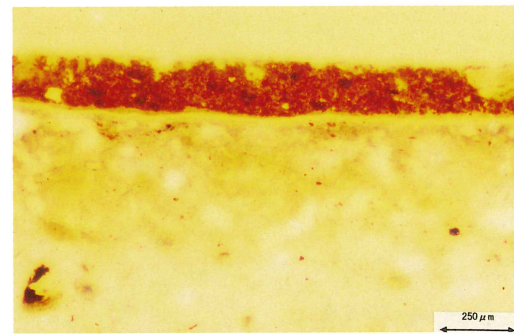
c) OS-01



d) OS-03



e) OS-07



f) 埼玉県寿能遺跡出土赤彩土器の断面写真

Fig. 177 穂田市、下黒野遺跡出土赤彩土器の断面写真